

さ

齋鹿逸郎 (さいか・いつろう/1928年～)

鳥取県生れ。1943年県立日野農林学校入学、歌人・文人画家、早川幾忠、辻晉堂の教えを受ける。51年上京、代々木絵画研究所に通う。53年絵画研究所の仲間とグループ展を開催(東横画廊)。59年米子市皆生に居を構える。このアトリエから後の鉛筆画が生まれる。60年個展(村松画廊) 最初の個展 アンフォルメル調の作品を発表。64年個展(村松画廊) 最初の鉛筆画の発表。65年個展(秋山画廊) 画廊の壁面、天井、床を鉛筆画で埋め尽くす作品を発表。シロタ画廊、お茶の水画廊、俵屋画廊(京都)等で個展。鉛筆画

雑賀紀光 (さいが・きこう/1911～1911年)

和歌山県生れ。1931年 和歌山市師範学校専攻科卒、文検合格。在学中光風会、白日会、太平洋画会、日本水彩画展等に入選。36年帝展第二部入選、37年文展入選。平山達郎氏にヴァイオリンを学ぶ。松旭齋天勝、金沢天耕、両氏に奇術を学ぶ。和歌山師範・海南高校・和歌山商業をはじめ和歌山市、海南市の各学校で教鞭をとる。58年「海南風土記」を出版。62年文部大臣表彰。79年海南市文化賞受賞。新構造社会員、海南市観光協会幹事、海南文化協会委員、海南郷土史編集委員、県展・市展審査員、日本美術家連盟会員、光彩会顧問、など歴任。銀座中央美術画廊等で個展開催 25 回。和歌山県で没、82エアー!ブックマークが定義されていません。

西郷孤月 (さいごう・こげつ/1873～1912年)

長野県生れ。1889年東京美術学校絵画科卒、第1期生、卒業制作作品が宮内庁買上げ、同校研究科に進み、96年助教授。98年岡倉覚三、師の橋本雅邦と辞職し、日本美術院の創立に参加、評議員。雅邦の娘と結婚、将来を期待されたが、のち離婚し、放浪生活をおくる。1912年没、38歳。日本画家

西光亭芝国 (さいこうてい・しばくに/生没年不明)

大坂両国橋にすむ。寿好堂よし国の門人。大坂の役者絵をえがく。文政-天保(1818-44)ごろの人。別号に清画堂など。号はしば国、志葉国ともかく。江戸時代後期の浮世絵師

蔡 國華 (さい・こっか、Cai Guohua/1964年～)

上海市生れ。1988年来日。97年武蔵野美術大学大学院修了。99年オーストラリアへ移住。01年再来

日、スタジオ・ツァイ開設。03年東洋気流-日本現代作家21人展in上海を企画。2006年梅野記念絵画館で個展。洋画家

サイタ 亨 (さいた・とおる/1903～1987年)

熊本県生れ。九州大学医学部に進学。1933～40年医師として台湾に渡る。48年[独立美術協会]会友。49年宮崎で開業。[宮崎県水彩画会]を創立し、50年上京。60年[独立美術協会]退会。その後[新象作家協会]会員。77年[水彩連盟]展で小堀進賞。1987年没、84歳。87年[水彩連盟]展に[サイタ亨]賞。水彩画家

齋藤五百枝 (さいとう・いおえ/1881～1966年)

千葉県生れ。1908年東京美術学校西洋画科卒。文展に出品。白馬会展に入選。卒業後は岡田三郎助に師事。大正、昭和初期にかけて新聞、雑誌の挿絵画家として活躍。新聞の美術記者、日活映画の美術部主任等の職に従事。晩年は染色の研究。東京で没、84歳。洋画家、挿絵、版画

齋藤 修 (さいとう・おさむ/1946年～)

島根県生れ。1977年独学にて木口木版を始める。81年日本版画協会展出品(82年準会員推挙)。84年カダケス国際ミニプリント展(スペイン)・85年大賞。90年ミヤコ版画賞展(大阪)・受賞。92年世界蔵書票作家展(92年札幌、94年ミラノ、96年ブラハ)。94年ソウル国際版画ビエンナーレ・優秀賞。99年個展(養清堂画廊・銀座、Gallery Island・オスロ)。2001年CWAJ 現代版画展(東京アメリカンクラブ・神保町)。版画家

齋藤カオル(さいとう・かおる/1932年～)

神奈川県生れ。1948年旧横須賀中学校卒。1949年アカデミー美術研究所修了。52～68年モダンアート展に油彩出品。68年からメゾチント銅版画制作。72年春陽会賞、74年春陽会会員、95年理事長。82年(～91年)版画集『源氏物語』(西武百貨店)刊行。84年個展(NY・ヴォーパル画廊)、個展(ワシントンD.C.・ジャッジ画廊)。86年個展(ビバリーヒルズ・ロバートソン画廊)、カーネギーメロン大学で版画セミナー。98年水墨画・版画展(東武百貨店)。版画家、洋画家

斎藤 要 (さいとう・かなめ/1955年～)

神戸市生まれ。1973年デザイン学校に学ぶ。77年現美展、新人賞入選、81年会員推挙。91年米取材。85年二元会会員・新人賞・努力賞、90年ヨーロッパ賞。89年欧州取材。個展で発表。洋画家

佐藤吉五郎 (さとう・きちごろう/1910～1986年)

新潟県生まれ。藤田嗣治、岡田謙三に師事。二科展努力賞、東郷青児賞など。1947年二科会会員。65年渡欧、サロン・ドートンヌ展出品。東京に住し個展開催。東京で没、76歳。洋画家

斎藤 清 (さいとう・きよし/1907～1997年)

福島県生まれ。独学で木版画技法確立。1932年白日会展入選。33年東光会展入選。35年国画会展入選。36年日本版画協会展入選。44～54年朝日新聞社勤務。51年サンパウロ・ビエンナーレ在聖日本人賞。57年リュブリャナ国際版画ビエンナーレ、アジア・アフリカ諸国国際美術展受賞。69年カナダ・グレータービクトリア美術館、アメリカ・サンディエゴ美術館個展開催。76年福島県県外在住者知事表彰。81年勲四等瑞宝章。95年文化功労者。97年 福島県柳津町にやないづ町立斎藤清美術館。1997年没、90歳。版画家

齋藤 研 (さいとう・けん/1939年～)

東京生まれ。1964年東京芸術大学油画専攻科修了、大橋賞、同校副手～助手(～68年)。65年独立賞。67年独立美術協会会員。75年昭和会展優秀賞。80～81年文化庁派遣芸術家在外研修員として渡欧。多数の個展、企画グループ展に出品。2004年川越画廊で個展。04年女子美術短期大学教授退任。洋画家、美教

斎藤紅一 (さいとう・こういち/1907～1996年)

東京生まれ。同舟舎、太平洋画会研究所に学ぶ。「一九三〇年協会」展に入選、独立展に出品、1956年独立賞、63年独立美術協会会員。日野市にアトリエの作品を寄贈。立川市で没、89歳。洋画家

斎藤吾朗 (さいとう・ごろう/1947年～)

愛知県生まれ。1971年多摩美術大学大学院美術研究科修了。73年渡欧、ルーヴル美術館で《モナ・リザ》公認模写。74年シェル美術賞展 2 等賞。75年独立賞、海老原賞、84年独立会員。86年個展(NY・日本クラブギャラリー)。88年愛知県芸術選奨文化賞。94年「斎藤吾朗版画集」(ヴィレッジ出版)発行。98年「モナ・リザ」から赤絵「風土記」斎藤吾朗の世界展(伊

東・池田 20 世紀美術館)。2002年NY・グランドゼロ追悼路上展実行委員長。12年『斎藤吾朗作品集』(求龍堂)発行。17年斎藤吾朗の“描けば描くほどモナ・リザから赤絵へ”(刈谷市美術館, 愛知)。洋画家、版画

斎藤三郎 (さいとう・さぶろう/1917～1996年)

熊谷市生まれ。1940年東京物理学校(東京理科大)中退。独学で絵を学ぶ。46年二科展に入選、48年二科展で特待賞、50年二科展で二科賞、54年二科会会員、60年二科会努力賞。61年パリ賞で62年フランス、スペインに游学。スペインの踊り子や風景を描いた。72年二科展で内閣総理大臣賞。埼玉県文化賞。浦和市で没、78歳。洋画家

斎藤寿一 (さいとう・じゅいち/1931～1992年)

川崎市生まれ。川崎高卒。加山四郎に油彩画を学ぶ。1958年パリに留学、S・ヘイターのアトリエ17で学ぶ。浜口陽三に師事し、銅版画を始める。59年から各地の国際版画展に出品。60年シェル美術賞。75年川崎市文化賞。76年和光大学教授。壁画、レリーフ手がける。東京で没、61歳。版画家、洋画家、壁画

斎藤真一 (さいとう・しんいち/1922～1994年)

倉敷市生まれ。1948年東京美術学校師範科卒。57年光風会展でプールヴー賞。59年渡仏、藤田嗣治と親交。62年警女シリーズを描く。71年安井賞展で佳作賞。73年日本エッセイスト・クラブ賞。74年从展に出品。不忍画廊で個展(没後も度々開催)。93年出羽桜美術館分室・斎藤真一心の美術館。東京で没、72歳。2003年岡山県立美術館で個展。洋画家

齋藤真成 (さいとう・しんじょう/1917年～)

名古屋生まれ。1940年龍谷大学文学部仏教学科卒。43年真如堂・東陽院住職。45年行動美術協会京都研究所に学ぶ。52～95年行動美術協会会員。表現主義的作調から抽象へ。65～70年京都教育大学特修美術科教授。78年個展(パリ・FIAC など～82年)。西安女子短期大学講師。87年京都府文化功労賞。88年京都府文化功労者顕彰。97年「齋藤真成展」(大阪・国立国際美術館)、京都市美術文化賞。99年真如堂53世貫主就任。2004年京都府文化特別功労賞。洋画家、美教

斎藤素巖 (さいとう・そがん/1889～1974年)

東京生まれ。1912年東京美術学校西洋画科卒。13年ロンドンのロイヤル・アカデミーに学んで彫刻に転じた。15年帰国後、文展、帝展。26年に日名子実三

と構造社を創立。27年より展覧会を開催、出品。35年帝国美術院会員。337年帝国芸術院会員。戦後は日展に作品を発表。浮彫の大作が得意で典雅な作風を示す。47年日本芸術院会員。東京で没、84歳。彫刻家

齋藤 隆 (さいとう・たかし/1943年～)

東京生れ。独学で絵を描き始め、1963年読売アンデパンダン展で注目。75年山種美術館賞展推薦出品。76年从展招待出品。79年明日への具象展招待出品。84年「横の会」参加。85、88年彩鳳堂画廊個展。池袋西武百貨店で個展。88年福島県立美術館での「日本画と現代-今を生き、そして描く」展選抜出品。93年宮城県美術館での「異形のFigure-東北の3人展」出品。無所属の異色作家として現在も個展を中心に制作。日本画家

齋藤武士 (さいとう・たけし/1943年～)

山梨県生れ。1971年武蔵野美術大学油絵学科卒。独学で銅版画を学ぶ。日本版画協会を中心に作品を発表しながら、国際版画展にも精力的に出品し、1984年クラコウ国際版画ビエンナーレで最高賞。国際展で高い評価。代表作である《メモリー》シリーズは、作家の記憶の中の日常的な光景、出来事を形象化。初期作品ではアスファルトの微粉末が創り出す繊細なメグチントの技法により、深い色調のある画面。1990年代コラグラフ等様々な版画技法を併用表現。画風も抽象的な傾向を強める。版画家

齋藤武士II (さいとう・たけし/1943年～)

山梨県生れ。1971年武蔵野美術大学卒。1984年クラコウ国際版画ビエンナーレ(ポーランド、86、97年招待)・85年最高賞、86年国立美術館買上賞。86年ノルウェー国際版画ビエンナーレ(招待)・ノルウェー現代美術館買上。88年現代日本の版画8人展(GRAFISKA SALLSKAPET・スウェーデン)、現代日本の版画10人展(JOHN SZOKE GALLERY・ニューヨーク)。90年中華民国国際版画ビエンナーレ(台北)・台北近代美術館賞。2001年CWAJ 現代版画展(東京アメリカンクラブ・神保町)。版画家

齋藤種臣 (さいとう・たねおみ/生年不詳～1944年)

千葉県生れ? 1926年東京美術学校西洋画科を卒業。22年中央美術展に油彩画、25年白日会展に油彩画を出品。26年日本水彩画会展に木版画が入選。1926年東京美術学校西洋画科卒。卒業後は白日会展26、28、29年。光風会展27～30年出品、28年帝展に油彩画が入選。36年の文展無鑑査展にも

出品。ビルマ新聞のグラフ編集部長となり、軍属としてラングーンに赴いたが、1944年没。洋画家、木版画

齋藤千明 (さいとう・ちあき/1966年～)

茨城県生れ。1989年東京芸術大学美術学部油画科卒、卒業制作台東区長賞。91年同大学院美術研究科版画専攻修了、大橋賞。93年まちだ国際版画展買上賞。96年ART BOX 大賞展版画芸術賞。2004年川上澄生美術館木版画大賞展大賞。内外公募展招待展出品と個展多数。版画家

齋藤長三 (さいとう・ちようぞう/1910～1994年)

山形県生れ。1932年東京高等工芸学校図案科卒。35年独立展でD賞。40年独立展で岡田賞。47年独立賞。49年独立美術協会会員。57年渡仏。56年武蔵野美術大学教授、日大芸術学部講師。60年八重洲・大丸で個展。73年山形美術博物館で個展。81年渡伊。東京で没、83歳。洋画家、美教

齋藤徳三郎 (さいとう・とくさぶろう/1901～1983年)

1901年生れ。岸田劉生、中川一政、椿貞雄に師事。武者小路実篤の新しき村づくりに参加。25年より春陽会展に出品。25年久泉共三、竹添履信と東京丸善で小品展。大調和会展に出品。戦後、日本板画院参与、58年茨城で棟方志功と二人展。水戸市で没、82歳。洋画家

齋藤 智 (さいとう・とも/1936～2014年)

1963年東京芸術大学油絵科卒。72年ジャパニアートフェス優秀賞。74年フルブライト留学。75年ジャパニアートフェス大賞。76年東京国際版画ビエンナーレ大賞。79年神戸市文化奨励賞。80年ノルウェー国際版画ビエンナーレ大賞。83年国際版画展(W.P.C) Edition買上賞。版画家

齋藤豊作 (さいとう・とよさく/1880～1951年)

埼玉県生れ。1905年東京美術学校西洋画科選科卒。06～12年渡欧、ラファエル・コランに師事。12年光風会展に出品。13年文展に出品。14年二科会創立会員、監査委員。フランス人と結婚。19年再渡仏、仏で没、71歳。洋画家

齋藤輝昭 (さいとう・てるあき/1942年～)

福島県生れ。1969年武蔵野美術大学卒。70年同大学油絵専攻科修了。作品がソプリ賞を受賞して渡仏。パリに15年間滞在、抽象画家として活動。85年パリ国立美術館に版画5点収蔵。同年、帰国し絵画教室

を開設。92年中央競馬会が買上げ。2012年東日本大震災チャリティー個展。**洋画家**

斎藤典彦（さいとう・のりひこ/1957年～）

神奈川県生れ。1980年東京芸術大学大学美術学部日本画科卒、82同大学院美術研究科修士修了。東京藝術大学大学院博士後期課程満期退学。89年山種美術館賞展優秀賞、創画展創画会賞(92・93・97)。99年個展「Luminous:内なる光」(高島屋)。2007年平塚市美術館で個展。**日本画家**

斎藤秀三郎（さいとう・ひでさぶろう/1922年～）

宮崎県生れ。九州大農学部水産学科卒、教員生活の傍ら、美術活動を続けた。1957年に結成された前衛美術家集団「九州派」に加わったこともある。平面、立体、インスタレーションを問わず、社会的視座を作品に定着させている。90代半ばを迎えた今も第一線の現役。2008年福岡アジア美術館交流ギャラリーで個展。**洋画家、版画、立体、インスタ、九**

斎藤廣胖（さいとう・ひろのぶ/1898～1987年）

北海道生れ。日本美術学校に学ぶ。1929年帝展入選。以後、帝展、新文展で入選を重ねる。44年戦時特別美術展無鑑査。元旺玄会創立委員。全道展創立会員。柏市で没、89歳。**洋画家**

斎藤博之（さいとう・ひろゆき/1919～1987年）

奉天市生れ。奉天第一中学校卒。1941年独立展入選。39～43年帝国美術学校洋画科卒。52年資生堂ギャラリー、53年タケミヤ画廊、56年村松画廊で個展。70年以降挿絵の仕事が多くなり、水墨画制作。71年講談社出版文化賞絵本賞。73年小学館絵画賞。87年没、67歳。**洋画家、挿絵、絵本**

齋藤博之（さいとう・ひろゆき/1956年～）

函館市生れ。1976年奈良芸術短期大学卒。79年北海道美術協会 道展出品。88年道展、北海道美術協会賞。89年安井賞展入選。90年道展 会友賞。2002年北の大地ビエンナーレ展、北海道知事賞。04年損保ジャパン美術財団奨励選抜展出品。**版画家**

斎藤二男（さいとう・ふたお/1904～1976年）

1904年広島県呉市八幡上通生れ。25年第6回帝展初入選。以後9、14回展出品。同年第2回白日会展初入選。以後3～5回展入選。29年東京美術学校西洋画科卒。33年東京、日本中学校図画教師。36年昭和十一年文展出品。44年盛岡市に疎開。52年

第11回創元会展入選、会員。以後、12、16、17、19、20、28回展に出品。52年第8～9日展出品、以後、12、13回展に出品。60年後半から身体不調が続く。1976年没、71歳。**洋画家、美教**

サイトウ マコト（さいとう・まこと/1952年～）

福岡県生れ。福岡県立小倉工業学校卒。1976年日本デザインセンターに勤め、82年独立デザイン事務所設立。ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ、ラハティ国際ポスタービエンナーレ、世界ポスタートリエンナーレ・トヤマ受賞。切り抜いて修正した写真を巧みに使ったコラージュに絵画の要素を取り入れて構成された作品を発表し続け、国内外で高い評価を受ける。その作品は、ニューヨーク近代美術館をはじめ世界20ヶ所以上の美術館にも収蔵されている。**デザイナー、カラー**

斎藤正夫（さいとう・まさお/1912～2000年）

秋田県生れ。立教大学卒。師・藤田嗣治・海老原喜之助。新制作会員。新制作新作家賞2回受賞、毎日現代展招、朝日新人賞、クリチック展国内大賞。個展多数開催。馬を描き続け、馬以外にも人物、静物、宗教画など、独自の感性で表現された作品は高い評価を得た。立教大学に「芸術研究会」を創設～「サパンヌ美術クラブ」の発展に寄与。2000年没、88歳。2000年白河市に油彩画ほか1600点を寄贈。白河市歴史民俗資料館に展示。**洋画家、美教**

斎藤無沙史（さいとう・むさし/生没年不詳～）

1932年松田昇太郎・大村喜昭と「好刻会版画展」(2.13～日本橋・白木屋)開催。40年赤坂治郎・富士原房・榎岡良と「木津津木会」を結成し、創作版画集『きつゝき』を創刊。第1号(1940.3 20部限定)の編輯を担当し、木版画《表紙》《[石焼き芋屋]》《角兵衛》《思出の新川》を発表した。**版画家**

齋藤 求（さいとう・もとむ/1907～2003年）

鶴岡市生れ。1932年東京美術学校油絵本科卒。40年日本水彩画会賞。41年独立美術協会賞。91年独立美術協会会員功労賞。鶴岡の母校で美術教師、山形大学美術講師、美術教育に貢献。94年鶴岡市文化功績賞。東京で没、96歳。**洋画家、美教、水彩**

齋藤芽生（さいとう・めお/1973年～）

東京都生れ。1996年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒。2001年同大学院博士課程修了。10年「VOCA展2010」で佳作賞、大原美術館賞。10年アートプロジェクト「隅田川新名所物語」(「GTS(芸・

台東・墨田観光アートプロジェクト)」の一環)実施。
(ギャラリー・アートアンリミテッド:東京都港区)で個展。
06年「晒野団地四畳半詣」(ギャラリー・アートアンリミ
テッド:東京都港区)、08年「都市隠棲類図鑑 part1
『徒花園』」、09年「遊隠地／百花一言絶句」等。**洋画
家**

斎藤八十八 (さいとう・やそはち/1892～1941年)

東京生れ。東城鉦太郎に師事。1910年第4回文展
に初入選。第13回白馬会展に出品。12年第1回光
風会展に出品。41年3月4日南中国西江で戦死、享
年49歳。(佐)**洋画家**

斎藤義重 (さいとう・よしげ/1904～2001年)

弘前市生れ。1933年駿台アヴァンガルド洋画研究
所入所、古賀春江、東郷青児に師事。39年美術文化
協会の創立に参加。57年日本国際美術展でK氏賞。
58年東京画廊で個展。60年日本国際美術展で最優
秀賞。サンパウロ・ビエンナーレ展で国際絵画賞。64
～73年多摩美術大学教授。78年東京国立近代美術
館で個展。84年東京都美術館、大原美術館等5館の
巡回、「斎藤義重展」。横浜市で没、97歳。**洋画家、
立体、美教**

斎藤吉郎 (さいとう・よしろう/1911～2000年)

北海道生れ。北海道庁立小樽中学卒、1937年東
京の構造社研究所で斎藤素巖に師事。40年造社展
入選し、40年紀元二千六百年奉祝展に入選。43年
構造社展で研究賞。49年日展で特選、52年日展特
選・朝倉賞。61年日展審査員を務め、62年日展会員、
68年日展評議員、92年日展参与。75年紺綬褒章。
主にブロンズ像を手がけ、写実を基調としながら、流
れるような線で全体を優雅にまとめる作風に定評があ
った。東京で没、88歳。**彫刻家**

斎藤与里 (さいとう・より/1885～1959年)

埼玉県生れ。聖護院洋画研究所に学ぶ。1906～0
8年渡仏。帰国後、後期印象派を紹介。12年ヒュウザ
ン会(後のフェウザン会)を結成。文展で特選。第8回
帝展で特選。春陽会会員。槐樹会創立会員。東光会
創立会員。帝展、日展の審査員。東京で没、73歳。
(出典 わ眼)**洋画家、版画**

斎藤与里 II (さいとう・より/1885～1959年)

埼玉県生れ。1905年京都にて聖護院洋画研究所に
学ぶ。06年鹿子木孟郎と渡仏。アカデミー・ジュリア
ンでジャン＝ポール・ローランスに師事。10年帰国。
岸田劉生らとヒュウザン会(後のフェウザン会)創立。
15年第9回文展に初入選。16年第10回文展で特
選。18年大阪に移る。矢野橋村の大阪美術学校に協
力し洋画指導。春陽会会員。24年槐樹社創立。雑誌
「美術新論」発行。27年第8回帝展で特選。以後無鑑
査出品。32年熊岡美彦らと東光会創立。34年帝展審

査員。以後審査員13回。51年日展参事。58年埼玉
県文化賞。59年日展評議員。恩賜賞候補となる。加
須市名誉市民第1号となる。59年5月3日没、享年
74歳。(佐)**洋画家、版画**

斎藤隆三 (さいとう・りゅうぞう/1875～1961年)

千葉県生れ。斎藤家は江戸時代の下総国関宿藩領
のうち10ヶ村の惣名主を務めた家で、先祖に小林一
茶に学んだ俳人斎藤徳左衛門(俳号「若雨」)、長兄
に元衆議院議員の斎藤斐がいる。東京帝国大学在
学中に郷土である守谷の歴史をまとめた「守谷志」を
刊行し、1902年東京帝国大学卒業以後50年以上に
渡り、美術史や国内の世相史を中心に執筆を行った。
他には郷土守谷の郷土史執筆や文化財の保護に尽
力し、前述の守谷志をはじめ、28年ごろには「守谷歴
史絵葉書」を作成し、守谷の文化財の保護をPRして
いる。また、日本美術院の再興や発展、運営にも深く
関わっていた。**美術史学者、文学**

佐伯久 (さえき・ひさし/1913～1988年)

鳥取県生れ。1969年一水会賞。70年一水会会員。
研水会委員。外遊多数。1988年没、74歳。**洋画家**

佐伯美和 (さえき・みわ/1913～1976年)

1913年生れ。福沢一郎に師事。新象作家協会創
立会員。美術文化協会会員。76年没、63歳。**洋画家**

佐伯祐三 (さえき・ゆうぞう/1898～1928年)

大阪生れ。17年川端画学校に学ぶ。1923年東京
美術学校西洋画科卒。24～26年渡仏、サロン・ド
ートヌに入選。26年前田寛治らと「一九三〇年協会」
を結成。26年二科賞。27年再渡仏。パリで没、30歳。
洋画家

佐伯義郎 (さえき・よしろう/1918～1979年)

東京生れ。青年期、病氣療養中に独学で絵を学ぶ。
1947年以降、日本書院発行の宮沢賢治童話シリー
ズの挿絵や岩波書店の「広辞苑」の挿絵。69年京都
に転居。爾来フリーにて油絵を主に銅版画、水彩画、
詩集。1979年没、61歳。**洋画家、挿絵、版画**(田村)

佐伯米子 (さえき・よねこ/1903～1972年)

東京生れ。虎の門東京女学館卒。はじめ川合玉堂
に日本画を学ぶ。1921年佐伯祐三と結婚。23～25
年渡仏、ヴラマンクに師事。25年サロン・ドートヌに
入選。帰国後は二科展に出品。27年渡仏、28年夫、
祐三死去、一人娘も死去。40年まで二科展に出品。
46年女流画家協会創立会員。49年二紀会理事。67
年二紀展で文部大臣奨励賞。東京で没、69歳。**洋画**

家

佐伯留守夫 (さえき・るすお/1912～1986年)

宇都宮市生れ。1926年宇都宮中学校に入学し、38年東京美術学校彫刻科木彫部卒。32年小野忠重を中心の「新版画集団」の結成に参加。36年新文展に木彫が入選、彫刻制作を再開する。1960年代半ばまでは日展に木彫作品を出品。58年以降は少年少女をモデルとした多くの立像を設置。1986年没、74歳。彫刻家、版画

三枝茂雄 (さいぐさ・しげお/1920～1989年)

甲府市生れ。東京美術学校日本画科卒。戦後、油彩に転向し、国画会に油彩画を出品、1954年にブルーヴー賞。50歳前後日本画に専心し、71年国画会に、水墨着彩画を出品。高校教員を退職。個展を中心に活動、美術評論家吉村貞司によって水墨画の本領を示す画家として高い評価。1989年没、69歳。日本画家、油彩画、水墨画

五月女幸雄 (さおとめ・ゆきお/1937年～)

宇都宮市生れ。埼玉大学教育学部卒。60年代、読売アンデパンダン展を中心にアヴァンギャルド運動に参加。絵画と彫刻を組み合わせたインスタレーション作品を作り出すと共に、野外、アンダーグラウンド劇場などにて、イベント作品を発表。70～71年「THE BODY—人間商品—」(東京都美術館、スペース・ラボラトリー、ニューヨーク、ジャニス・ギャラリー)で生身の人間をガラスケースに入れて発表。紀伊國屋画廊、パリ、モランタン・ヌヴィオン画廊で個展。国際具象絵画ビエンナーレ、インド・トリエンナーレ、毎日現代美術展、安井賞展に出品。沖縄海洋博記念展で優秀賞、北関東現代美術展で準大賞。86年パリへ移住。サロン・ドートンヌ、ル・サロン、コンパレゾンに出品、コートダジュール国際絵画大賞展、ニュース国際アート・ジョクションに参加。ヨーロッパではサンボリスト(象徴派)と呼ばれ、パリ、ブリュッセル、フィレンツェで定期的に個展開催。サロン・ドートンヌ会員。洋画家、インスタ

酒井丑人 (さかい・あじん/1904～1965年)

千葉県生れ。萱原黄丘に師事、後独学で絵を学ぶ。1937年より院展出品をつづけ、52、53年日本美術院賞・大観賞。作品は渋い色調と、簡化された近代的画面に特色があつて注目された。38年新美術人協会会員。1965年没、60歳。日本画家

境野一之 (さかい・かずゆき/1900～1989年)

福岡県生れ。樺太太泊中学校卒。大連で教職。熊本に戻り52歳まで教職。二科展、独立展、自由美術

協会展に出品。海老原喜之助の画塾で所長。熊本県美術協会委員長。1989年没、89歳。作品は、つなぎ美術館に収蔵。洋画家、美教

坂井犀水 (さかい・さいすい/1871～1940年)

石川県生れ。帝国博物館技手をへて「東京評論」「美術画報」の編集、発行にあたる。1910年「美術新報」主幹。さらに「美術週報」主筆となった。白馬会会員。1913年国民美術協会創立に参加し、同会理事。国民美術協会理事。1940年没、69歳。著作に「画聖ラファエル」「黒田清輝」。美術評論家

酒井三良 (さかい・さんりょう/1897～1969年)

福島県生れ。坂内青嵐に師事、1919年国画創作協会入選。小川芋銭の勧めで21年「災神を焼く残雪の夜」を院展に出品、入選。24年日本美術院同人。62年院展文部大臣賞。東京で没、72歳。日本画家、水彩

酒井精一 (さかい・せいいち/1891～1972年)

東京生れ。郁文館中学校卒、本郷絵画研究所、日本水彩画会研究所に学ぶ。渡仏、アカデミー・コロロンに学ぶ。帰国後、二科展に出品。一水会の創立に参加。54年一水会会員。1972年没、80歳。洋画家、水彩

酒井政一 (さかい・せいいち/1915～1972年)

兵庫県生れ。中之島洋画研究所に学ぶ。新樹会社会員。創造美術会委員。1972年没、57歳。洋画家

酒井信義 (さかい・のぶよし/1944年～)

鎌倉市生れ。1967年東京芸術大学美術学部絵画科卒、69年同校大学院美術研究科修士課程修了。71年東京芸術大学美術学部助手(非常勤)。2000年東京芸術大学美術学部助手(非常勤)。01年日本大学芸術学部教授。68年新制作協会展新作家賞(68～73年出品)。2010年「酒井信義の世界展」諏訪市美術館。洋画家、美教

坂井範一 (さかい・はんいち/1899～1981年)

岐阜県生れ。1922年岐阜高等師範学校卒、26年東京美術学校図画師範科卒、岐阜女子師範、浜松師範で教える。26年より3年連続帝展入選。36年新制作派協会展、39年新作家賞、40年会員。49～62年岐阜大学芸学部芸術科教授。71年岐阜日日賞。81年紺綬褒章。岐阜県で没、82歳。洋画家、美教

坂井範一 II (さかい・はんいち/1899～1981年)

岐阜県生れ。1922年岐阜県師範学校卒。23年東京美術学校図画師範科入学、26年卒。岐阜県女子師範学校に奉職。26年帝展入選。31年再上京、東京美術学校研究科に入り藤島武二に師事。36、39年新制作展で新作家賞。40年新制作派協会会員。52年岐阜県造形教育連盟初代委員長。49～62年岐阜大学学芸学部芸術科教授、愛知女子短期大学、東海女子短期大学で教えた。71年岐阜日日賞。岐阜県で没、82歳。洋画家、美教

酒井英利 (さかい・ひでとし/1948年～)

京都生れ。1971年立命館大学卒。72～82年二科展出品、76年関西二科賞。77年京都新聞社賞、京展紫賞。79年京都画廊連合会選抜作家展フェスティバル賞。82年毎年東京、大阪、京都その他各地デパートにて個展発表。2005年浄土真宗親鸞会の大壁画約30m×H2.5m～3.5mを描く。洋画家

酒井抱一 (さかい・ほういつ/1761～1829年)

江戸生れ。酒井忠仰の次男。播磨姫路藩主酒井忠以の弟。37歳で出家し、1809年江戸根岸に雨華庵をいとむ。絵を狩野高信、宋紫石、歌川豊春にまなび、のち尾形光琳に傾倒。「夏秋草図屏風(びょうぶ)」など琳派風の絵をかいた。俳諧にもすぐれた。名は忠因(ただなお)。字(あざな)は暉真。通称は栄八。別号に鶯村など。句集に「屠竜之技(とりょうのぎ)」。1829年没、67歳。江戸後期の絵師、俳人

堀 保博 (さかい・やすひろ/1903～1989年)

福岡県生れ。川端画学校に学ぶ。藤島武二に師事。28～31年渡欧。38年新文展入選。戦後日展第1回～13回まで連続入選、日展会友。新世紀美術協会創立会員。1989年没、86歳。洋画家

酒井亮吉 (さかい・りょうきち/1897～1952年)

大阪生れ。信濃橋洋画研究所に学ぶ。1926年二科展に出品、33年会友、41年会員。新美術家協会会員。28～31年渡欧。49年一水会展出品、会員。代表作に33年二科会出品の「茂作の家族」「早春」がある。東京で没、54歳。洋画家

坂上明司 (さかがみ・めいじ?/1924～1958年)

埼玉県生れ。1938年上京、内閣印刷局彫刻課勤務、翌年印刷局彫刻技能者養成所に入り、太平洋美術学校に学ぶ。41年第一美術協会展に水彩画入選、42年白日会展、日本水彩展に出品、43年白日賞。東京みつゑ会展でみつゑ賞。日展、二科展、白日会

展に出品し、白日賞をうけ会友。47年水彩連盟同人。白日会で奨励賞。48年印刷局を退き、水彩画の制作に専念した。50年白日会々員、52年水彩連盟会員。1958年没、34歳。水彩画家

彭城貞徳 (さかき・ていとく/1858～1939年)

長崎市生れ。1870年長崎広運館にてフランス語を学ぶ。75年上京し、高橋由一が主宰する天絵楼に入門。76年工部美術学校に入学し、フォンタネージに学ぶ。78年同校を退学し、玄々堂(石版会社)入る。84年この頃、長崎に帰郷。90年梅香崎女学校図画科で洋画を教える。93年シカゴ万国博覧会の出品人総代に任命され、渡米。95年ロンドンに移り、ウオータールー石版会社でポスターを描く。97年パリに渡り、ヴィクトル・ユゴーの孫に仏画を教えた。1900年この頃帰国。神戸女学校で教鞭をとる。03年長崎に帰郷。12年活水高等女学校で教鞭をとる。15年上京し、日本橋芳町に海産物問屋を出す。23年関東大震災により被災する。32年「彭城貞徳展」を日動画廊で開催。37年「明治、大正、昭和三聖代名作美術展」に出品。38年日動画廊、大阪松坂屋で個展。39年1月4日没、享年82歳。(佐)洋画家、美教

榊原一廣 (さかきばら・かずひろ/1883～1941年)

三重県生れ。1904年京都に出て牧野克次に入門、聖護院洋画研究所、06年関西美術院で浅井忠に師事。06、08年関西美術会競技会水彩画部門で二等賞。09年飯田呉服店(高島屋)で図案部長。20～22年渡欧。23年大阪高島屋で個展。大阪市美術協会会員、幹事。26年創作モノタイプ大阪三越で個展。41年没、58歳。水彩画家、図案、版画

榊原一廣 II (さかきばら・かずひろ/1883～1941年)

三重県生れ。1904年聖護院洋画研究所に学ぶ。05年関西美術会第4回展に出品。06年関西美術院に入る。関西美術会第5回競技会で二等賞。07年三越呉服店に技手として入社。関西美術会第6回競技会で褒状。08年関西美術会第7回競技会で二等賞。09年関西美術会第8回競技会で三等賞。19年第6回二科展に出品。20年渡欧。21年サロン・ドートンヌに入選。22年帰国。23年滞仏記念洋画展を大阪高島屋呉服店で開催。24年大阪市美術協会委員・審査員となる。41年2月23日伊丹市の自宅で没、享年59歳。(佐)水彩画家、図案、版画

榊原紫峰 (さかきばら・しほう/1887～1971年)

京都生れ。1904年京都市立美術工芸学校日本画科卒。11年京都市立絵画専門学校(現:京都市立芸

術大学)卒。18年入江波光・小野竹喬・土田麦僊・野長瀬晩花・村上華岳と共に国画創作協会(現・国画会)を結成。37年京都市立絵画専門学校教授。62年日本芸術院恩賜賞。京都で没、83歳。日本画家、美教、版画

榊原紫峰 II (さかきばら・しほう/1887～1971年)

京都生れ。1907年京都市立美術工芸学校絵画科卒、同研究科に進む。京都市立絵画専門学校の創立に際して編入し、13年卒業。09年文展に入選、11年文展で三等賞。文展審査を不服として18年土田麦僊、村上華岳らとともに国画創作協会を結成。28年に国画創作協会が解散した後は、京都市立絵画専門学校教授、京都市立美術大学教授などを歴任。晩年の水墨画の作品にいたるまで、花鳥画を主に描いた。62年日本芸術院恩賜賞。1971年没、70歳。日本画家、美教、版画

榊原蕉園 池田 (さかきばら・しょうえん/1886～1917年)

東京生れ。池田輝方の妻。水野年方、川合玉堂に学ぶ。1903年吉川霊華らとともに烏合(うごう)会会員。07年から文展で受賞。美人画にすぐれ、挿絵も手がけた。1917年没、32歳。32歳。旧姓は榊原。本名は百合子。作品に「こぞのけふ」「桃の酔」「宴の暇」など。日本画家

坂口一草 (さかぐち・いっしょう/1902～1997年)

大阪生れ。1917年藤田紫雨に手ほどきを受けた。18年太平洋画会研究所に通う。20年御形塾に入り川端龍子に師事。27年院展に入選。28年龍子の院展脱退に際してこれに随伴、青龍社結成に参加。31年社人。以後塾頭。50年青龍社を脱退。日展出品のうち、57年新興美術院に移り、59年青炎会を結成。75年より日本画院の客員。1997年没、95歳。日本画家

坂口右左視 (さかぐち・うさみ/1895～1937年)

佐賀県生れ。関西美術院、のち日本美術院研究所に学ぶ。1918年院展洋画部入選。23、25年春陽会展で春陽会賞。31～34年春陽会会友。37年没、42、43歳。洋画家、版画

坂口紀良 (さかぐち・のりよし/1948年～)

愛知県生れ。1972年東京芸術大学美術学部油画科卒。卒業制作文部省買上、安宅賞受賞。74年同大学院修士課程修了。朝の会(～'95)。77年個展(東京・富山)、渡仏。83年油絵大賞展招待出品、92年以降個展で発表(大阪・名古屋・東京・富山・新潟・豊橋・広島・福岡・小倉・札幌など)、94年南仏、イタリア

取材旅行。和の会(～'97)。96年ニューヨーク取材旅行、光の会展(銀座和光～'10)、ガラス絵による個展(東京2012年まで)、2009年立軌会同人。15年個展(日本橋高島屋)、17年個展個展(日本橋三越、福岡、名古屋)。洋画家

坂倉宜暢 (さかくら・よしのぶ/1913～1998年)

西宮市生れ。大阪市立工藝学校図案科卒、帝国美術学校西洋画科卒。1944年光風会賞。46年日展で特選。52～54年渡欧。アカデミー・ド・ラ・グランド・シヨミエールに学ぶ。66年日展で菊華賞。67～68年渡欧、フランス官展でマンシオン・オノラブル賞。70年日展会員。72～73年渡欧、フランス官展でメダイユ・ドール(金賞)、のち終身無鑑査会員。86年光風会理事。94年日展参与。98年没、85歳。洋画家

坂崎乙郎 (さかざき・おつろう/1928～1985年)

東京生れ。美術史家で朝日新聞社学芸部長、早稲田大学教授をつとめた坂崎坦の次男。51年早稲田大学文学部独乙文学科卒、引き続き大学院へ進み美術史を専攻し、54年修了。55～57年か西ドイツに留学、ザールブリュッケン大学でシュモル教授につき、近代美術を研究。帰国後、美術評論活動に入り、ドイツ表現派やウィーン幻想派などを紹介、とくに幻想芸術の紹介や評論に意を注ぐ。59年リオン・フォイトヴオンガー著「ゴヤ」を翻訳、60年著書「夜の画家たち」を刊行、68年ブリヨン著「幻想芸術」を翻訳刊行、評論領域は近代日本作家へと拡がり、池田淑人ら異色画家の作家論を手がけた。美術評論家連盟会員。著書;「ヨーロッパ美術紀行」、「幻想芸術の世界」、「イメージの狩人—絵画の眼と想像力」、「イメージの変革—絵画の眼と想像力」、「終末と幻想—絵画の想像力」、「絵を読む」、「現代画家論」、「象徴の森」、「幻想の建築」、「視るとは何か」、「エゴン・シーレ」。東京で没、57歳。(引用 東文研) 評論家、美教

坂崎 坦 (さかざき・しずか/1887～1978年)

兵庫県生まれ。早稲田大学英文科卒業。1914年朝日新聞社に入社。21年から2年間フランス留学。美術記者から学芸・調査両部長、編集局顧問などを歴任。36年文学博士号(早稲田大学)を取得。42年朝日新聞社を定年退社。早稲田大学教授、女子美術大学教授、同短大学部長、実践女子大学教授、武蔵野女子大学教授を歴任。紫綬褒章、勲三等瑞宝章を受章。著書 : 日本画論大観(編)目白書院、1917。18世紀フランス絵画の研究 岩波書店、1937。日本画の精神 東京堂、1942。ドラクロワ 芸術と生活 アルス、1949 のち朝日選書。クールベ 雄山閣、1949。西洋

美術史概説 風間書房、1949。西洋近代美術史 風間書房 1962。クールベ 岩波新書、1976。美術評論家坂崎乙郎の父。西洋音楽史家坂崎紀の祖父。1978年没、90歳。美術史家、朝日新聞社友、美教

坂下広吉 (さかした・こうきち/1945年～)

山口県生れ。1968年多摩美術大学油画科卒。79～81年オーストリア国立ウィーン美術アカデミー留学、ウィーン幻想派の雄ルドルフ・ハウズナーに師事。個展;76年文藝春秋画廊。79、81、83、85年現代画廊(銀座)。81年オーストリア日本大使館広報文化センター(ウィーン)。81、83、85年マエダ画廊(名古屋)、ロートレック画廊(長野)、菊川画廊(宇部)、97年東邦画廊、2008、10、11年中村順二美術館。92～93年日本芸術文化振興基金の助成金、「ギルガメシュを知ってるかー坂下広吉展」展開催。洋画家

坂 宗一 (さか・そういち/1902～1990年)

福岡県生れ。小学校卒業後、坂本繁二郎を頼って上京、一時川端画学校で素描を学んだ他油彩画は独学。坂本や古賀春江に制作を見てもらっていた。1929年二科展入選、37年二科特待賞。41年二科会会友。47年創立の第二紀会(のち二紀会)に参加、60年二紀会委員。九州洋画壇の長老として活躍。水墨画も描いた。福岡県で没、87歳。洋画家、水墨

坂田一男 (さかた・かずお/1889～1956年)

岡山市生れ。1914年上京、本郷絵画研究所、川端画学校に通う。21年渡仏、フリエスと交友。のちフェルナン・レジェの研究所で学び、助手、キュビズムから抽象へ進む。33年帰国後は岡山中で制作。43年火虹会、24年岡山アヴァンギャルドA・G・Oを設立、主宰。岡山県で没、66歳。洋画家

坂田哲也 (さかた・てつや/1952年～)

福岡県生れ。1988年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2005年東京藝術大学美術学部教授。05年東京藝術大学、韓国藝術総合学校交流展(ソウル)。09年「異界の風景」、「東京藝大油画科の現状と美術資料」(東京藝術大学美術館)。東京・現代芸術ドローイング展(東京藝術大学美術館・陳列館)。美教

坂田虎一 (さかた・とらかず/1906～2000年)

愛媛県生れ。光風会、日展に出品。坂田虎一画集、米寿記念画集、四国八十八霊場、水墨画集。2000年没、93歳。洋画家

坂田憲雄 (さかた・のりお/1914～2003年)

熊本県生れ。1932年旧制御船中学校卒。1947年東光展で受賞。47年日展入選、76年会友、82年特選、91年審査員、92年会員。78年日洋展で三越奨励賞、92年常任委員。95年熊本県芸術功労者。2003年没、89歳。洋画家

坂爪厚生 (さかつめ・あつお/1941年～)

群馬県生れ。1965年京都大学工学部卒。66年より個展で発表。73年日本版画協会会友賞、74年日動版画グランプリ展で大賞。74年ニューハンプシャ国際グラフィック展で審査員賞。70年代キュービー人形をモチーフ現代文明の検証作品、80年代紐構成の虚空間、仮面による図解風景、ジグソーパズルのピースをモチーフ構成。メジチント技法にこだわった作品制作。77、83年バルナ国際版画ビエンナーレ展で買上げ、リュブリアナ国際版画展、クラコワ国際版画トリエンナーレ、大阪トリエンナーレに出品。版画家

坂 廣 (さか・ひろし/1863～1929年)

大垣市生れ。1880年京都府立画学校で学んだあと、82年上京、本多錦吉郎の画塾・彰枝堂で洋画を学ぶ。岐阜県華陽学校をはじめ、大分、滋賀、福島など各地の中学教師。1929年没、66歳。洋画家、美教

坂部隆芳 (さかべ・たかよし/1953年～)

静岡県生れ。1974年 日本大学芸術学部デザイン学科卒。77年パリ国立美術学校入学。83年サロン・デ・アーティストで金賞。87年有楽町西武にて日本初の個展開催(90、93年)。2002年坂部隆芳 四半世紀軌跡展(大阪府立現代美術センター)。洋画家、デザイン

坂巻耕漁 (さかまき・こうぎょ/1869～1927年)

東京生れ。東京府画学伝習所で結城正明に学ぶ。尾形月耕門に入る、松本楓湖にも学ぶ。福島県窯業徒弟学校、会津本郷村実業学校図画の教師。『風俗画報』で能の舞姿を描いた謡曲能楽演舞図を連載し人気を得ると共に、版元大黒屋松本平吉からの能演舞版画(能版画)を創出、1897年～1900年発行の横大判錦絵『能楽図絵』全250図(画面右上脇解説付)。横中判錦絵のシリーズ等が知られる。1927年没、58歳。日本画家、美教

酒見恒平 (さかみ・つねひら/1909～1990年)

京都府生れ。二科彫塑部。一水会会員。京都で没、80歳。彫刻家、洋画家

酒見敏雄 (さかみ・としお/1908～1956年)

久留米市生れ。小倉師範学校卒。日本大学芸術学部
の夜間部に通い、寺内萬次郎に師事。1933年帰郷し、
没するまで県立中学や県立高校に勤務。その一方で50年
二科展入選、51年特待賞、56年二科賞。その詩情あふ
れる作風が注目されたが、惜しくも本作が絶筆となつた。
地元展にも参加し、後進の育成にも尽くした。1956年没、
48歳。洋画家、美教

坂元一男 (さかもと・かずお/1905～1978年)

1905年頃生誕。48年～日展入選重ねる。54年一水会
会員のち、同会委員。奈良県教育大学名誉教授。奈良
県で没、73歳。洋画家、美教

坂本貫一 (さかもと・かんいち/生没年不詳)

群馬県生れ。1924年頃に太平洋画会研究所で洋画を
学び、台北の高等学校や大学の博物標本画を描くなど
の仕事につく。34年西田武雄主宰の日本エッチング研
究会、台湾台北市に在住。戦後は、博物標本画を描く
仕事柄か、寺尾新著『小さな水産学者』(妙義出版社
1949)の装丁と挿絵を担当。児童向けに『たのしい動
物園』や『魚貝の図鑑』など絵本や図鑑の挿絵にも携
わった。図鑑、版画家、挿絵

坂本好一 (さかもと・こういち/1932年～)

栃木県生れ。1953年頃より日本画を学び、55年頃
から独学で版画を始める。57年新制作展に日本画を
出品。60年日本版画協会展に出品。66年以降、春陽
会展と日本版画協会展に銅版画を出品。67年初個展
開催。版画家、日本画

坂本善三 (さかもと・ぜんぞう/1911～1987年)

熊本県阿蘇市生れ。本郷洋画研究所に学ぶ。1931
～34年帝国美術学校中退。47年独立賞。49年独立
美術協会会員。57～59年渡欧。68年九州産業大
学教授。76年西日本文化賞。77年長谷川仁記念賞。
85年熊本県立美術館で回顧展を開催。熊本で没、
76歳。(出典 わ眼)洋画家、美教

坂元淑晃 (さかもと・としあき/1939年～)

東京生れ。1963年中谷龍一に師事。68、70年一水
会展佳作賞。72年渡欧 グラン・ショミエールに学
ぶ。77年神戸三越、78年横浜三越で個展。82、87、
88、95年一水会展会員佳作賞、96年一水会展会
員優秀賞。88、92年資生堂ギャラリーで個展。洋画
家

坂本直行 (さかもと・なおゆき/1906～1982年)

北海道生れ。「坂本龍馬」の末裔。1927年北海道
大学卒。2年間温室園芸研究。30年十勝(現)で牧畜、
開拓者として入植、傍ら日高の山々と植物を描き続
ける。57年札幌大丸藤井個展(以後毎年開催'82年
まで)。59年日本橋白木屋デパート個展(以後隔年
開催)。60年札幌市にアトリエ、画業に専念。67年
ネパール、73年カナダへスケッチ旅行。74年北海道
文化賞。六花亭製菓の包装紙のデザイン。札幌市で
没、75歳。洋画家、水彩、版画

坂本繁二郎 (さかもと・はんじろう/1882～1969年)

福岡県生れ。洋画家を志し1902年上京、不同舎、
のち太平洋画会研究所に学ぶ。07年文展で入選。13
年国民美術協会会員。14年二科会創立会員。21～
24年渡仏、アカデミー・コラロッシに通い、シャル
ル・ゲランに師事。24年帰国、久留米に帰郷。50年
日本橋・三越で回顧展。54年毎日美術賞。56年文
化勲章。63年朝日賞。八女市で没、87歳。洋画家、
版画

阪本文男 (さかもと・ふみお/1935～1986年)

東京生れ。柏崎高等学校卒。国領経郎に洋画を学
ぶ。59年モダンアート展入選。63年同会会員。67年
国際青年美術家展で優秀賞第一席。武蔵野美術短
期大学教授。川崎市で没、51歳。洋画家

坂本正直 (さかもと・まさなお/1914～2014年)

宮崎市生れ。旧制県立宮崎中学校卒業後、35年兵
役を終え、[独立美術協会]を脱会、モダンアート協
会展に出品、61年会員。66年宮日賞文化賞、67年宮
崎県文化賞。2014年没、100歳。洋画家

坂本益夫 (さかもと・ますお/1907～1993年)

神戸市生れ。川端画学校に学ぶ。上野山清貢、東
郷青児に師事。1929年二科会展に出品。47年二紀
会展に招待出品、同人。57年渡仏。多くの風景画を
描く。60年二紀会委員、後理事、評議員。1993年
没、86歳。洋画家

坂本幹男 (さかもと・みきお/1912～1993年)

熊本県生れ。1934年東京美術学校図画師範科
卒。愛知、群馬、神奈川で教職。36年文展に入選。4
7年日展から出品を続け、60、62年改組日展では特
選。日展会員。42年から創元会展に出品続け、同会
会員。大洋会委員。日洋会常務委員。神奈川県で
没、81歳。洋画家、美教

坂本義信 (さかもと・よしのぶ/1895～1988年)

高知県生れ。1917年高知県師範学校卒業。太平洋洋画会研究所に入所、石川寅治に師事。中学校図画教員を経て27年佐川高等女学校に赴任。32～35年高知各地を取材した木版画集制作。935年に完成。47年アメリカ万国美術観光ポスター展に高知県代表出品。61年教員生活を退き、土陽美術会で監事。1988年没、93歳。 **版画家**

佐川敏子 (さがわ・としこ/1902～1973年)

東京生れ。1923年東京女子大国文科中退。26年「一九三〇年協会」洋画研究所に通う。27年中間冊夫と結婚。31年独立美術協会展に出品入選。34年桜井浜江、三岸節子らと女艸会創立。39年独立美術協会賞。49年同会員。東京で没、70歳。 **洋画家**

作田富幸 (さくた・とみゆき/1960年～)

山形県生れ。1984年東京造形大学美術学部版画専攻卒。85年日本版画協会展で協会賞、90年準会員賞。2005年高知国際版画トリエンナーレ展で大賞。08年BIMPE国際ミニプリントビエンナーレ・グランプリ(カナダ)。97～05年共立女子大学非常勤講師。2000～03年創形美術学校非常勤講師。06～07年文化庁海外留学制度1年派遣研修員(オランダ)。07年横浜美術短期大学非常勤講師。 **版画家、美教**

佐熊桂一郎 (さくま・けいいちろう/1929～2006年)

東京生れ。1952年武蔵野美術学校卒。70年日本画廊で個展。74年从会を結成。75年東京展に出品。82年小田急グランドギャラリーで個展。90年名古屋画廊で個展。06年没、77歳。 **洋画家**

佐久間鉄園 (さくま・てつえん/1850～1921年)

宮城県生れ。仙台藩画員・佐久間晴岳の次男、母は仙台藩画員・菊田伊洲の娘。父や狩野派の下条桂谷に画を学ぶ。1899年日本美術協会展で三等賞。1907年文展審査員を務め、帝室技芸員にも任命された。著書『支那歴代名画論評』(1900年)。1921年没、71歳。 **日本画家**

佐久間時三郎 (さくま・ときさぶろう/生没年不詳)

1899年京都パノラマ館を京都大仏隣に開館にあたり油絵師佐久間時三郎氏主任の元になが鳥羽伏見の戦いを描く。 **洋画家**

佐久間文吾 (さくま・ぶんご/1868～1940年)

福島県生れ。1882年ころから本多錦吉郎に学んだとされる。不同舎で小山正太郎に学ぶ。89年明治美術会結成に参加。90年第3回内国勸業博覧会に出

品し妙技三等賞。96年白馬会の結成に参加するも、同会への出品はしなかった。雑誌「太陽」の表紙、「少国民」の挿絵なども手掛けたことも知られている。1940年没、享年72歳。(佐) **洋画家、挿絵**

桜井悦 (さくらい・えつ/1910～1989年)

福岡県生れ。伊原宇三郎に師事。1932年女子美術専門学校師範西洋画部卒。関西女子美術学校講師。37年以降新文展の入選43年新文展で特選。44年光風会展に出品。46年光風会会員。46年女子美術専門学校助教授、49年同校教授。47年女流作家協会創立会員、のち委員。55～56年友岡田節子と渡欧。78年資生堂ギャラリーで個展。新聞小説の挿絵や絵本製作。東京で没、79歳。 **洋画家、挿絵、美教**

桜井寛 (さくらい・かん/1931年～)

長野県生れ。1951年東京教育大学教育学部芸術学科入学、55同校卒。[独立展]入選、出品を続け、63、66年独立賞、67年会員。70年頃より個展。75～76年渡欧。78、92年資生堂ギャラリーで個展。79年[十果会]を結成し、グループ展を開催。81、85年宮崎県美術展の審査員。87年渡米。94年青梅市立美術館で特別展「桜井寛展」開催。95年池田20世紀美術館で個展。92年武蔵野美術大教授。 **洋画家、美教**

桜井菊三 (さくらい・きくぞう/1892～1972年)

東京生れ。大久保作次郎に師事。新世紀美術協会会員。1972年没、80歳。 **洋画家**

桜井慶治 (さくらい・けいじ/1919～2016年)

千葉県生れ。千葉師範学校を経て1949年に東京美術学校卒。東京美術学校在学中の47年、48年光風会展。56～57年文部省留学生としてフランス留学。56～64年絵画の研究の為、イタリア、スイスなど各国を歴訪。65年再渡欧米、フランスでル・サロン銅賞・ヴィシー国際展グランプリを受賞。67、69年日展で特選。日展審査員、評議員、2001年日展参与。内閣総理大臣より紺綬褒章。05年紺綬褒章。八千代松陰学園自作品140点以上を寄贈。2016年没、97歳。 **洋画家**

桜井孝身 (さくらい・たかみ・こおしん/1928～2016年)

福岡県生れ。西日本新聞社勤務。1957年にオチ・オサム、菊畑茂久馬らと共に福岡を拠点に結成された前衛美術集団「九州派」の主要メンバー。初期はアンフォルメル絵画が主であったが、反芸術的オブジェ、パフォーマンスへと展開。作品はコールタール、アスファルト、ムシロ、ドンゴロス(麻袋)等労働者の生活臭と結びついた素材の使用。2016年没、88歳。 **洋画家、九州派、パフォ**

櫻井孝美 (さくらい・たかよし/1944年～)

埼玉県生れ。日本大学芸術学部美術学科で糸園和三郎に師事する。大学卒業後、山梨県立繊維工業試験場にデザイナーとしての職を得て、デザイナーの仕事をするかたわら、絵画を制作し続け、個性的なスタイルを確立する。1984年山梨県新人選抜展山梨県立美術館賞。88年安井賞展で安井賞。80年代を代表する一人。**洋画家、デザイン**

櫻井 武 (さくらい・たけし/1944～2019年)

静岡県生れ。1966年 慶応義塾大学仏文科卒。69～71年シカゴ・アート・インスティテュート留学。71～2004年ブリティッシュ・カウンシル勤務。91年大英勳章MBE 授与。04年「英国美術の創造者たち」刊行。08年「ロンドンの美術館」刊行。08年熊本市現代美術館館長。ブリティッシュ・カウンシル・アーツ担当官として現代美術のシリーズ、1986年「ターナー」、1986年「ヘンリー・ムーア」、1998年「テート・ギャラリー」、2003年「イン/プリント」展の展覧会に携わる。エッセーを多数執筆。2019年没、75歳。**美術館長**

櫻井忠剛 (さくらい・ただたか/1967～1944年)

尼崎藩松平家生れ。後、櫻井家に改名。1876年上京、私塾「同人社」「攻玉社」で勉学。82年勝海舟邸に寄寓。勝は川村清雄を紹介、師事。87東京工芸品共進会で二等賞銀牌。90年内国勸業博覧会で褒状。94年関西美術会(第一次)を結成。97年新古美術品展に出品受賞。審査員。1901年関西美術会(第三次)が設立、委員。05年尼崎市長。尼崎市で没、77歳。**洋画家**

櫻井忠温 (さくらい・ただよし/1879～1965年)

松山市生れ。1901年陸軍士官学校卒。日露戦争出征。帰還後療養中に執筆の「肉弾」が06年刊行、英、米、独、仏、露、中など15か国に翻訳出版される。30年陸軍少将で退役。少年時代に四条派の絵師に学び画技にも秀でて画集も出版される。1906年「ホトギス」に発表された夏目漱石の名作「坊ちゃん」の挿絵を担当。松山市で没、86歳。82年愛媛県立美術館遺作展。**日本画家、挿絵**

櫻井浜江 (さくらい・はまえ/1908～2007年)

山形市生れ。1928「一九三〇年協会」洋画研究所で学ぶ。里見勝蔵に師事。31年独立美術協会展入選。34年三岸節子らと女声会創立。47年女流画家協会を設立。48年独立賞。54年独立美術協会会員。79年山形美術博物館、95年青梅市立美術館で個展。東京で没、98歳。(出典 わ眼)**洋画家**

櫻井 寛 (さくらい・ひろし/1931年～)

長野県生れ。1951年東京教育大学教育学部芸術

学科入学、55同校卒。[独立展]入選、出品を続け、63、66年独立賞、67年会員。70年頃より個展。75～76年渡欧。78、92年資生堂ギャラリーで個展。79年[十果会]を結成し、グループ展を開催。81、85年宮崎県美術展の審査員。87年渡米。94年青梅市立美術館で特別展「櫻井寛展」開催。95年池田20世紀美術館で個展。92年武蔵野美術大教授。**洋画家、美教**

櫻井祐一 (さくらい・ゆういち/1914～1981年)

山形県生れ。平櫛田中に師事。1934年院展入選。戦後日本美術院賞の受賞をかさね、55年日本美術院同人。彫刻家集団S・A・S結成をへて、63年国画家会会員。具象派の代表的作家のひとり。1981年没、67歳。**彫刻家**

櫻井陽司 (さくらい・ようし/1915～2000年)

新潟県生れ。1928年上京。油絵を始める。47年日本アンデパンダン展に出品。64年愛知県美術館で駒井哲郎と二人展(サカエ画廊主催)。65年柏三屋主催個展、以降10回。個展中心に発表。86～92年アートロベ主催個展。93年、画集出版記念展。2000年没、85歳。**洋画家**

櫻田精一 (さくらだ・せいいち/1910～1999年)

熊本県生れ。1933年日本美術学校洋画科卒。33～38年朝鮮にて教師。33年朝鮮美術展覧会で特選・昌徳久宮賜賞。39年帰国し上京。40年日本美術学校講師。47年光風会展光風特賞。49年千葉県美術会創設に参加。57～58年渡欧。日展参与。1999年没、89歳。画家・櫻田久美の実父、小林武雄、大野みつ子など優れた門下生を輩出。**洋画家、美教**

櫻田晴義 (さくらだ・はるよし/1945年～)

満州国生れ。1967年武蔵野美術大学油画科卒。73年～滞欧(スペイン)。77年スペイン最優秀作品展グランプリ、78年同展で名誉賞。79年同展で特別名誉賞。85年昭和会展優秀賞。2003年池田20世紀美術館で櫻田晴義展。個展・グループ展多数(三越、日動画廊、彩鳳画廊、川上画廊・オンワードギャラリー等)。**洋画家**

左近聖章 (さこん・せいしょう/1915～1987年)

香川県生れ。大正4年多度津町生れ、多多津中学を経て太平洋美術学校卒、小林萬吾に師事。文部大臣賞、ル・サロンの銅賞、フランス、スペイン国際展出品。国内外で個展15回、光陽会運営委員、審査委員、大翔会代表。光陽会運営委員。1987年没、72歳。**洋画家**

笹岡 勇 (ささおか・ゆう/1937年～)

1960年多摩美術大学油絵科卒。日本橋三越、アサツウでデザイナーとして活躍。65年創元展、会員、新人賞、審査員。72年デザイン事務所立ち上げ。73年東京展立ち上げに際し、中村正義を事務局としてサポート。78年から事務局長。2000年より再び創作活動開始。17年羽黒洞で個展。洋画家

笹岡 了一 (ささおか・りょういち/1907～1987年)

新潟県生れ。新潟県三条中学校卒。31年上京、安宅安五郎に師事。1930年白日展入選、31、32年白日賞、33～40年会員、37年佐分賞。40年創元会展で受賞。41年創元会創立会員。31年帝展入選、46年光風会会員、59年日展会員、78年日展内閣総理大臣賞。日比谷図書館壁画制作。千葉県美術会長。松戸市で没、79歳。洋画家、壁画

笹鹿 彪 (ささか・ひょう/1901～1977年)

米子市生れ。1920年上京し、岡田三郎助主宰の本郷洋画研究所に学ぶ。20年光風会展入選。21年帝展に入選。34年焼失した本郷絵画研究所の再建に尽力。本郷絵画展(春台展)の結成に努力し、委員長。46年光風会会員。59年日展会員。64年日展評議員、76年日展参与。53年～川村学園短期大学講師、75年同校教授。東京で没、76歳。洋画家、美教

佐々木 一郎 (ささき・いちろう/1907～1993年)

愛媛県生れ。猪熊弦一郎に師事。62、64年新制作展で新作家賞。71年新制作協会会員。1993年没、85歳。洋画家

佐々木 一郎 (ささき・いちろう/1914～2009年)

旧制岩手中学校卒。1963年一水会員に推挙。71年一水会展会員佳作賞受賞。73年パリにて個展を開催。1975、81、82年サロン・ドートンヌに出品。94年サロン・ドートンヌ会員に推挙。岩手大学教授。岩手美術研究所開設に関与。「岩手県立美術館建設促進の会」会長。2001年開館に貢献。2009年没、95歳。2013年もりおか啄木・賢治青春館「佐々木一郎展」。洋画家、美教

佐々木 栄松 (ささき・えいしょう/1913～2012年)

北海道生れ。石版印刷会社勤務。1960年ソ連圏諸国、中近東・地中海諸国、西欧、北欧、アラスカ、カナダ、北・中・南米諸国巡遊。70年東京銀座文芸春秋画廊・望月画廊・横浜・札幌で個展。「湿原の画家一

佐々木栄松作品集」。「随筆・白いオピラメ(原野の釣人物語)」。87年釧路ステーション画廊を開館。2012年没、99歳。洋画家

佐崎 霞村 (ささき・かそん/1878～1939年)

東京生れ。京都の大仏師内藤光石に入門し、24歳の時上京して竹内久一に師事。1922年帝展入選し、30年帝展で特選となり、無鑑査。帝展には常に薄肉彫刻仏像を出品し、「聖観」「不動」「寂光」等が主なもので又毎回日本木彫会に出品したほか、36年比叡山阿弥陀堂本尊の木彫丈六如来像を制作し、38年浅草本願寺別院内陣墓股彫刻を製作。1939年没、62歳。木彫家、彫刻家

佐々木 健治 (ささき・けんじ/1935年～)

秋田市生れ。東北大学教育学部美術専攻科に進み、在学中からモダンアート展に出品。卒業後は教職につくが、同時に画家としての道を歩み出した。1968年河北展 M 賞、73年モダンアート協会会員。一貫して抽象形態による表現を模索、常に新たな創造へと向かう挑戦的な姿勢は、画壇の先鋭として高い評価を得ている。洋画家

佐々木 四郎 (ささき・しろう/1931年～)

大阪生れ。1956年東京芸術大学油画科卒、新制作協会に出品。61～64年ミュンヘン美術学校在学。64～70年ベルリン在住、ドイツの画廊で発表。72年『今日の作家'72年』展(横浜市民ギャラリー)、『ヨーロッパの日本作家』展(京都・東京国立近代美術館)に出品。75～79年『閉ざされた空間』のシリーズ、82～87年『回転する空間』のシリーズ。1992年『回転から移動する空間へ』(東京、南天子ギャラリーSOKOでの個展)。洋画家

佐々木 信平 (ささき・しんぺい/1936～2017年)

中国生れ。1962年武蔵野美術学校卒。77年二紀展菊華賞。78年二紀展会員優賞・文化庁現代美術選抜展出品。86年二紀展・文部大臣奨励賞。91年二紀展記念賞。97年個展(日本橋三越)。2001年内閣総理大臣賞。二紀会常任理事、常葉大学造形学部教授、常葉美術館運営委員、平野美術館理事。2017年没、81歳。洋画家

佐々木 精治郎 (ささき・せいじろう/1885～1971年)

岩手県生れ。1905年機械化農業を学びに渡米。14年ロサンゼルス美術学校卒、19年ナショナル・アカデミー、アート・ステューデント・リーグ卒。19年帰国、27年渡欧。30年帰国、三越で個展。33年日動

画廊でパステル画展。無所属で岩手の美術発展に尽力。東京で没、86歳。洋画家

佐々木節郎 (ささき・せつろう/1895～1943年)

仙台市生れ。東北中学校卒、東京美術学校に入学、岡田三郎助の教室で洋画を学んだ。肖像画を得意とし、当時の満州、朝鮮で関東軍指令部付として、満州国政府要人、軍関係重臣らの肖像画を描いた。1927年仙台洋画研究所で後進の指導にあたった。1943年没、49歳。洋画家

佐々木宗一郎 (ささき・そういちろう/1910～1997年)

秋田県生れ。旧制横手中学校から日本美術学校卒。二科美術研究所に学び、田口吾吾や吉井淳二に師事。1946年二科展に出品、56年二科会展で特待、62年会員、70年会員努力賞、72年二科会評議員。東京で没、87歳。洋画家

佐々木素雲 (ささき・そうん/1892～1968年)

秋田県生れ。1911年上京して米原雲海に師事、26年帝展入選、東京美術学校彫刻別科に入り朝倉文夫に塑造を学んだ。25年郷里に疎開。秋田市で製作活動を続け、随時、上野の日影展に作品を送って発表。地方美術の振興向上と文化財の保護に尽力し、秋田県総合美術連盟の設立や県文化財専門委員。同県文化功労章。諸展覧会出品以外の代表作に「満州国皇帝勅額」「曹洞宗大本山総持寺後醍醐天皇等身像」。秋田市で没、76歳。彫刻家

佐々木大樹 (ささき・たいじゅ/1889～1978年)

富山県生れ。1913年東京美術学校彫刻科本科木彫部卒、同校研究科に進み翌年修了。20、22年帝展で特選。22年平和記念東京博覧会で銀賞。28年帝展出品作で帝国美術院賞。新文展、日展で11回審査員。30年日本木彫会に所属。34年帝国美術学校教授、35年多摩帝国美術学校教授、戦後51～66年多摩美術大学教授。58年日展評議員、73年日展参与。東京で没、88歳。彫刻家、美教

佐々木孔 (ささき・たかし/1907～1974年)

宮城県生れ。築館中学校卒。1934年東京美術学校油画科卒。藤島武二に師事。47年二紀会展に招待出品、同人、48年同会委員、67年同会監事。東京で没、66歳。洋画家、版画

佐々木英夫 (ささき・ひでお/1911～2006年)

大分県生れ。1936年東京美術学校油絵科(岡田三郎助教室)卒。岡田三郎助と藤田嗣治に育てられ、抜

群のデッサン力と色彩感覚の腕を磨いた。42年陸軍宣伝班員画家として藤田嗣治と共にジャワ上陸作戦を取材。帰国後、「バリ島の市場」を文展に出品、入選。戦後「新絵エコーロード・トーキョウ」を結成して、資生堂ギャラリーやポールギャラリーで抽象絵画作品を発表。71年ブラジルに招かれ、サンパウロ日本寺院(日蓮宗)大壁画完成。秋耕会名誉会長、日本山林美術会名誉会長。2006年没、95歳。洋画家

佐々木正芳 (ささき・まさよし/1931年～)

神奈川県生れ。1957年東北大学経済学部卒。55年エスプリ・ヌボォと東北現代美術連盟結成に参加。自由美術展初出品以降毎年出品、62年会員。68年エア・ブラッシによる「黙劇シリーズ」を始める。71年鬚光賞。72年第1回宮城県芸術選奨。86年画集刊行。90年エア・ブラッシを止めて油彩に復帰、同時にテラコッタに着手。97年佐々木正芳の世界展(池田20世紀美術館)。2013年秋保の杜 佐々木美術館&人形館開館。洋画家

佐々木豊 (ささき・ゆたか/1935年～)

名古屋市生れ。1959年東京藝術大学油画科卒。61年同大学油画専攻科修了。59、60年国画賞。63年国画会会員(～現在)。87年池田20世紀美術館個展。92～06年明星大学教授。92年安田火災東郷青児美術館大賞。三越、高島屋、名古屋画廊、日動画廊等個展。洋画家、美教

佐々木貴義雄 (ささき・よしお/1890～1987年)

東京生れ。1906年太平洋画会研究所入所、中村不折に師事、同研究所の助教授。1925年太平洋美術学校教授。57年二科十朗に染色を学び、福岡県展工芸部門出品。62年大牟田総合美術工芸部常任委員。67年福岡県工芸美術家協会会員。67年太平洋美術会参与、78年同会西日本支部長。福岡県で没、97歳。洋画家、版画、美教

佐々木良三 (ささき・りょうぞう/生年不詳)

秋田県本荘市生れ。秋田大学卒。秋田県小学校教諭。秋田県大学教授。国画会会員。国展秋田支部長。2013年由利本荘市に作品43点を寄贈。16年秋田県文化功労章。15年著書『シリーズ時代を語る 絵をつくる 人生を描く発行 編集・発行 秋田魁新報社』。洋画家、美教

佐々木良三 II (ささき・りょうぞう/1909～1962年)

京都市生れ。島津マネキン製作所に入社、1946年には吉忠株式会社に勤務、晩年まで企画やデザイン

担当。33年独立美術京都研究所に通う。47年二科展入選し、50年二科35周年記念賞、51年二科会友、55年会員、会の運営に貢献。61年吉忠企画部から海外視察、渡欧し、制作。1962年没、53歳。洋画家、デザイン

笹倉鉄平 (ささくら・てっぺい/1954年～)

兵庫県生れ。1977年武蔵野美術大学商業デザイン科卒、グラフィック・デザイナーを経て、広告制作会社専属のイラストレーター。80年フリーランスとなり、広告や出版の仕事を手がける(森永製菓のパッケージイラストを200点以上10年に渡って制作)。98年大丸ミュージアム・東京にて初の美術個展開催。2000年『笹倉鉄平画集』(求龍堂)が出版。05年イタリア、フィレンツェ市主催による、パルテ・グエルファ宮での個展。大丸、小田急、高島屋で個展。洋画家、イラスト、版画

笹島喜平 (ささじま・きへい/1906～1993年)

栃木県生れ。1927年東京府立青山師範学校卒。35年頃平塚運一に木版画の指導を受ける。36年棟方志功に師事。49年国画会会員。48～52年日本版画協会会員。52～60年日本版画院創立同人。国際版画展等に出品。54年～日本橋高島屋で個展。78年水戸文化センターで個展。82年日本橋高島屋で回顧展。栃木県で没、87歳。版画家

笹瀬悦子 (ささせ・えつこ/1924～2007年)

1924年生れ。洋画家、行動美術協会会員、京都市美術館所蔵。2007年没、83歳。洋画家

笹村草家人 (ささむら・そうかじん/1908～1975年)

東京生れ。石井鶴三に師事。1944年母校東京美術学校助教授。荻原守衛(礫山)の研究と顕彰運動で知られ。54年『彫刻家荻原礫山』を刊行、58年礫山美術館を開館。1975年没、67歳。彫刻家、美教

笹本恒子 (ささもと・つねこ/1914年～)

東京生れ。高等専門学校の家政科中退。東京日日新聞の挿絵制作。1940年財団法人・写真協会(新聞記者・写真家の林謙一を中心に設立された内閣情報部による国策機関。女性報道写真家第1号。1945年千葉新聞に勤務。46年東京で婦人民主新聞の嘱託カメラマン。47年フリーとなり、フォトジャーナリストとして活動を継続。50年日本写真家協会の創立会員。85年国内を代表する著名な女性有名人を集めた写真展「昭和史を彩った人たち」で再び写真家として復帰。2001年ダイヤモンドレディー賞。11年吉川英治

文化賞。14年ベストドレッサー賞・特別賞。16年米国のルーシー賞(英語版)。16年100点の写真を長野県須坂市に寄贈。18年東京都名誉都民に顕彰。写真家。女性報道写真家第一号

佐善明 (さぜん・あきら/1936～1991年)

新潟市生れ。1960年新潟大学教育学部芸能科絵画科卒。55年新制作協会展入選、69、70年新作家賞、73年会員。76年文化庁芸術家在外研修員として渡米し、1年間滞在。University of California at Los Angeles及びMassachusetts Institute of Technologyの客員研究員。85年文部省派遣長期在外研究者として再び渡米し、UCLA芸術学部美術学科客員教授。千葉大学工学部工業意匠科教授、日本美術家連盟、日本デザイン学会にも参加した。千葉市で没、54歳。洋画家、美教

佐田勝 (さた・かつ/1914～1993年)

長崎市生れ。1939年東京美術学校油画科卒。美術文化協会の結成に参加。47年自由美術家協会会員。60年美術グループ「同時代」を結成。39～50年芝浦工業専門学校の講師、助教授。51年日本ガラス絵協会設立、代表を務めた。東京で没、78歳。洋画家、美教、ガラス絵

佐竹永海 (さたけ・えいかい/1803～1874年)

会津生れ。江戸で谷文晁(ぶんちよう)にまなび、その高弟といわれた。のち近江(おうみ)(滋賀県)彦根藩主井伊直亮(なおあき)につかえ、法眼となった。1874年没、72歳。作品に「秋月野花図」など。江戸後期・明治時代の画家

佐竹曙山 (さたけ・しょざん/1748～1785年)

江戸生れ。生来病弱ながら英明で進取の気性に富み藩財政の立直しに尽力、領内に平賀源内を招き阿仁銅山の採掘増産を実施。源内より教えを受けた小田野直武を通じて洋画技法を学ぶ。作品は沈南蘋風の写実主義と舶載銅版画に感化を受けた様式。『画法綱領』(1778)、『画図理解』(78)を著わし、司馬江漢そのほかの洋画論の先駆をなした。おもな作品は『紅蓮図』(秋田市美術館)ほか。江戸時代中期の秋田藩主、秋田蘭画の画家

佐竹徳 (さたけ・とく/1897～1998年)

大阪生れ。1912年展天王寺師範附属小学校高等科卒。14年関西美術院に入門、鹿子木孟郎に学ぶ。16年川端画学校で学ぶ。17年第11回文展に初入選。19年第6回日本美術院展に出品。第1回帝展に

出品。21年第3回帝展で特選。22年インド旅行。26年第1回聖徳太子奉賛展に出品。28年第5回槐樹社展で田中賞。29年第10回帝展で特選。30年槐樹社社友。第2回聖徳太子奉賛展に出品。第11回帝展で無鑑査出品。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。創元会会員。50年第6回日展審査委員。58年日展会員、その後評議員。67年日本芸術院賞。89年中村彝賞。90年岡山県文化賞。98年2月3日没、享年100歳。(佐)洋画家

佐竹蓬平 (さたけ・ほうへい/1750~1807年)

長野県生れ。寒山禅師に漢籍・書を学び、江戸で宗紫石、京都で池大雅に師事する。のち長崎へ行き、南宋画を究め、熊本で村井琴山・高本紫溟、博多で亀井南冥と相識る。山水・人物を能くすし、篆刻に長じた。1807年没、58歳。江戸中・後期の画家

佐竹義躬 (さたけ・よしみ/1749~1800年)

寛延2年角館生まれ。秋田藩支城角館城第6代城代。佐竹義邦の長子。名ははじめ義寛、のちに義躬と改めた。通称は太郎、のちに四郎、ついで河内、主計といった。字は通大。雪松、一謙亭、嘯月亭、小松山人、義盈などと号した。幼少より狩野派を学んだ。俳句をはじめ学芸諸般の素養を身に付けた教養人。1799年まで角館城代をつとめ、1800年没、52歳。江戸絵師、秋田蘭学

佐谷和彦 (さたに・かずひこ/1928~2008年)

京都府生れ。京都大学経済学部卒。1953年農林中央金庫入社、73年退社。株式会社南画廊(東京、日本橋)の志水楠男に勧誘、同画廊に入社。77年に同画廊を退社し、78年佐谷画廊を東京、京橋に創設。82年に銀座4丁目に移転。2000年東京荻窪の自宅に移転。日本人作家としては、池田龍雄、中川幸夫、阿部展也、山口勝弘、駒井哲郎、荒川修作、桑山忠明、松沢宥、清水九兵衛、福島秀子、山田正亮、若林奮、赤瀬川原平、戸谷成雄、辰野登恵子、小林正人、海外作家としては、パウル・クレイ、エルンスト、マン・レイ、マルセル・デュシャン、ジャコメッティ、クリストの展覧会を開催。詩人瀧口修造と交流のあった作家をとりあげた「オマージュ 瀧口修造」展は、21回開催。「美術品という特別な、文化に関わる商品を取り扱っているという認識を持つ必要がある。ところがここがむずかしいところで、文化には商売として成立しがたい要素がある。美術品の絶対的価値と市場流通価値の乖離が、このことを示している。だからといって儲かる作品であれば何でも扱う、というのでは単なるブローカーになってしまう。画廊、画商の主張が見えてこ

なければ、存在理由はない、と私は思う。もうひとつ言えば、美術品は質の問題に尽きる。質に対する意識がないと、輝いた仕事はできない。文化程度が高い社会とは、質の高い芸術が人びとの周辺に存在する社会のことである。つまり良質の美術品に感応し、感動し、それを理解し、楽しむ境地に達した人間が多く存在することが望ましい。画廊、画商はそのような社会に関わっていることに誇りを持てるような存在でありたい」(『アート・マネージメント 画廊経営実感論』、平凡社、1996年)さらに画廊が現代美術を扱うことについてその意義をつぎのように記していた。「現代美術を取り扱う画廊のもっとも重要な仕事は、新しいすぐれた作家を社会に送り出すことである。すぐれた作家は同時代の証言者であり、時代精神を表現している。このような作家を紹介することが、画廊の社会的義務である。」。2008年没、80歳。(引用 東文研)美術商

佐多芳郎 (さた・よしろう/1922~1997年)

横浜市生れ。1939年日本画家北村明道に基礎を学び、40年より安田鞞彦に師事、41年その研究会である一士会に参加。50年日本美術院展覧会に入選。51年『読売新聞』連載の大佛次郎『四十八人目の男』の挿絵を。山本周五郎の『樅ノ木は残った』、池波正太郎の『鬼平犯科帳』の挿絵を手がけた。79年より宿願の絵巻物制作の準備に入り、翌年小下絵を制作、85年に三巻からなる「風と人と」を完成。89年日本美術院を退院。1997年没、75歳。日本画家

薩摩治郎八 (さつま・じろはち/1901~1976年)

東京生れ。祖父は近江商人の薩摩治兵衛。1918年オックスフォード大学留学。20年パリに移り藤田嗣治、ラベル、ミロらと交際、藤原義江や原智恵子らのデビューを援助、パリ社交界で「バロン薩摩」と呼ばれた。26年にレジオン・ド・ヌール勲章受章。28年伯爵令嬢山田千代子と結婚、千代子を純銀の車に乗せ、カンヌの自動車エレガントコンクールで優勝。29年私財2億円を投じパリ大学都市に日本人留学生のための日本館を建設。51年無一文となって帰国。浅草に住み浅草座の踊子薩摩利子と結婚、随筆などを執筆。59年夫人の故郷徳島に出かけた折に脳卒中で倒れ、以来亡くなるまで徳島に住み、利子はミシンを踏んで薩摩を養った。著書に半世紀「せ・し・ぼん」の他、「巴里・女・戦争」「なんじゃもんじゃ」「ぶどう酒物語」などがある。1976年没、75歳。作家支援、随筆家、パリ日本館建設者

薩摩千代 (さつま・ちよ/1907~1949年)

東京生れ。女子学習院高等科に学び、1926年薩摩治郎八と結婚。26年治郎八と共にパリに渡り、ファッションモデルとして新聞や雑誌に取り上げられ、パリの社交界で活躍。藤田嗣治を通じてピエール・ラブラードに師事、サロン・ドートンヌやパリ日本人美術家展覧会などに出品した。1949年長野県で没、42歳。
洋画、版画

佐藤 明 (さとう・あきら/1930～2002年)

東京生れ。1953年横浜国立大学経済学部卒。57年「10人の眼」展(東京・小西六ギャラリー)に参加、59年東松照明、奈良原一高らと写真家の自主運営によるエージェンシー「VIVO」を結成。61年の個展「女たち」(東京・富士フォトサロン)、62年『カメラ毎日』に連載した「サイクロピアン」、63年「おんな」。63～65年渡米、渡欧。66年日本写真批評家協会賞作家賞。98年日本写真協会賞年度賞受賞。写真集『おんな』、『ウィーン幻想』、『フィレンツェ』。東京で没、71歳。
写真家

佐藤篤郎 (さとう・あつろう/1901～1984年)

宮城県生れ。1907年北海道へ転居。30年春陽会研究所で学ぶ、49年会員。43年文展に出品。68年白馬村にアトリエ。76年写真画壇会員、のち運営委員。1984年没、83歳。85年兵庫県民アートギャラリーで遺作展。**洋画家**

佐藤亜土 (さとう・あど/1936～1995年)

横浜市生れ。画家佐藤敬、声楽家美子の長男。1960年慶応大学文学部美学美術史科卒。62年渡仏、パリで創作。村松画廊、ギャラリー・ワタリで個展、84年吉井画廊の個展でシリーズ「古墳時代」をさらに展開し、土俗的な形態をモチーフに、明快な色彩と曲線による抽象絵画を発表。84年グランパレ美術館、東京都美術館で開催の日仏現代美術展でフィガロ賞第一席。写真家篠山紀信、作家の石川淳とともに版画集『巴里』制作。東京で没、58歳。**洋画家、版画**

佐藤一郎 (さとう・いちろう/1946年～)

宮城県生れ。1970年東京藝大油画専攻卒、卒業制作 買い上げ。73年ドイツ学術交流会(DAAD)留学生として西独・ハンブルグ美術大学に留学、ウィーン幻想リアリズムの巨匠ルドルフ・ハウズナーの教えを受けた(76年末帰国)。留学直後に出合った『マックス・デルナー:絵画技術体系』を80年に翻訳出版、81年東京藝大油画技法材料研究室常勤講師となり、2014年東京芸術大学教授退任。15年金沢美術工芸大学大学院専任教授。絵画技術・絵画材料の実技指

導、調査研究を行ない、多くの入門書、技法書を著した。**洋画家、美教、美研**

佐藤一章 (さとう・かずあき/1905～1960年)

岡山県生れ。1929年東京美術学校西洋画科卒。満谷国四郎に師事。34年第15回帝展で特選。36年昭和十一年文展招待展出品。45年応召。47年日展審査員。48年日展に依嘱出品。50年岡山大学教育部特設美術科教授(55年辞任)。51年岡山県文化賞。日展審査員。57年日展審査員、58年第1回新日展会員、同展評議員、実行委員。59年第2回日展実行委員。60年8月29日没、享年54歳。(佐)**洋画家、美教**

佐藤功茂 (さとう・かつしげ/生年不詳～1984年)

46年一水会会員。日本美術家連盟。滞欧作品。東京で没、79歳。**洋画家**

佐藤克三 (さとう・かつぞう/1906～1984年)

新潟県生れ。太平洋美術学校卒。新文展・独立展・一水会展等に出品。1984年没、78歳。**洋画家**

佐藤勝彦 (さとう・かつひこ/1940年～)

岡山県生れ。岡山県立高梁高等学校を経て、1958年国立鳥取大学学芸学部入学。63～86年私立帝塚山学園小学部で教師。68年創作活動を開始。74年作陶。75年季刊『銀花』(文化出版局)「佐藤勝彦現代仏道人生」に挿入するため8万5千枚の肉筆画を描く。2002年岡山県高梁市立歴史美術館で佐藤勝彦特別展開催。03年第79回箱根駅伝公式ポスターを制作。**洋画家**

佐藤罔夫 (さとう・くにお/1922～2006年)

岩手県生れ。1946年東京美術学校日本画科卒。46、47年院展入選。48年より高山辰雄の誘いで一采社の研究会に参加。49～61年一采社展に出品。49年日展入選、以後日展に出品。51年山口蓬春に師事。54年日展で特選・白寿賞、朝日秀作美術展に推薦。59年新日展で特選・白寿賞。62年菊華賞。64年日展会員、76年同評議員。77年文部大臣賞。70～97年名古屋芸術大学教授。88年日展出品作で89年日本芸術院賞。89年日展理事、99年日本芸術院会員、2000年日展常務理事。東京で没、83歳。**日本画家、美教**

佐藤蔵治 (さとう・くらじ・そうし/1919～1994年)

福島県生れ。戦後から制作発表を開始し、1958年日彫展入選、60年奨励賞。60年新日展入選。67年

日展で特選、日彫展でも日彫賞。73年改組日展で特選。日彫展審査員、日展審査員、81年日展会員。85年日彫会運営委員。東京で没、75歳。彫刻家

佐藤 敬 (さとう・けい/1906～1978年)

大分市生れ。1925年川端画学校洋画部に学ぶ。31年東京美術学校西洋画科卒。29、30年帝展入選。30～34年渡仏。32年帝展で特選。36年制作派協会を創立、新制作展中心に出品。別府に没、71歳。2006年大分市美術館で「生誕100周年記念 佐藤敬展」。洋画家、版画

佐藤 溪 (さとう・けい/1918～1960年)

広島県生れ。1933年川端画学校で学ぶ。49年新日本文学会に参加、詩作。49年自由美術家協会に参加画業に専念。55年～59年日本全国を回る長期の放浪。60年湯布院町で没、42歳。91年湯布院美術館で展示。東京ステーションギャラリーで個展。2013年別府市の佐藤溪美術館に展示。洋画家

サトウ・サトル (佐藤達、さとう・さとる/1945年～)

宮城県生れ。宮城県佐沼高等学校卒。1969年東洋美術学校卒業、69～74年パリ国立美術学校に留学。79年「鉛直主義」を世界に向けて宣言し国際的抽象画家となったサトルは、幾何学構成的絵画から立体作品、環境造形作家として、パリを拠点に多くの制作、発表を各国で行っている。91～2007年国立パリ大学第八、造型美術学科講師。07年宮城県登米市中田町にサトル・サトウ・アート・ミュージアムが開館。08年パリ招待サロン、リアリティー・ヌーベル(幾何学構成絵画)の運営審査委員。第一等文化功労賞(エクアドル政府)。国際彫刻シンポジウム大賞(韓国・山清郡)。朝鮮戦争終結50周年記念国際彫刻シンポジウム名誉区民賞(釜山広域市南区)。洋画家、造形、立体

佐藤三郎 (さとう・さぶろう/1908～1997年)

山形県生れ。1931年酒田新聞社に入社。59年には山形新聞社に論説委員。32年同級生の洋画家小野幸吉の遺作集を出版。47年本間家の収集品を納めた本間美術館の創設に尽力し、後年館長に就任。72年鶴岡市で高山樗牛賞、73年酒田市文化功労賞、93年齋藤茂吉文化賞。著作には『酒田の本間家』『庄内藩酒井家』。版画関係では洋画家小野幸吉の友人達が酒田で発行した版画誌『隕石ト花々』第1号(1933.1)に『野菜』『築港風景』『サボテン』を発表。1997年没、89歳。本間美術館館長、版画

佐藤志津 (さとう・しづ/1851～1919年)

下総、佐倉生れ。佐藤尚中の長女。女子美術学校の経営再建のための資金を提供し、1902年校主、04年校長。夫は順天堂医院3代院長佐藤進。1919年没、69歳。明治-大正時代の教育者。女子美術学校校長

佐藤醇吉 (さとう・じゅんきち/1876～1958)

岩手県生れ。岩手師範を経て小学校代用教員。明治美術会の松岡寿に師事。1898年東京美術学校西洋画科に入学、成績品展示会で一等。1900年同校卒、東京帝国大学植物学教室に勤務。理学博士・三好学の著書の挿図を担当。1911年朝鮮総督府より史料調査を嘱託され満蒙調査に同行、15年に満州探検回想録を岩手日報に連載。17年松岡寿の大阪中の島公会堂貴賓室天井画制作に助手参加。19年和田英作と植物図譜「群芳図譜」著作刊行。23年岩手出身の在京芸術家の団体「北斗会」結成に参加。28年宮内省生物学研究室に勤務。41年北斗会、七光社、素顔社が統一され「岩手美術連盟」となり、第1回展に出品。56年頃コロアの伝記を翻訳。1958年没、82歳。植物図鑑、記録画

佐藤真一 (さとう・しんいち/1915～1982年)

愛知県生れ。1937～40年二科展に出品。40年京都大学経済学部卒。在学中、須田国太郎に師事。47年より行動美術展に出品。52年行動美術協会会員。57年渡仏。74年～82年武蔵野美術大学教授。東京で没、66歳。洋画家、美教

佐藤仁視 (さとう・じんし/1927～1987年)

1927年生れ。49年東京美術学校区画画師範科卒、富山県洋画連盟委員長。金沢市で没、59歳。洋画家、美教

佐藤助雄 (さとう・すけお/1919～1987年)

山形県生れ。仏師の子。後藤良(なoshi)、北村西望に師事。1931年新文展入選、43年特選。76年日展で文部大臣賞。80年芸術院賞。82年日本彫刻会委員長。木彫から出発しブロンズに転じた。作品に「地と風」「振向く」など。1987年没、68歳。彫刻家

佐藤 進 (さとう・すすむ/1914～1992年)

北海道生れ。1935年旭川師範学校専攻科卒。札幌の小学校に赴任。38年道展入選、43年道展長官賞、47年道展会員。43年一水会入選、56年一水会会員。46年日展入選、80年改組日展特選、81年日展無鑑査。1975年旭川市文化賞。1992年没、78

歳。97年「佐藤進展」(北海道立旭川美術館)開催。

洋画家、水彩

佐藤清三郎 (さとう・せいざぶろう/1911～1945年)

新潟市生れ。1926年新潟貯蓄銀行に就職。独学で絵を学ぶ。35、38、42年新潟県展に入選。1945年横須賀武山海兵団で没、33歳。油絵、堀端や信濃川縁の風景、働く人々、自画像等の多数の素描が残された。73年銀座の現代画廊で「遺作 佐藤清三郎素描展」が開催。洋画家

佐藤清蔵・朝山・玄々 (さとう・せいざう・ちようざん/1888～1963年)

福島県生れ。幼時から父祖相伝の宮彫師の家業たる木彫を父と伯父に学び、のち出京して18才頃から山崎朝雲に師事。1914年平櫛田中、内藤伸、吉田白嶺とともに再興日本美術院同人。院展木彫の中心的存在。「呪咀」「シャクンタラ姫とドウシャンタ王」「釈迦に幻れた魔王の女」など、豊満で官能的な作品。一脈インド彫刻にも通うような呪術的で神秘的な作調を示した。22～24年日本美術院から派遣されてフランスに留学し、ブールデルに師事し、またルーヴル美術館などで古典彫刻を研究。「哺乳」「田中氏像」「牝猫」「鷹」など、西欧留学によって得た西洋近代彫刻への咀嚼と彼の内にもある伝統的要素とがよく結晶した作調が生まれてきた。25年松田改組帝国美術院第二部会員に平櫛田中とともに任命、モニュメンタルな力作「八咫鳥」を発表、37年帝国芸術院会員、37年新文展の審査委員、自作の発表はなく、39年大日本護国会で紀元2600年記念事業として計画した和気清麿銅像の建立に、朝倉文夫、西村西望とともに原型の依頼をうけ、三者競作のかたちで朝山が選ばれ、製作した。清蔵に改名。戦後三越岩瀬社長の懇望によって約10年の歳月を費した労作「天女像」(60年完成除幕)などの衆目の話題作が、彼の晩期を飾る仕事となった。京都市で没、75歳。日本芸術院会員。旧号、朝山。号、阿吽洞・玄々。彫刻家、版画

佐藤泰治 (さとう・たいじ/1915～1960年)

東京生れ。川端画学校で学び宮本三郎に師事。新聞小説や雑誌などの挿絵をえがく。代表作に川端康成作「舞姫」。1960年没、45歳。東京出身。洋画家、水彩、挿絵

佐藤泰生 (さとう・たいせい/1945年～)

大連生れ。1967年東京藝術大学油絵科卒、大橋賞、69年大学院修了。73～78年仏政府給費留学渡仏。77年昭和会賞。80年新制作協会会員。92年和光大学教授。東京中心に個展開催。高島屋、日動画廊9回。2007年諏訪市美術館で「佐藤泰生の世界展」。新聞挿絵制作。洋画家、美教

佐藤武造 (さとう・たけぞう/1891～1972年)

長野県生れ。1908年上京、精美堂(現共同印刷)で石版画工、夜、丸山挽霞の日本水彩画研究所に通う。14～24年渡英、ロイヤル・インスティテュート展挿絵が入選、ロンドン市立チェルシー美術学校に入学、油画を学ぶ、公募展入選多数。個展開催、米、ベル

ギーでも個展。24年帰国、日本水彩画展、構造社展に出品、28年構造社客員。32年再渡英、漆絵の制作開始、39年帰国瑞漆画(漆絵)の完成に腐心、発表した。72年没、80歳。水彩画、洋画、漆絵、版画

佐藤多持 (さとう・たもつ/1919～2004年)

東京生れ。1941年東京美術学校本画科卒。山本丘人に師事。油絵も試み、47～57年油彩作品を旺玄会展出品。49年尾瀬にスケッチ旅行に出かけ群生する水芭蕉に感動。57～96年知求会を結成。60年「日本画の新世代展」(国立近代美術館)選出。85年池田20世紀美術館で個展。2004年没、85歳。日本画家、油彩

佐藤朝山・玄々Ⅱ (さとう・ちようざんくげんげん>/1888～1963年)

福島県生れ。代々宮彫師で幼時から彫技を学び、上京して1905年ごろ山崎朝雲に師事。14年再興日本美術院に出品、同人。木彫の「呪咀」「シャクンタラ姫とドウシャンタ王」など、官能的な作品を発表。22年美術院から派遣されてフランスに留学。アントワヌ・ブーデルに師事。24年帰国、「牝猫」「鷹」「哺乳」などを制作。37年帝国芸術院会員、37、39年文展審査委員。改組後の帝展に出品したモニュメンタルな力作「八咫鳥」、紀元2600年記念事業として40年建立された「和気清麿像」を完成。これは北村西望、朝倉文夫にも原型が委嘱され、3者競作となった。戦災で京都妙心寺に移住、60年日本橋三越の大天女像を完成した。1963年没、75歳。彫刻家、版画

佐藤忠良 (さとう・ちゅうりょう/1912～2011年)

宮城県生れ。1939年東京美術学校彫刻科卒。同期の舟越保武らと共に新制作派協会彫刻部の創設に参加。45～48年シベリア抑留。60年高村光太郎賞。66年東京造形大学創立と共に教授。74年毎日芸術賞、芸術選奨文部大臣賞。75年中原悌二郎賞、75、77年長野市立野外彫刻賞。81年フランス国立ロダン美術館で個展。福音館書店版の絵本『おおきなかぶ』の挿絵制作。90年宮城県美術館内に佐藤忠良記念館設立。92年河北文化賞。東京で没、98歳。生前日本芸術院会員、文化功労者、文化勲章、の推薦、候補を辞退。彫刻家、美教

佐藤貞一 (さとう・ていいち/生没年不詳)

1920・30年代の京城に在住。京城帝国大学医学部解剖学教室に勤務し、解剖図を描いていた。25、28～31年朝鮮美術展に油彩画が入選。29年個人展(京城歯科医学専門学校)を開き、29年帝展(東京)に油彩画が入選。29年頃多田毅三らと「朝鮮創作版画会」を結成。29年「佐藤貞一創作版画頒布会」が企画。生没年不詳。洋画家、版画

佐藤 哲 (さとう・てつ/1944年～)

大分市生れ。1966年大分大学学芸学部美術科卒。67年江藤哲に師事。75年日展入選、同年東光展会友賞。82、93年日展特選、東光展会員賞。91年ジャパンフェスティバル・イン・ベルリン展金賞。2009年日展文部科学大臣賞受賞。13年日本芸術院賞受賞。11年東光会代表理事。13年日展理事。15年日本芸術院会員。16年日展副理事長。洋画家

佐藤哲三郎 (さとう・てつさぶろう/1889～1958年)

新潟市生れ。1912年東京美術学校卒。12年文展で三等賞。二科会創立会員。29年第一美術協会創立に参加。37年新文展無鑑査。東京で没、69歳。洋画家

佐藤哲三 (さとう・てつぞう/1910～1954年)

新潟県生れ。1925年新発田尋常小学校卒。25年ゴッホなどの画集を参考に独習。26年新発田在住の絵の仲間と「野人社」を結成。27年第1回大調和美術展に7点出品するもすべて落選。結果に納得できず上京、岸田劉生を訪ねるも不在で、たまたま居合わせた梅原龍三郎から指導を受けた。これが機縁となり、以後、梅原の知遇を得る。28年第3回国展に初入選。29年第4回国展入選。30年第5回国展で国画奨学賞。第2回聖徳太子奉賛美術展に出品。31年第6回国展で国画奨学賞。32年国画会友。37年国画会会員、会友制を廃止、国画会同人となる。以後43年国画会会員となり、28回まで出品した。54年6月25日新発田市で没、享年44歳。(佐)洋画家、版画

佐藤哲郎 (さとう・てつろう/1924年～)

仙台市生れ。1946年フジキ洋画研究所修了(宮田重雄指導)、中央美術学園卒業、児島善三郎に師事。57年今泉篤男に師事。66年欧遊。77年外務省買上。78、80、82年渡仏。87年サロン・ドートンヌ会員。三越、東京大丸、松坂屋で個展。サロン・ドートンヌ会員、モダンアート協会会員、日本美術家連盟会員、日本ばら会会員。洋画家

佐藤十蟻 (さとう・とあり/1903～1946年)

新潟県生れ。洋画家佐藤哲三は、七歳下の弟。1922年県立新潟師範学校卒。26年東京美術学校図画師範科卒。病氣療養のため帰郷。文芸・美術など芸術を扱った同人誌『土塊』(1927～1929)を十蟻が中心となって創刊。版画・詩・評論を発表。28年新潟県立村上高等女学校、31年栃木県立宇都宮女子高等師範学校で教える。1946年没、43歳。美教、版画、

詩、絵画、評論

佐藤利宗 (さとう・としむね/1937年～)

長崎県生れ。1960年長崎大学教育学部卒。66年長崎県展入選、68、71、76年長崎県民展知事賞。80年長崎県展西望平和賞。69年西日本洋画新人秀作展、銀賞。72、77年全国県展選抜展、文部大臣賞。85年佐藤利宗、松田綏[すい]一 2人展。洋画家、美教

佐藤暢男 (さとう・のぶお/1926年～)

神奈川県生れ。横浜市市立鶴見工業学校卒、東京陸軍航空学校卒。1965年国画会展で国画賞。66年日本版画協会展会員、クラコウ国際辺がビエンナーレ・買上賞。67年国際版画協会(IGAS・ニューヨーク)出品。69年ビストア国際版画ビエンナーレ(イタリア)、74年現代メゾチント作家招待展(オックスフォード大学)。75年若き世代の銅版画展(パリ)。93年エジプト国際版画トリエンナーレ(ギザ)。版画家

佐藤 昇 (さとう・のぼる/1936年～)

大分市生れ。1954年大分大学学芸学部に進み、武藤完一、浜田九一郎、仲町謙吉らの指導を受け、卒業後は、市内の小・中学校の教諭。56年大分県美術展入選。60年奨励賞。東光会展に出品を始め、62年大平敬次郎、岡部忠之、脇坂秀樹ら7人で東光会大分支部「豊光会」を設立。72～95年東光会会員。95年大分県美術展を中心に発表を続け、現在、大分県美術協会(日・洋・彫・工部会)大分支部長。洋画家

佐藤 宏 (さとう・ひろむ/1923年～)

三重県生れ。名古屋市立工業専修学校卒。1955年国画会展、日本版画協会展入選し、33年国画賞、38年国画会会員。32年東京国際版画ビエンナーレ展に出品し、以後各地の国際版画展で活躍。木版画をおもに制作し、同一または相似する形を多様に変化させる抽象作品がおおい。日本の抒情風景を連作。版画家

佐藤正明 (さとう・まさあき/1941年～)

甲府市生れ。1962～66年甲府市にある甲斐絵画研究所に学ぶ。67年渡英、二年間ロンドンのヘザリー美術学校で学ぶ。70年米、NYに渡り、マックス・ベックマン記念奨学金を受けて、74年までブルックリン美術館付属の美術学校に学ぶ。85年NYのO.K.ハリス画廊で個展。洋画家

佐藤真生 (さとう・まさお/1963年～)

山形県酒田市生れ。山形県立酒田東高等学校卒、東京学芸大学美術科、同大学院修了。1990年多摩秀作美術展準大賞(青梅市立美術館)、91年上野の森美術館絵画大賞展佳作、93年安井賞展賞候補。97年本間美術館において個展。2016年より地域伝承文化をテーマとした子どものワークショップを行う等、アート教育分野の活動にも取り組んでいる。平面作品の他に、立体、映像、オブジェ、執筆など幅広く制作活動を行っている。**洋画家、立体、オブ、美教**

佐藤米太郎 (さとう・よねたろう/1912～1958年)

青森市生れ。弟は同じく版画家の佐藤米次郎。今純三や棟方志功、松木満史らとの交際からはじめ油絵を手がけ、やがて版画に着手、1930年青森初の創作版画誌『緑樹夢』に参加(2号、3号を確認)。31年米次郎が「青森創作版画研究会・夢人社」を立ち上げて『彫刻刀』を創刊すると同人。朝鮮へ渡り、仁川へ移住。仁川税務署に勤め制作を続け、朝鮮風俗に多く取材。1931年東奥美術展で入選、40年国画家展に入選。44年朝鮮美術展に入選。戦後は青森に帰り、米次郎とともに「青い森社」を創設、出版業に関わった。53年豆本作品『十和田湖の伝説』(緑の笛豆本の会)を刊行。1958年没、46歳。**版画家**

佐藤聖美 (さとう・まさみ/1946年～)

甲府市生れ。斉藤美術研究所で美術を学び、共に学んだ佐藤正明と結婚し、NYに移り住む。1994年米ロス博物館グループ展出品。95年NYで個展開催。NYの街の情景を細密に描写する夫、正明の作品を100分の1に縮小し、それを精密な半立体の作品に作り上げるという独特の作品制作のプロセスを採る。夫、正明との親密なコラボレーションという。米ビーズドリームス最優秀作品賞。**立体、ビーズ**

佐藤米次郎 (さとう・よねじろう/1915～2001年)

青森市生れ。1929年青森中学校時代、根市良三、柿崎卓治と創作版画誌「緑樹夢」刊行。30年私家版「版画蔵書票」出版。以後30冊出版。55年日本美術家連盟会会員。県版画会創設し後進の指導。80年青森県文化賞、83年青森県褒賞。第1回地域文化功労者文部大臣賞。2001年没、86歳。**版画家**

佐藤利平 (さとう・りへい/1908～1993年)

小諸生れ。神津港人に師事。構造社展、1946年長野県展発起人。緑巷会に出品。レンブラントに影響を受け、重厚、緻密な風景画、静物画を描いた。71年第一美術協会展で文部大臣奨励賞。93年没、85歳。

小諸市高原美術館、梅野記念絵画館に作品収蔵。**洋画家**

里見勝蔵 (さとみ・かつぞう/1895～1981年)

京都生れ。関西美術院に通う。1919年東京美術学校西洋画科卒。21～25年渡仏し、ヴラマンクに師事。26年「一九三〇年協会」創立会員。30年独立美術協会創立会員。26年樗牛賞、27年二科賞。30年二科会員。59年国画家会会員。鎌倉で没、85歳。(出典 わ眼)**洋画家**

里見 弼 (さとみ・とん/1883～1983年)

横浜市生れ。兄は作家の有島武郎、画家の有島生馬。白樺派を代表する作家、代表作には「多情沸心」「極楽とんぼ」など。菊池寛賞、読売文学賞、文化勲章、最晩年に書画集「垣のぞき」を発刊。**小説家、画課、版画**

里見宗次 (さとみ・むねつぐ/1904～1996年)

大阪生れ。る。小出檜重の感化を受ける。日本画家の井口華秋に師事するが、フランスより帰国した小出の留学生活を聞き、パリ行きを決意。1922年渡仏、23年に日本人初のエコール・デ・ボザール(パリ国立美術学校)の本科入学。最初は油絵を学んだ。自活のためショパン広告社、のちフレガット広告社に勤務、商業美術に転じ戦前のパリで「ムネ・サトミ」の名前で活躍。28年に制作したゴロワーズのたばこポスターで国際的に注目、34年KLMオランダ航空のポスター等、アール・デコ様式の作風展開、グラフィック・デザイナーとしての地位を確立。37年のパリ万国博覧会で日本国有鉄道のポスターが名誉賞と金杯を受賞。第二次世界大戦で一時帰国、外務省よりタイ・仏印国境画定委員としてサイゴンへ派遣、のちバンコクへ移り終戦を迎える。以後もバンコクに残り、52年に再び渡仏、制作を行った。74年勲三等瑞宝章を受章。89年に帰国。作品集に『巴里花画集』(京都書院)、著書に『のすどディアマン—ある広告美術家の歩いた道』がある。奈良で没、91歳。**グラフィック、ポスター**

真田久吉 (さなだ・ひさきち/1884年～不詳)

東京生れ。白馬会に学ぶ。1909年東京美術学校西洋画科本科卒。12年、ヒュウザン会(後のフウザン会)設立に参加、第1、2回展出品。16年、斎藤与里、萬鉄五郎らと日本美術協会を設立。26年春陽会会友。(出典 わ眼)**洋画家、版画**

佐野智子 (さの・ともこ/1925～1994年)

東京生れ。女子美術専門学校師範科西洋画部卒。

山梨県で教職。1949年創元会展入選し、60年会員。日展に出品。64年安井賞展入選。山梨美術協会展出品。個展も開催。女性美術家のリーダー、女性美術家団体や女流展を組織。野原やけしの花畑を題材に形態や色彩の構成を通して自然の本質を表現することに努めた。1994年没、69歳。洋画家

佐野繁次郎 (さの・しげじろう/1900～1987年)

大阪生れ。小出檜重に師事、信濃橋洋画研究所に通う。佐伯祐三に感化。1931年二科展で犇牛賞。昭和初期より挿画、装幀を多数手がける。37年渡仏、アンリ・マティスに師事。38年帰国。47年二紀会の創立に参加、会員、のち委員。パピリオ化粧品店の重役。日本国際美術展、現代日本美術展に招待出品。87年没、87歳。洋画家、挿絵

佐野道之助 (さのう・みちのすけ/1907～1978年)

茨城県生れ。熊岡絵画道場に学ぶ。熊岡美彦、斎藤与里に師事。東光会会員。1978年没、71歳。洋画家

佐野ぬい (さの・ぬい/1932年～)

弘前市生れ。女子美術大学芸術学部洋画科卒。65年新制作作家賞、のち会員。1955年女子美術大学助手～87年教授。94～98年同大学院教授。2007～11年女子美術大学学長。2003年損保ジャパン東郷青児美術館大賞。04～07年日本美術家連盟常任理事。福沢一郎記念美術館財団理事。青色を基調とした作品多い。洋画家、美教

佐野隆人 (さの・りゅうじん/1928年～)

富山県生れ。金沢美大卒、小糸源太郎に師事。北陸特有の「とねりこ田園風景」で日展特選、無鑑査、日展会友。光風会賞、光風会会員。風景画が得意。伊勢丹新宿店アートサロンで個展。まちなか美術館作品収蔵。洋画家

佐分 眞 (さぶり・まこと/1898～1936年)

名古屋市生れ。川端画学校に学ぶ。1922年東京美術学校西洋画科卒。25年白日会展で白日賞、後に会員。26年光風会賞、29年会員。27～30年渡仏、グランド・シヨミエール研究所に学ぶ。リアリズムに立脚した堅実な画風。31、34、35年帝展で特選。33年東京宝塚劇場で美術部入社、のち美術部長。東京で自死、37歳。87年愛知県立美術館で個展(出典 わ眼)洋画家

佐分 眞 II (さぶり・まこと/1898～1936年)

名古屋市生れ。1915年東京の郁文館中学に5年生として転校。川端画学校に通う。16年東京美術学校西洋画科に入学。17年チフスを病み休学。19年3学年以後は藤島教室に入る。22年東京美術学校西洋画科卒。結婚。24年第5回帝展に初入選。25年愛知社の同人。第6回帝展入選。白日会賞、白日会員となる。26年光風会賞。美校大正11年卒同級生有志による「等迎会」創立会員。27年渡欧。31年第12回帝展で特選、三井男爵買上げ。再度渡仏。32年帰国。33年第14回帝展で特選。34年日動画廊で滞欧作個展。第15回帝展で三度目の特選。35年改組発表後結成された「第二部会」には参加せず、白日会、光風会も脱退した。36年東京自宅画室で自死、享年38歳。(佐)洋画家

鮫島 梓 (さめじま・あずさ/1900～1995年)

鹿儿島県生れ。1929年東京美術学校を卒業後、旧制都城中学校に美術教師として着任、高い指導力により創元会展等数々の公募展で受賞者を輩出。有馬良作や塩水流功などが、後に画家や美術教師として活躍。1995年没、95歳。洋画家

鮫島利久 (さめじま・としひさ/1893～1963年)

東京生れ。1918年東京美術学校西洋画科卒。37年光風会会員。帝展等に作品を発表。ま美術教育学会委員、教科用図書検定調査審議会調査員。63年目白学園短大教授。1963年没、69歳。洋画家、美教

沢田教一 (さわだ・きょういち/1936～1970年)

青森市生れ。1954年青森県立青森高等学校卒。日本の報道写真家。ベトナム戦争を撮影した『安全への逃避』でハーグ第9回世界報道写真コンテスト大賞、アメリカ海外記者クラブ賞、ピューリッツァー賞を受賞した。1970年没、34歳。写真家

澤田正太郎 (さわだ・しょうたろう/1916～1996年)

東京生れ。1936年川端画学校で学ぶ。41年東京美術学校油画科卒。45年日本民藝館に勤務。47年挿絵。53年「げふ会」を結成。55年一陽会展入選、57年一陽賞、同会会友、58年会員。58年銀座フォルム画廊で個展。62年横浜高島屋で個展。94年一陽会展で野間賞。1996年没、79歳。洋画家

澤田政廣 (さわだ・せいこう/1894～1988年)

静岡県生れ。1918年太平洋画会研究所で彫刻を学ぶ。24年帝展特選。26年東京美術学校彫刻科別科卒。27～29年帝展連続特選。31年日本木彫会が結成、会員。51年日展出品作で芸術選奨文部大臣

賞。62年日展理事、日本芸術院会員。70年日本彫塑会初代理事長。79年文化勲章。87年熱海に澤田政廣記念館開館。東京で没、93歳。彫刻家

澤田哲郎 (さわだ・てつろう/1919～1986年)

盛岡市生れ。1936年藤田嗣治に師事。38年上京、文化学院、川端画学校に学ぶ。42年二科会会友。52年二科展で特待賞。57年春陽会展春陽会賞。58年春陽会準会員。61年まで春陽会展に出品。60～62年NY・メルツァー画廊で個展。63年渡米、68年NYで個展。川崎市で没、66歳。洋画家

沢田哲郎 (さわだ・てつろう/1935～1998年)

北海道生れ。1954年北海道立札幌西高等学校卒。57年武蔵野美術学校・第二本科西洋画専攻入学。59年武蔵野美術学校・第二本科西洋画専攻から同・版画工作教員養成科に移る(60年中退)。60年自由美術協会会員、北海道青年美術家集団の発起人に名を連ねる。1980年第5回ノルウェー国際版画ビエンナーレ・審査員賞。アメリカ各国を中心に広く世界各国で個展を開催。86年自由美術協会退会。東京で没、62歳。大英博物館、ロックフェラー・コレクション。洋画家、版画

澤田文一 (さわだ・ふみかず/1949年～)

札幌市生れ。1974年二紀展入選、フランス美術賞展入選。エコール・ド・TOKYO 展招待。75年ブロードウェイ新人展新人賞。ブロードウェイギャラリー個展、80、82、83、92年。83年名古屋松坂屋個展。ほか池袋西武、渋谷西武、横浜高島屋などで個展。2012年銀座 Gallery フォレスト・ミニで20年ぶりの個展開催。洋画家

沢田光春 (さわだ・みつはる/1947年～)

大阪生れ。1977年ブリュッセル王立美術大学絵画専攻科卒、同校卒業制作展でブリュッセル賞。83年現代の裸婦大賞展で優秀賞(日本)、エコール・ド・パリ展グランプリ受賞(仏)、95年ユネ国際美術展で金賞(仏)、パリ国立美術大学客員教授、97年パリ日動画廊にて個展、2001年日本橋三越個展。99～2004年 広島市立大学客員教授(ベネチア絵画)。04年渡仏。洋画家

澤田利一 (さわだ・りいち/1932～2002年)

埼玉県生れ。1954年埼玉大学教育学部美術科卒。斎藤与里に師事し、埼玉県知事賞(洋画2回・彫刻1回)。埼玉県立近代美術館学芸部長、副館長。博物館の振興に貢献、文部大臣表彰を授与される。2002年没、70歳。(出典 わ眼) 洋画家

沢野岩太郎 (さわの・いわたろう/1903～1984年)

兵庫県生れ。1922年青木大乗に師事。24年信濃

橋洋画研究所に学ぶ。31年小出檜重、林重義に師事。33年独立展に出品。39年国画会に出品。42年国画奨励賞、F婦人賞、同人。43年新文展に入選。84年没、81歳。洋画家

佐波 甫 (さわ・はじめ/1901～1971年)

東京生れ。1930年早稲田大学フランス文学科卒。実業之日本社に勤務する傍ら坂崎坦に師事してフランス17、18世紀美術を研究し、佐波甫の筆名で美術評論活動に入る。35年「現代美術を制約するもの」(アトリエ12-8)、「美術は如何に発展するか」(みづゑ369)、「美術批評に就て」(アトリエ12-10)、「本年の洋画壇と今後の方向」(美の国11-12)、「帝院改現と復古主義の前進」(アトリエ12-7)。36年「前衛絵画の二方向—立体主義より抽象主義へ」(美術11-5)、「フェルナン・レジェ」(みづゑ379)「市民的なプライド」(美術11-2)、「芸術精神の没落」(みづゑ381)、「日本画と近代精神—市民絵画の提唱」(美之国12-3)、「日本画を如何に考えるか」(みづゑ372)、「絵画に於ける<明るさ>」(みづゑ372)、「意識の絵画について」(みづゑ376)「名井万亀氏の作品」(アトリエ13-9)、「猪熊紘一郎と宮本三郎」(みづゑ374)、「岡田謙三」「三岸節子」「海老原喜之助」(以上、みづゑ378)、「二三の絵画現象に就て」(アトリエ13-2)、「若き作家諸君に与ふ」(美之国12-9)。37年「ヒューマニズムについて」(美之国13-1)、「日本古典への関心」(美術12-6)、「日本前衛派作家論」(アトリエ14-6)、「光風会の青年作家たち」(現代美術4-2)、「安井曾太郎の今日的意義」(みづゑ383)、「小磯良平を語る」(同391)、「北川民次君の印象」(同393)、「今日の諸問題」(アトリエ14-3)、「ジョルジュ・ブラック」(みづゑ384)、「ピカソ論、上・中・下」(同386、387、389)、「ジョルジュ・ルオー」(同387)。38年「作家と精神力」(アトリエ15-12)、「我が国芸術の調和的性格に就いて」(みづゑ396)、「絵画精神の再建」(同400)、「日本画の現段階に就て」(南画鑑賞7-12)、「統制と自由」(アトリエ15-2)、「シャルダン」(みづゑ397)、「マチャス・グリューネワルト」(同399)、「クラナッハと独逸的なもの」(同403)、「ドーミエを想ふ」(同406)。39年「歴史性へのめざめ」(美術14-8)、「アラン「絵画論」(訳・みづゑ421)、「近代絵画の特質—10年間を回顧して」(美之国15-4)、「ドラムについて」(みづゑ410)、「ポール・ゴーガン」(同414)、「ドカとロートレック」(アトリエ16-12)。40年「新体制下の美術批評について」(アトリエ17-2)、「吉岡堅二と上村松篁」(美之国16-3)、「コンラッド・メイリ」(みづゑ424)。41年「須田国太郎」(みづゑ437)、「堂本印象」(美

之国17-1)、「宮本三郎」(みづゑ436)、「戦争美術の新しい創造」(帝大学生新聞7. 14)。42年「大東亜共栄圏と日本画」(国画2-3)、「仏印より帰って」(国画2-2)、「二・三の提案」(新美術9)、「仏印の印象-図画教育その他」(「造形教育8-2)。これらの論説は国際文化振興会より派遣されてインドシナ、中国各地の美術を視察したことを示している。43, 44, 45年「山口蓬春」(画論22)、「仏印の絵画」(新美術23)、「大東亜戦争と芸術」(国画3-1)。戦後は日本美術会結成準備を手はじめに重要な諸作家の論評を進めたことが、つぎの諸論説より明らかである。昭和21年より25年、「荻須高穂カザ・ロッサ」(解説・美術手帖11)、「井上長三郎」(アトリエ訪問、美術手帖16)、「小野竹喬」(三彩14)、「菊地契月」(同33)、「鶴岡政男論」(みづゑ524)、「徳岡神泉論」(三彩8)、「鬘光の芸術」(アトリエ267)、「松本竣介」(みづゑ519)、「泰西名画展の意義」(同500)、「ラウル・デュフィ」(アトリエ272)、「シャルダン」(みづゑ498)、「フランス初期画家達」(同502)、「セザンヌを想う」(BBBB5)、「我が前衛美術について」(アトリエ262)、この間に著書「裸体デッサン」(寺田政明と共著、大同出版社)「裸体絵画」(同左)がある。48年より向高南高校で教鞭をとり評論活動を離れるようになる。50年早大第二政経学部、第二法学部の仏語講師、53年文学部専任講師となり、西洋美術史と仏語を担当した。54~56年までフランスを中心にヨーロッパで美術研究を行う。56年文学部助教授、61年教授就任。この間に本名の大沢武雄の名で「セザンヌの不安」(早大文研紀要3)、「ビザンチンとルネサンスの空間」(同9)、「セザンヌの作品研究」(同13)、「ロマネスク芸術研究」(総合世界文芸XI)、「世紀末芸術」(美術史研究5)、著書「西洋美術史」(造形社、昭和34年、46年に改訂版刊行)、G、ケペッシュ著「造形と科学の新しい風景」(美術出版社、昭和41年共訳)。東京で没。69歳。美術評論家、美教

沢部清五郎 (さわべ・せいごろう/1884~1964年)

京都市生れ。1904年聖護院洋画研究所で浅井忠に師事。06年関西美術院に移り出品。07年文展に入選。10~13年米、渡欧。13年関西美術院教授。41年川島織物に勤務、図案制作。64年没、80歳。(出典 わ眼)洋画家、美教

沢村美佐子 (さわむら・みさこ/1923~2008年)

静岡県生れ。県立高女。1958年独立美術展入選、のち会員。62年パリに1年招聘修学、ヨーロッパ・中近東・エジプトを廻る。65年安井賞展入選。68~76年海外作家シリーズ展、日米女流合同展、現代日本の裸婦展等に出品。78年第3回沢村美佐子展開催、独立形象七人展。91年沢村美佐子展。独立美術協会会員、女流画家協会委員、日本美術家連盟会員。2008年没、85歳。洋画家

三田 康 (さんた・やすし/1900~1968年)

大津市生れ。1917年立教中学校卒。21年帝展入選。22年東京美術学校西洋画科卒、25年同校研究科修了。21、22年帝展に入選。30年帝展で特選。35年第二部会展で第二部会賞。36年新制作派協会創立会員。新聞小説の挿絵。67年渡仏。仏、カーニュで没、67歳。洋画家、挿絵

山東 洋 (さんとう・ひろし/1921~1988年)

和歌山市生れ。1946年中央大学法学部卒。猪熊弦一郎に師事、田園調布純粹美術研究所に学ぶ。46年新制作展入選、51、52、54年新作家賞、55年新制作賞、56年会員。43年より2年間、欧米を巡遊。78年東京セントラル美術館で個展。東京で没、66歳。洋画家

し

椎塚猪知雄 (しいづか・いちお/1879~没年不詳)

1879年生れ。1914年第1回二科展に初入選。以後二科展に出品を続ける。22年平和記念東京博覧会に出品。26年第13回二科展で会友に推挙。30年第2回聖徳太子奉賛展に出品。40年紀元二千六百年奉祝展に出品。没年不詳。(佐)洋画家

椎野 修 (しいの・おさむ/1913~1945年)

佐賀県生れ。1931年県立熊本中学校卒業、上京し、本郷絵画研究所および同舟舎に通う。32年東京美術学校西洋画科入学。33年学校では岡田三郎助教室に属す。削除(34年2年生の軍事教練の成績悪く落第。)35年学外の藤田嗣治に講演依頼に行き、藤田に師事する機縁となる。同級の成井弘、第25回二科展に入選。39年小倉の歩兵連隊に入隊。40年除隊。42年大東亜戦争銃後美術展で洋画部1位の朝日新聞社賞。福岡美術会会員。43年第1回福岡美術総合展で福岡市長賞。44年召集を受け出征。45年3月27日ビルマにて戦死、享年31歳。(佐)洋画家

塩川文麟 (しおかわ・ぶんりん/1801(8?)~1877年)

京都の人。字は士温、号は雲章、別号は可竹斎、竹斎、

泉声など。通称は凶書。父が仕えていた安井門跡(蓮華光院)の侍臣となる。岡本豊彦に入門。山水画を得意とした。豊彦宅を訪れた呉春が文麟の画をみて、激賞。天保2(1831)年の『画乗要略』には、豊彦の弟子として文麟の名が挙げられている。安政の御所造営(1855)に参加、新内裏に襖絵を制作。明治1(1868)年画家の親睦団体である如雲社を主宰。京都画壇における絶対的指導者となった。教育者としてもすぐれ、近代京都画壇の育成に貢献した幸野楳嶺以下多くの俊英を門下から輩出させた。代表作「蛍図屏風」(スペンサー美術館蔵)〈参考文献〉京都市美術館『京都画壇』1877年没、76歳。江戸時代後期の絵師

塩水流功 (しおずる・いさお/1924~1996年)

宮崎県生れ。旧制県立都城中学校卒、宮崎師範学校卒。1951年自由美術展入選、56年[自由美術家協会]会員。64年[森芳雄]、[末松正樹]らと[主体美術協会]を設立、会員。67~68年渡欧。帰国後は、各地で個展。柏市で没、72歳。洋画家

塩田清忠 (しおた・きよただ/1931年~)

いわき市生れ。1958年武蔵野美術大学卒、中学校美術教師。洋画家、59~68自由美術展に出品。69年~新制作展等に出品、60年福島県展奨励賞、県美賞、特別賞。78年福島県総合美術展審査員。76年東北新制作展で橋本美術館賞。82年いわき市文化センターで個展開催。洋画家、美教

塩田千春 (しおた・ちはる/1972年~)

大阪生れ。京都精華大学洋画科卒。1993年オーストラリア国立大学(ANU)キャンベラスクールオブアートに交換留学生として留学。96年ハンブルク美術大学に入学。99~2003年ベルリン芸術大学(UDK)にてレベッカ・ホーンに師事。07年芸術選奨新人賞、07年度 咲くやこの花賞、美術部門受賞。10年京都精華大学客員教授。15年ヴェネツィア・ビエンナーレで日本代表。20年毎日芸術賞。多摩美術大学教授。ベルリン在住の現代美術家

塩月桃甫 (しおつき・とうほ/1886~1954年)

宮崎県生れ。宮崎県師範学校入学、教職に就く。1912年東京美術学校卒。大阪浪華小学校に勤務、松山市の愛媛県師範学校に勤める。16年[文展]入選。21年台湾美術展創設、審査員、台湾美術界の振興、反石川派。46年宮崎に引き揚げ、宮崎大学講師や県展(現宮「日展」)の審査員。52年宮崎県文化賞。宮崎市で没、67歳。洋画家、美教、南画

塩津誠一 (しおつ・せいいち/1906~1980年)

倉敷市生れ。太平洋画美術学校で学ぶ。1936年文展鑑査展に入選。新文展、日展に入選重ねる。東光会で活躍。東光会審査委員。47年日展で特選。49年日展で岡田賞。日展委嘱。80年没、73歳。洋画家

塩出英雄 (しおで・ひでお/1912~2001年)

広島県生れ。1931年帝国美術学校日本画科入学。山口蓬春に指導を受け、金原省吾に東洋美学、高楠順次郎に仏教学を学び、奥村土牛に師事。宋徧流山岸宗佳宗匠に茶道を学ぶ。37年院展入選。院友。戦後も院展で活躍を続け、61年日本美術院賞・大観賞、同人に推挙。44年内閣総理大臣賞。36年帝國美術学校日本画科助手、44年武蔵野美術大学教授、59年名誉教授、2001年没、89歳。日本画家、美教

塩原文二 (しおばら・ぶんじ/1907~1978年)

小松市生れ。木下義謙に師事。一水会会員。日展に出品。陶芸を徳田八十吉のすすめで手掛けた。1978年没、71歳。洋画家、陶芸家

塩見栄一 (しおみ・えいいち/1927~1990年)

熊本県生れ。熊本工業専門学校卒、1954年多摩美術短期大学卒。58年一水会会員、73年優賞、一水会委員。安井賞展、新鋭選抜展、明日への具象展、具象現代展ほか。東京で没、62歳。洋画家

塩見競 (しおみ・きょう/1873~1936年 1879~1922年)

岡山県生れ。1899年第4回白馬会展に出品。以後第7回展まで出品。1902年東京美術学校西洋画科本科卒。03年~04年近衛兵歩兵連隊などに志願。06年富山県富岡中学勤務(08年まで)。08年中国の南京両江師範学堂に勤務(12まで)。11年第6回文展に初入選。13年第7回文展に出品。東美卒の原田竹二郎らと五更会を結成。14年東京帝国大学理学部植物学教室の雇員となる。20年同教室助手。36年12月9日東京で没、享年63歳。(佐)洋画家、美教

塩見仁朗 (しおみ・にろう/1929~1996年)

宮崎市生れ。1951年京都市立美術専門学校日本画科卒、同研究科へ進学、56年京都市立美術専門学校研究科修了。54年新制作協会展に入選。61、65、67、68年新制作展新作家賞、69年同会会員。74年創画会設立会員。77~82年京都日本画専門学校副校長、92年京都市立芸術大学客員教授。京都で没、67歳。日本画家

塩谷 亮 (しおや・りょう/1975年～)

東京都生れ。1998年武蔵野美術大学油絵学科卒。2008年文化庁新進芸術家研修員として伊に派遣。17年画集刊行(求龍堂)。彩鳳堂画廊、日本橋三越、BunkaGalleryで展。二紀会会員。**洋画家**

志賀健蔵 (しが・けんぞう/1935年～)

高知県生れ。1950年半ば～1960年半ばまで活躍した前衛画家。読売アンデパンダン展に出品。シェル美術賞2等。モダンアート展に出品。1965年の東京ヒルトンホテルでの個展を画家としては最後と宣言。**洋画家**

シガサナエ (しがさなえ/1973年～)

仙台市生れ。2002～03年GEISAI出品。03年マキマサルファインアーツで初個展。以降、個展、グループ展参加多数。05年「相川さなえ」に改名。(＊フィギュア・アーティスト)(出典 わコレ) **立体、フィギュア**

四方 れい (しかた・れい/1902～1980年)

神戸市生れ。県立神戸第一高等女学校卒。27年朝鮮京城に住み、終戦まで朝鮮美術展に出品。50年春陽展に入選。63年春陽会準会員。66年春陽会会員。**詩情のあるプリミティブ風の絵画**として知られた。名古屋で没、78歳。**洋画家**

志賀 広 (しが・ひろし/生誕年不詳～1988年)

1949年新現美術協会創立会員。64年モダンアート協会展で協会賞、67年同会会員。61年仙台フジヤ画廊で鈴木光一と二人展。河北美術展顧問。1988年没。2009年宮城県立美術館の「前衛のみやぎ」に作品出品。**洋画家**

四竈公子 (しかま・きみこ/1935年～)

茨城県生れ。明治学院大学で社会福祉を学ぶ。77年武蔵野美術短期大学卒。84～2000年銀座、ギャラリータカノで個展開催。98、05、15年フィリア美術館で個展。98年画集刊行。2010梅野記念絵画館で個展。**洋画家**

志賀幸雄 (しが・ゆきお/1954年～)

いわき市生れ。1974年東京デザイナー学院商業デザイン科卒。78年日本現代版画大賞展。79年現代日本美術展。80年日本国際美術展等に出品、海外版画展にシルクスクリーン作品を出品。**洋画家、版**

鳴 剛 (しぎ・ごう/1943年～)

東京生れ。1966年東京芸術大学美術学部絵画科卒、68年同大大学院美術研究科修了。76～77年ボルフスブルグ市美術館の招待芸術家としてドイツにて研修。80～90年滋賀大学教授。97年～女子美術大学教授。**洋画家**

式場隆三郎 (しきば・りゅうざぶろう/1898～1965年)

新潟県生れ。1921年新潟医大卒。29年医学研究、ゴッホ研究欧州視察、西欧民芸の基礎的調査中、医学博士の学位。32年静岡脳病院長、勤務中「ファン・ゴッホの生涯と精神病」2巻を聚楽社より刊行。34年「バーナード・リーチ」(建設社)、「テオ・ファン・ゴッホの手紙」(向日庵)刊行。35年ポール・ガッシュ編『印象派画家の手紙』翻訳。36年市川市国府台に式場病院を創立。41年「焰と色」(S, ポラチック著ゴッホ伝記小説翻訳、牧野書房)。48年「長崎の鐘」(永井隆著、日比谷出版)を世に出す。49年厚生省中央優生保護委員、日本精神病院協会理事に就任。54年「ヴァン・ゴッホ」(新潮社)、国立松方コレクション美術館建設連盟副会長。募金のためゴッホ展。ロートレック展。講演会を開催。56年「山下清画集」(新潮社)。55年山下清作品展全国各地で開催。61年山下清をつれて渡欧。滞欧作品展。「ヨーロッパふらりふらり」(文芸春秋社)。1965年没、67歳。**評論家、著述**

執行正夫 (しぎょう・まさお/1926～1992年)

静岡県生れ。文化学院美術科卒。1952年モダンアート展入選、55年協会賞、57年会友、59年会員。読売アンデパンダン展出品。56年シェル美術賞展で佳作賞。64～65年渡仏留学、パリ国立美術学校に入学、シャプラン・ミディ教室に学ぶ。名春中央病院(名古屋)、恩田第二病院(松戸)、愛川町文化センター(神奈川)、モザイクで壁画、床絵等を制作。多摩美術大学講師モザイク壁画を指導、九州産業大学、武蔵野美術短期大学でも教鞭。東京で没、66歳。**洋画家、壁画、美教**

繁野三郎 (しげの・さぶろう/1894～1986年)

札幌市生れ。1915年札幌師範学校卒。25年第1回道展に水彩画入選。28年日本水彩画会展に初入選。29年道展会員。30年日本水彩画会会員。北海道内、青森県にまたがる図画教育に携わる。39年北海道水彩画会創立。60年北海道文化賞。65年道展常任委員。74年日本水彩画会評議員。75年道展名誉会員。79年札幌市民芸術賞。86年8月6日没、享年92歳。(佐) **水彩画、美教**

四國五郎 (しこく・ごろう/1924～2014年)

広島市生れ。シベリア抑留を経験し、その間に原爆で弟を失った四國五郎は、故郷広島に帰還したのち、峠三吉らと反戦文化運動に詩画人として身を投じ、『原爆詩集』の表紙絵・挿絵、街頭に展示される辻詩の絵画部分、数々のサークル誌の表紙絵・挿絵などを描き続けた。市民のなかで市民のために描き続けた四國五郎は、反戦平和を主題とする作品を描き続ける一方、1974年に広島で「市民が描いた原爆の絵」を集める運動が始まった際には、市民に自らの被爆体験を描く方法を示唆する役割を果たし、その高揚を支えた。最近では、シベリア抑留体験に基づく絵日記(『わが青春の記録』)が復刻され、シベリア抑留体験を描いた後年の作品が注目を集めてもいる。画文集『広島百橋』の著者でもある四國五郎は、広島では広く親しまれている存在ではあるものの、全国的には『絵本 おこりじぞう』の画家として記憶されているにとどまるかもしれない。しかし、シベリア抑留体験や被爆体験を描いた画家として、また、詩と絵画をもって深く社会運動と関わった詩画人として、さらには市民のなかで市民のために描き続けた画家として、急速に再評価が進んでいる。2019年、大阪大学総合学術博物館 待兼山修学館で四國五郎展。NHK ドキュメンタリー番組で放映。画家、挿絵、絵本、詩人

信太金昌 (しだ・きんしょう/1920～2015年)

秋田県生れ。東京美術学校卒。山本丘人に学ぶ。1943年新文展入選。48年創造美術結成後は、同展や新制作展、創画会展などで作品を発表。創画会会員。2015年没、94歳。日本画家

耳 鳥齋 (じちょうさい(にちょうさい)/1801～1804年)

大阪生れ。酒造業、骨董業を営む。狂画を能くし、戯作・音曲にも通ずる奇人であった。享和頃(1801～1804)歿、享年未詳。江戸の浮世絵師の意味

実川暢宏 (じつかわ・のぶひろ/1937年～)

静岡県生れ。十代から「美術手帳」「芸術新潮」に親しむ。上京後、明治書房のエスパース画廊を通じて久保貞次郎に出会い、その後の画廊人生に多大の影響を受ける。1964年、南画廊で山口長男の作品を買ったことを契機に、画廊主の志水楠男と親しくなる。1969年、自由が丘画廊を始める。南画廊を通じて、瀧口修造と出会い、影響を受ける。小コレクターの会(小オークション)を南画廊から譲り受け、開催。尾崎正教の「わたくし美術館」の名つけ親になった。1981年銀座自由が丘画廊を始める。2010年著書

「現代美術 夢 むだ話」(冬青社)。2017年著書「現代美術 夢のつづき」(冬青社)。自由が丘画廊主

漆原英子 (しつはら・えいこ/1928～2002年)

ロンドン生れ。1946年聖心女子学院語学部卒。父は漆原木虫、46年聖心インターナショナル卒。47年阿部展也に師事。52年タケミヤ画廊で個展。瀧口修造が企画したタケミヤ画廊でデビューし、ここを舞台に活動を展開した。81年「1950年代—その暗黒と光芒」展(東京都美術館)に出品。94年日本画廊で個展。2002年没、74歳。洋画家

品川 工 (しながわ・たくみ/1908～2009年)

新潟県生れ。1935年恩地孝四郎に木版画を師事。49年国画会会員。52年海外版画展出品。96年練馬区立美術館で「品川工・山口勝弘・現代美術の手法展」、2008年同美術館で「生誕100年記念 品川工展」。09年没、101歳。(出典 わ眼)版画家、立体(モビール)

品川 工 II (しながわ・たくみ/1908～2009年)

新潟県生れ。東京府立工芸学校金属科卒。1935年版画家恩地孝四郎に師事し、木版画を学ぶ。光村印刷会社、農商省工芸指導所玩具研究室に勤めた。写真を応用したフォトグラム、光の版画など多彩な版画を制作。47年日本版画協会、49年国画会会員。52年カリフォルニア美術展、各地の国際版画展に出品。版画のほかモビール、立体など多彩な創作活動、実験的な新しい造形に挑む。96年練馬区立美術館で「メディアと表現—品川工・山口勝弘展 現代美術の手法」が開催。版画という枠を大きく超えた創作活動が高く評価。2008年同美術館で「特集展示」
「生誕100年記念 品川工の版画」展が開催。東京で没、101歳。版画家、立体(モビール)

地主悌助 (じぬし・ていすけ/1889～1975年)

鶴岡市生れ。1912年上京、坂本繁二郎に師事。14年秋田師範学校教諭。54年神奈川に移住、絵画制作に専念。56年日本橋丸善で個展。小林秀雄が認める。現代画廊、日動画廊、資生堂ギャラリー等で個展。71年新潮社で日本芸術大賞。72年秋田市立美術館などで個展。神奈川県で没、86歳。洋画家

市ノ木慶治 (しのき・けいじ/1891～1969年)

名古屋生まれ。1905年森村組に入社、その後、日本陶器画工部へ。リタケの陶画作者として活躍。光風会会員、日展無鑑査、京都市美術館所蔵 1969年没、78歳。洋画家、陶画

篠田桃紅 (しのだ・とうこう/1913年～)

中国大連生れ。下野雪堂に書を学ぶ。1936年鳩居堂で個展。47年抽象作品制作。51～56年書道芸術院に所属。56～58年渡米。積極的に個展を開催。61年「ピッツバーグ国際現代絵画彫刻展」で特選。92年岐阜県立美術館で個展。(出典 わ眼) **水墨画、書**

篠原 愛 (しのはら・あい/1984年～)

鹿児島県生れ。2007年多摩美術大学絵画学科油画専攻卒。07、08年ギャラリーQ (東京)、08年 Mehr Gallery (NY)、09、11、14、15、17年 GALLERY MoMo Ryogoku (東京) で個展。06年「GEISAI#10」東京ビックサイト (東京) に出品。09年「損保ジャパン美術財団 選抜奨励展」損保ジャパン東郷青児美術館 (東京)、17年「VOCA展 2017」上野の森美術館 (東京) に出品。 **洋画家**

篠原昭登 (しのはら・あきと/1927年～)

長野県生れ。1947年旧制諏訪中学校卒。49年東京第三師範学校美術科卒。練馬区立開小学校に奉職。51年田崎廣助に師事。52年光風会、53年日展入選、90、94年日展で特選、審査員を経て2005年会員。52年一水会入選。84年茅野市美術館協議委員。89年茅野市芸術文化協会設立、副会長。 **洋画家、美教**

篠原有司男 (しのはら・うしお/1932年～)

東京生れ。1952年東京芸術大学美術学部油絵科入学、57年中退。58年村松画廊で個展。60年「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」を結成。イミテーション・アート、ボクシング・ペインティング」。69年ロックフェラー三世奨学金で渡米、NY定住。72年段ボールを使ったオートバイの彫刻「モーターサイクル・ブルックリン」などを作り始める。「篠原有司男 ボクシング・ペインティングとオートバイ彫刻展」(神奈川県立近代美術館、2005年)。2012年ニューヨーク州立大学で個展。 **現代美術家、洋画家、立体、ネオ・ダダ**

篠原 薫 (しのはら・かおる/1888～1987年)

香川県生れ。香川工芸学校に学ぶ。日展入選。1931年白日会展で白日賞、32年会友、33年会員、のち委員。千葉県流山市で没、99歳。 **洋画家**

篠原新三 (しのはら・しんぞう/1889～1966年)

長野市生れ。1909年日本水彩画会研究所に入所。丸山晚霞、木下藤次郎に学ぶ。13年日本水彩画会

創立に発起人として参加。南薫造、石井柏亭に師事。47年日展委員。日本水彩画会名誉会員。北信美術会顧問。長野市で没、75、76歳。(出典 わ眼) **水彩画家**

篠原道夫 (しのはら・みちお/1960～1992年)

栃木県生れ。1985年多摩美術大学油画科卒、87年同大学院修了。87年4ヶ月訪伊。90～91年八王子で個展。1992年自死、32歳。93年銀座画廊「轍」で遺作展。2013年梅野記念絵画館で個展。2017年足利市美術館で個展。 **洋画家**

司馬江漢 (しば・こうかん/1747～1818年)

江戸生れ。江戸後期の画家。別号に春波楼・西洋道人等がある。狩野古信に学び、鈴木春信に浮世絵を、宋紫石から南蘋派を学ぶ。小田野直武より西洋画法を学び、腐蝕銅版画の製法を修得、日本初の銅版画を創始。油彩画も制作、西洋画法による日本風景図を確立。著書に「春波楼筆記」。1818年歿、71歳。 **江戸時代の絵師、浮世絵師、版画**

柴崎恒信 (しばさき・つねのぶ/1874～1936年)

愛媛県生れ。1898年第3回白馬会展に出品。以後11回展まで出品。1900年東京美術学校西洋画科本科卒。パリ万国博覧会に出品。24年頃、私立京北中学校(小石川)に勤務。「図画教育スケッチの実際の巻(下巻)」を中沢弘光、山村誠一郎他と担当。36年没、享年62歳。(佐) **洋画家、美教**

芝 千秋 (しば・せんしゅう/1877～1956年)

京都市生れ。梅村景山に日本画を学ぶ。1902年浅井忠に入門。03年聖護院洋画研究所で学ぶ。05、06年関西美術会展で鉛筆画二等賞、一等賞。06。小川千麿らと日本画の進歩的な研究団体「丙午会」を結成。12年「千秋画会」結成。主に水彩画、日本画を描く。56年没、79歳。 **水彩画家、日本画家**

芝 千秋 II (しば・せんしゅう/1877～1956年)

京都生れ。梅村景山に日本画を学ぶ。1902年入洛後の浅井忠に洋画を学ぶ。03年聖護院洋画研究所に入る。04年関西美術会第3回競技会鉛筆の部で二等賞。06年関西美術院に移る。関西美術会第5回競技会で一等賞。丙午会を小川千麿らと結成。07年にも同競技会で一等賞。08年、09年にもそれぞれ連続して二等賞、三等賞。19年第1回帝展に日本画が初入選。関西美術会で受賞を重ねる一方で、友禅染の老舗である千總に勤務し下絵の制作に従事。56年没、享年79歳。(佐) **水彩画家、日本画家**

柴田 和 (しばた・かず/1934年～)

愛知県生れ。1950年群馬県立藤岡高校に入学、全日本学生油絵コンクール高校の部で、地作賞。54年武蔵野美術大学に入学、武蔵美文化祭で優秀賞受賞。55年中退、渡仏。影法師シリーズを制作。帰国後、環境美術を標榜して活動を始める。シバ・アート建築会社を設立。2016、17、18、19年銀座の中和ギャラリーでの個展。洋画家

柴田義董 (しばた・ぎとう/1780～1819年)

備前国生れ。廻船業を営み、豪商「奥屋」の次男。1794年後まもなく上洛、四条派の呉春の門に入り、若くして頭角を現した。淡い色調と繊細な筆致が特徴的で、その精妙さは四条派内でも抜群であった。文化年間(1804～1818年)には岡本豊彦・松村景文と並ぶ高弟となっており、洛中の人々も「花鳥は景文、山水は豊彦」と並べて「人物は義董」と表し、その筆致の精妙さをたたえたという。1819年没、40歳。江戸時代後期の四条派の絵師

芝田 耕 (しばた・こう/1918～2010年)

京都市生れ。1941年須田国太郎に師事する。45年独立美術協会京都研究所に入所。52年日本現代美術展で受賞。京展で受賞、54年独立展で独立賞。59年独立美術協会会員。68年京都精華大学教授。88年京都府文化功労賞。京都で没、91歳。洋画家、美教

柴田昌一 (しばた・しょういち/1935年～)

神奈川県生れ。1960年武蔵野美術学校卒。56年シェル賞展佳作。74年春陽会新人賞。75年版画展新人賞。82年日本国際美術展ブリヂストン美術館賞。91年現代日本美術展富山県立近代美術館賞。94年春陽会 岡鹿之助賞。個展・グループ展多数。春陽会会員・日本版画協会会員・日本美術家連盟会員。洋画家、版画家

柴田是真 (しばた・ぜしん/1807～1891年)

江戸生れ。父は宮彫師柴田市五郎。古満寛哉に蒔絵を、四条派の鈴木南嶺のち岡本豊彦に絵を学ぶ。漆芸家として著名であるが、和紙に彩漆(いろうるし)で描く漆絵に独特の作風を築き、明治漆工界に貢献した。1890年帝室技芸員となる。東京で没、84歳。江戸時代末から明治中期にかけて活動した漆工家、絵師・日本画家

柴田俊明 (しばた・としあき/1967年～)

名古屋生れ。1990年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒。97年東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻単位取得満期退学。89年に東京で初個展、以後現在まで18回の個展を開催。95年昭和会展招待作家。新制作協会に所属し、91年新制作展入選、2006年新作家賞。94年東京芸術大学大学院における修士論文で、「パーヴェル・フィローノフ絵画理論研究序説— 分析的芸術論と作品にみられる彼の世界観に関する一考察 —」を発表。02年個展及びフィローノフ研究の為にロシア・サンクトペテルブルクを訪問。国立ロシア美術館側の協力で、作品収蔵庫のフィローノフ作品を調査した。04年論文「パーヴェル・フィローノフの研究 — 絵画作品の分析 —」(美術教育研究、第9号)を発表。武蔵野美術学園講師、新制作協会協友。ロシア・アヴァンギャルドの画家パーヴェル・フィローノフの研究者。美術研究

柴田長俊 (しばた・ながとし/1949年～)

新潟県生れ。1974年和光大学芸術学科卒。76年多摩美術大学院修了。76年創画展創画会賞、創画会会友。77年春季創画展 春季創画賞。上野の森美術館絵画大賞展で83年佳作賞、84年優秀賞受賞。83年創画展 創画会賞。85年、86年春季創画展 春季展賞。88年創画展 創画賞。創画会員。90年紺綬褒章。現在、創画会会員。日本画家

柴田正重 (しばた・まさしげ/1887～1942年)

愛媛県生れ。早くより京阪地方にて工芸を修業したが、1914年上京、白井両山の門に入り、その没後は建畠大夢に師事。帝展第2回に「気の進まぬ日」、3回に「後悔」を発表、特選、以後無鑑査として連年出品、25年帝展委員。「パツシヨン」「建設」「輝く日」「赤陽のもとに」「業」「希望」「黙せる瞳」「無題」「若さ」「小春日」「双葉」「北満の義人」「放心」「協力」「試曲」の発表作がある。1942年没、56歳。彫刻家

柴田善登 (しばた・よしと/1910～1995年)

大坂生れ。1931年東京美術学校図画部師範科卒。磐城中学校で美術教師、若松光一郎、鈴木新夫などに影響を与えた。70年新制作協会会員。1995年没、85歳。洋画家、美術教育

芝田米三 (しばた・よねぞう/1926～2006年)

京都生れ。須田国太郎に師事。1950年独立賞。58年独立美術協会会員。63年安井賞。65年初渡欧。74年安井賞選考委員。94年日本芸術院賞、日本芸

術院会員。99年勲三等瑞宝章受章。金沢美術工芸大学教授。2006年没。79歳。(出典 わ眼) **洋画家**

柴原菖造 (しばはら・しょうぞう/1917～1945年)

1917年生れ。洋画家 京都市美術館が作品を所蔵
1945年没、28歳。 **洋画家**

柴 秀夫 (しば・ひでお/1907～1979年)

茨城県生れ。1932年版画の大衆化を目標に掲げて小野忠重らと「新版画集団」を結成、創立会員。37年小野忠重らと5人で「造型版画協会」を結成。パステルなどをつくる会社を経営して業務に追われ、55年以降創作活動から遠ざかった。1979年没、72歳。
版画家

斯波義辰 (しば・よしたつ/生誕年不詳～1970年)

東京生れ。1907年東京美術学校西洋画科卒。東京高輪中学校、福岡県嘉穂中学校で教鞭。1970年没。 **洋画家、美術教育**

柴宮忠徳 (しばみや・ただのり/1938～2007年)

長野県生れ。東京学芸大学美術科卒。1972年安井賞展に入選、(17回、22回にも入選)。73年の現代の幻想絵画展、76年の精鋭120人展に招待出品。80年から立軌会展に出品し、立軌会と個展を中心に活動した。67年から船橋市、82年から没年まで佐倉市で過ごした。2007年没、69歳。 **洋画家**

澁澤 卿 (しぶさわ・けい/1949～2012年)

群馬県生れ。1974年東京芸術大学美術学部卒。82年東京芸術大学非常勤講師。90年東亜大学教授。95年人気テレビ番組「美の世界」で「僧籍を持つ日本画家・澁澤卿」が放送。2001年身延山大学客員教授。繊細なタッチで日本の風景を描写した。2012年没、63歳。 **日本画家、美教**

澁澤龍彦 (しぶさわ・たつひこ/1928～1987年)

東京生れ。小説家、評論家、フランス文学者。1953年東京大学仏文科卒。59年サドの『悪徳の栄え』を翻訳出版し、61年猥褻(わいせつ)文書販売・所持罪となる。サドおよびフランス現代文学の翻訳、中世ヨーロッパの悪徳文学と東西文化のエロティック的異端の系譜などを追求し、評論、小説などに活躍した。62年小説『犬狼都市』『神聖受胎』、64年『夢の宇宙誌』、65年『新サド選集』『快樂主義—現代人の生き甲斐(がい)』を採求する』、67年に『エロティシズム』、71年『黄金時代』、72年『悪魔のいる文学史—神秘家と狂詩人』など、形而上(けいじじょう)学的なイメージを描いた。

『澁澤龍彦集成』、泉鏡花賞の『唐草物語』、『マルジナリア』、読売文学賞の『高丘親王航海記』。1987年没、59歳。(引用 コトバンク) **評論家、著**

渋谷栄太郎 (しぶや・えいたろう/1897～1988年)

宮城県生れ。東北中学校卒。1955年太平洋画会のち太平洋美術会会員。帝展6回入選、文展無鑑査。日仏芸術展を主催、美術団体「杜栄社」を主催。河北美術展に渋谷栄太郎賞が設けられた。仙台市で没、91歳。 **洋画家**

渋谷 修 (しぶや・おさむ/1900～1963)

石川県生まれ。木下秀一郎の父の病院で書生。1912年未来派美術協会展で未来派賞。13年三科インデペンデント展の開催に尽力。24年、「MAVO」の運動に関わる一方、木下が唱道して結成された「三科」の創立会員。首都美術展に出品。25年三科会員展、三科公募展に出品。「三科」解散後、峰岸義一らと主情派美術協会、さらに新興浪漫派などの運動に関わる。一九三〇年峰岸や玉村善之助らと巴里東京新興美術同盟展開催の母胎となった第三形而同盟を結成。1963年没、63歳。 **洋画家**

渋谷政雄 (しぶや・まさお/1900～1981年)

札幌市生れ。北海中学でどんぐり会に所属。北大農学部に進み、卒業後は樺太の製紙会社、小樽木材乾燥会社につとめながら制作を続けた。1932年独立展に入選、33年北海道独立美術作家協会の創立に参加。36年小樽ゆかりの作家と北方美術協会を結成。31年道展に出品し、39年会員。1981年没、81歳。 **洋画家**

島あふひ (しま・あひひ/1896～1988年)

徳島県生れ。徳島県立高等女学校卒。1924年川端画学校、26年前田写真実研究所。27年から二科展に出品。33年婦人美術協会設立参加。36年女性画家7名七彩会結成。37年一水会展出品、46年一水会会員。47年二紀展に出品。66～67年資生堂ギャラリー個展。81年徳島県郷土文化会館で回顧展。東京で没、91歳。 **洋画家**

島岡達三 (しまおか・たつぞう/1919～2007年)

東京生れ。東京工芸大学窯業学科卒。浜田庄司に学び、1953年栃木県益子に窯をひらき独立。組みひもをころがした器面の押しあとに化粧土をうめる縄文象眼技法を確立し、1996年人間国宝。2007年没、88歳。 **陶芸家**

島内きみ (しまうち・きみ/1916～2013年)

佐賀市生れ。1936年長崎県女子師範学校卒。佐

世保市小佐世保小学校就任～41年退職。38年新文展入選。40年国展入選、以後毎回出品、41年国画奨学賞、42年国画褒状、47年会友、48年会員。53～54年渡仏、留学。横浜市で没、97歳。 **洋画家**

島 霞谷 (しま・かこく/1827～1870年)

下野生れ。椿椿山に絵をならう。1856年蕃書調所が設立されると、そこで翻訳に従事。このころ外国人から写真術を修得し、江戸下谷で写真館を開業した。69年大学東校の書記官。そこで教科書を印刷するために独自の鉛鋳造活字を完成させた。この間、西洋画の模写や写真をもとにした油絵を多数のこす。妻の隆は日本最初の女性写真家となった。1870年没、44歳。1988年(昭和63年)に霞谷夫妻の子孫宅の土蔵から、霞谷の膨大な遺品約2000点がそっくりそのままの状態で見えられた。霞谷夫妻の全貌が明らかになっただけでなく、江戸幕末期の状況を多角的に考察できる第一級の史料を今日に提供することとなった(群馬県立歴史博物館寄託)。 **幕末・明治時代の画家、写真家**

島 一行 (しま・かずゆき/1931～1996年)

佐賀県生れ。1954年福岡教育大学美術科卒業後は中学校で81年まで美術教諭。60年独立美術協会展入選、81年同協会会友。65年福岡県美術協会会員、事務局長や理事、洋画部委員。70年筑紫美術協会結成、80年福岡美術家協会結成に参加、両会で事務局長。筑紫美術協会では90年理事長。1996年没、65歳。 **洋画家、美教**

島 州一 (しま・くにいち/1935～2018年)

東京生れ。1959年多摩美術大学絵画科卒。72年ジャパン・アート・フェスティバルで大賞。東京国際版画ビエンナーレ展など、国内外の版画展に多数出品、各賞。75年現代版画センター企画による関根伸夫との日本縦断展を全国30ヶ所で行う。80年には文化庁在外研修生欧米に1年間留学。2018年没、82歳。 **版画家**

島崎雲圃 (しまざき・うんぼ/1731～1805年)

近江の人。高田敬輔に画をまなぶ。のち下野にうつり、小泉斐、伸山操らをそだてた。没骨(もっこつ)法で人物画をえがき、刀剣の鑑定にもすぐれた。1805年没、75歳。 **江戸時代中期-後期の画家**

島崎藤助 (しまざき・おうすけ/1908～1992年)

東京生れ。島崎藤村の三男。川端画学校に学ぶ。1927年日本プロレタリア美術家同盟に参加。「新風土」

を創刊。44年報道班として中国へ。51年引き揚げ。新聞の挿絵や本の装丁を手掛ける。渡独。92年没、83歳。(出典 わ眼) **洋画家、装填、挿絵**

島崎鶏二 (しまざき・けいじ/1907～1944年)

長野県生れ。島崎藤村の二男。川端画学校で学ぶ。1929～31年渡仏。帰朝後清新な写真画風の作品を発表。二科展に特別出品。34年二科展で特待。37年二科会会員。文展無鑑査。44年没、37歳。 **洋画家**

島崎樹夫 (しまざき・たてお/1938～2001年)

岐阜県生れ。藤村の長男・楠雄の三男。1961年武蔵野美術学校西洋画科卒。銀座イエナ画廊で卒業記念展。桑沢デザイン研究所に学ぶ。本の装填、雑誌の挿絵を手掛ける。個展中心に発表。75年写真画壇展出品。外遊も多数。2001年没、63歳。 **洋画家、装填、挿絵**

島崎柳塙 (しまざき・りゅうう/1865～1937年)

江戸生れ。1879年洋画を桜井謙吉に学ぶ。日本画は松本楓湖、川端玉章に師事。91年日本青年絵画協会結成に参加。1900年无声会結成に参加。07年東京勸業博覧会二等賞。07～08年文展連続三等賞。文展で褒状3回。特に美人画を能くした。10年以降川端画学校教授。日本美術協会理事。東京で没、73歳。 **日本画家**

島田忠恵 (しまだ・ただえ/1932年～)

栃木市生れ。栃木高等学校卒。彫刻家、中野四郎に師事。53～64年創型会出品、会員。64年自由美術協会会員。第1回全国彫刻コンクール展で神奈川県美賞。72年自由美術展で自由美術賞。2000年千年の扉展招待。 **彫刻家**

島谷 晃 (しまたに・あきら/1943～2010年)

神奈川県生れ。1967年早稲田大学第一文学部美術専修卒、76～77年アムステルダム留学、ゴッホ美術館にて銅版画研修。88年文化庁芸術家在外研修員、日米芸術家交換計画芸術家としてNYで研修(1年間)。池田20世紀美術館で個展。2010年没、67歳。 **洋画家、版画**

島田墨仙 (しまだ・ぼくせん/1867～1943年)

福井県生れ。1896年上京、橋本雅邦に入門。日本絵画協会第一回絵画共進会第三部で三等褒状。福島県第二尋常中学に助教諭心得兼書紀心得として赴任、図画・習字を担当する。1907年国画玉成会創立総会で評議員。19年山内多門、飛田周山、石井林響、勝田蕉琴、町田曲江、野田九浦、池田輝方、水上泰生、服部春陽ら10名と如水会を結成。帝国美術院委

員。日本画家としては初の帝国美術院賞。1943年没、77歳。日本画家

島津純一（しまづ・じゅんいち/1907～1989年）

長崎市生れ。1930年「一九三〇年協会」展に出品。31～34年独立展に出品。35～38年新造形美術協会展に出品。48～56年美術文化協会展に出品。36年新象作家協会を創立。日本のシュルレアリスムの画家。1989年没、82歳。洋画家

嶋津俊則（しまづ・としのり/1941年～）

大阪生れ。1967年関西美術研究所に学び、鈴木博尊に師事。67年二元会展に出品、のち会員。二元展でパリ賞、20回記念展大賞、文部大臣奨励賞、内閣総理大臣賞。個展毎年開催。度々渡欧。ナショナルボザール入選、ル・サロンで銀賞。洋画家

島 成園（しま・せいえん/1892～1970年）

大阪生れ。北野恒富の白耀社に一時期属したものの、ほぼ独学で絵を学び、21歳の時に第6回文展に入選。1927年帝展に「雛子」を出品後は、銀行員の夫と共に、上海、北海道、大連、横浜、松本などを転住し、画壇から遠ざかります。戦後は大阪に戻り、51年の大阪大丸での個展、個展で発表。東京の池田蕉園、京都の上村松園と並び、大阪を代表して”三都三園”と称された女流画家。1970年没、78歳。日本画家

島田鮎子（しまだ・あゆこ/1934年～）

東京生れ。1962年東京藝術大学美術学部専攻科油画修了。62年国展に入選。63年同会新人賞。66年国画家会会員。88年東京セントラルアネックスで個展。94年愛知県芸術文化選奨文化賞受賞。97年安田火災東郷青児美術館大賞。受賞記念展開催。2006年求龍堂から島田鮎子画文集刊行。09年メナード美術館で個展。洋画家

島田紘一呂（しまだ・こういちろ/1944年～）

東京生れ。1970年多摩美術大学大学院彫刻科修了。1967年二科展特選1969年二科展会友。1971年二科展会友賞。1975年二科展会員。1989年二科展ローマ賞。1991年二科展会員賞。2010年二科展第95回記念大賞。2012年二科展文部科学大臣賞。1974年ユーゴスラビア国際彫刻シンポジウム彫刻部門招待。1975年二科展会員。2003年島田紘一呂木彫展（七戸町立鷹山宇一記念美術館）。2014年練馬区立美術館・美術の森緑地作品設置。二科会理事 練馬区美術家協会会長。彫刻家

島田三郎（しまだ・さぶろう/1943年～）

東京生れ。師は高橋治男。墨東洋画研究所及び、パリ・グランシヨミエール、エコール・ド・ギャルソンに学ぶ。蒼樹会創立会員。1971年渡仏、以降パリ在住。サロン・デ・ザールフランセーズ銅賞。サロン・アール・フォルムクルール銀賞。ドーヴィユ絵画国際大賞グランプリ。洋画家

嶋田しづ（しまだ・しづ/1923年～）

樺太生れ。1942年女子美術専門学校師範科西洋画部卒。45年早稲田大学文学部美術史家東洋美術史専攻修了。57年二紀展で最優秀賞を受賞。58～78年パリ在住。2007年池田20世紀美術館にて個展を開催する。（出典 わ眼）洋画家、版画

島田章三（しまだ・しょうぞう/1933～2016年）

横須賀市生れ。1957年国画家会出品、国画家賞。61年同会会員。60年東京藝術大学油画専攻科卒。66年愛知県立芸術大学常講師、74年教授、2001年学長。67年安井賞。68年渡欧。80年安田火災東郷青児美術館大賞。99年芸術院賞。同年芸術院会員。04年文化功労者。10年横須賀美術館館長。11年愛知県美術館で個展。16年没、83歳。洋画家、美教

島田四郎（しまだ・しろう/1905～1986年）

富山県生れ。1942年新文展に入選。文展特選1回、日展特選2回。日展運営委員、晩年に黒田清輝賞。1962年神奈川県美術家協会会員、65年「港に働く作家グループ」（現在・港の作家美術協会）の創立に賛助。新世紀美術協会委員、審査員。横浜で没、79歳。洋画家

島田卓二（しまだ・たくじ/1885～1946年）

豊川市生れ。1904年愛知県立第四中学校卒。06年上京、黒田清輝の書生。偶然同郷の高須光治と出会う。12年文展に入選、院展、国展に入選。豊橋で個展。26年豊橋洋画協会を結成、24名。35年鳳来寺女子高等学園で教える。46年没、60歳。洋画家、美教

嶋谷自然（しまたに・しねん/1904～1995年）

三重県生れ。1922年上京し、矢沢弦月に師事、書生として矢沢家に暮らす。29年帝展に入選。31年京都の西山翠嶂が主宰する画塾青甲社に入塾し、名古屋市に移住。50年日展で特選・白寿賞を受賞し、日本画研究グループの一采社に入る。55年日展の審査員、58年日展会員、68年日展評議員。70年名古屋

屋芸術大学教授。77年愛知県表彰(文化部門)、79年日展にて文部大臣賞、80年日展参与に推挙され、勲四等瑞宝章。1995年没、91歳。日本画家、美教

嶋根幸延 (しまね・ゆきのぶ/1958年～)

東京生れ。阿佐ヶ谷美術専門学校に学び、卒業後スペインに渡り、マドリッド、マラガ、セビリアにて作家活動。新古典主義の画家、ドミニク・アングルやウィリアム・アドルフ・ブグローに影響を受け、スペインに約30年在住し、2005年帰国。泰明画廊、阪急うめだにて個展開催。洋画家

島野重之 (しまの・しげゆき/1902～1966年)

滋賀県生れ。1927年東京美術学校西洋画科卒、29年同校研究科を修了。27年帝展入選、以降、帝展、光風会展に出品。28年光風会賞、31年会員、37年文展で特選、昭和洋画奨励賞、39年文展無鑑査、戦後、依頼者、53年審査員、58年評議員。62年日本美術家連盟理事。東京で没、64歳。洋画家

島村樹佳 (しまむら・きよし/1923～1996年)

埼玉県生れ。近代美術協会副代表。1996年没、72歳。洋画家

島村三七雄 (しまむら・みなお/1904～1978年)

大阪生れ。1929年東京美術学校西洋画科卒。29～36年渡仏、フレスコ画法を研究、サロン・ドートンヌ等に出品。40年独立展で協会賞。46年独立美術協会会員。56年新樹会会員。67年日本芸術院賞。69～71年東京芸術大学教授。(壁画フレスコ画法の指導)。74年日動画廊で回顧展。東京で没、74歳。洋画家、美教

島村洋二郎 (しまむら・ようじろう/1916～1953年)

東京生れ。里見勝蔵に師事。1949年自由美術展入選。アンデパンダン展出品。53年クレパスで制作、新宿の喫茶で個展。東京で没、37歳。2016年詩画集「無限に悲しく、無限に美しく」出版。洋画家、パステル

嶋本昭三 (しまもと・しょうぞう/1928～2013年)

大阪生れ。1950年関西学院大学文学部卒。47年吉原治良に師事。吉原門下生のリーダー。54年海外発信の雑誌名に嶋本提案の「具体」が採用。具体美術協会が発足。キャンバスに穴を開けた作品。トタンに穴を開けた作品。絵の具を詰めた瓶を投げつけ描く。69年関西女子学園短期大学講師、74年教授。70年大阪万博でお祭り広場のアートプロデュース。メール・アートを本格化、国際的ネットワーク構築。頭を刈り上げたヘッド・アート発表。91年宝塚造形芸術大学教授。「タイム・ラック」を発表。京都教育大学名誉教授。94年日本障害者芸術協会会長。98年アメリカ

MOCA「戦後の世界展」に世界の四大アーティストの一人に選抜。具体の名を世界に知らしめる役割。西宮市で没、85歳。洋画家、美教、具体

嶋谷自然 (しまや・しぜん/1904～1993年)

三重県生れ。1922年東京で矢沢弦月の門に入り、30年帝展に入選。41年西山翠嶂に師事、翠嶂が主宰する画塾青甲社同人となる。50年日展で特選、白寿賞、51年無鑑査出品で連続特選、朝倉賞。55年審査員、58年日展会員。79年日展で文部大臣賞。日展参与。70年名古屋芸術大学教授。73年中日文化賞。名古屋で没、89歳。日本画家

島 隆 (しま・りゅう/1823～1899年)

上野国生れ。18歳の頃、江戸に上った。島霞谷と結婚。霞谷から写真術を学び、女流写真師として営業した。1870年霞谷と死別したあとは桐生で開業。1899年没、76歳。1988年子孫宅の土蔵から、隆が持ち帰った霞谷の膨大な遺品の数々がそっくりそのままの状態で見えられた。霞谷夫妻の全貌が明らかになっただけでなく、江戸幕末期の状況を多角的に考察できる第一級の史料を今日に提供することとなった。幕末・明治時代の写真家。日本最初の女流写真家

清水 敦 (しみず・あつし/1937年～)

東京生れ。1963年渡道、独学で銅版画を始める。64年全道展・激励賞(65年知事賞)。シュル美術賞展・佳作賞。76年渡独、ハンブルク美術館版画室でビュランを学ぶ。78年詩画集『ちいさなものたち』刊行。80年詩画集『野の花1』刊行。書集『日本の玩具』刊行('83年1集、'94年2集、'96年3集)。85年詩画集『野の花2』刊行。87年版画集『北の詩』刊行。1989年銅版画集『ふるさとの詩』刊行。91年『清水敦全銅版画』刊行。北の現代具象展に参加。97年玉英画廊(川崎)で個展。版画家

清水敦次郎 (しみず・あつじろう/1894～1962年)

新潟県生れ。1915年太平洋画会研究所に学ぶ。18年文展に入選。帝展に出品。35～47年太平洋画会会員。47年日展で特選。のち日展委嘱。47年示現会創立会員。44年東洋高等女学校で教鞭。50年白土会をつくり同人。62年没、67歳。洋画家、美教

清水悦男 (しみず・えつお/1953年～)

長野県生れ。1979年多摩美術大学油画科卒、81年同大学大学院修了。83年飯田画廊にて個展(同'84.'85.'87.'89.'91.'93)。86年日本橋三越にて個展。96年名古屋日動画廊にて個展、98年福岡、名古屋日動画廊で個展。99年日本橋三越にて個展。2001年池袋西武にて個展。洋画家

清水 清 (しみず・きよし/1900～1968年)

栃木県生れ。小樽高等商業学校卒。兄は清水登之。

1900年渡米。NYのアート・ステューデントズ・リーグに学ぶ。27年以降邦人美術展や、独立美術協会展に出品。NYで没、69歳。洋画家

志水堅二（しみず・けんじ/1971年～）

名古屋生まれ。1995年多摩美術大学卒、のち助手。94年独立展出品。98年前田寛治大賞展。2000年昭和会展。12年京都A&Aで個展、神戸アートマルシェ出品。13年アートフェア東京で個展。15年Young Art Taipei2015出品、他、百貨店や画廊で個展・グループ展など精力的に活動。洋画家

志水楠男（しみず・くすお/1926～1979年）

東京生まれ。1944年自由学園高等科中退、翌年応召。48年数寄屋橋画廊につとめ、50年山本孝と共同で東京画廊を設立、翌年日本橋に南画廊を創設する。その後海外の前衛美術を積極的に紹介し、サム・フランシス、ジャスパー・ジョーンズ、アンドレ・デュシャンなどの作品を輸入する一方、山口長男、オノサト・トシノブ、堂本尚郎、飯田善国らの業績を紹介した。日本洋画商協同組合理事、同組合から分離し東京相互会理事。東京で没、52歳。美術商

清水孝一（しみず・こういち/1895～1936年）

東京生まれ。版画は永瀬義郎に学び、1927年日本創作版画協会展入選。28年入選。会員に推挙。日本版画社から出された『日本現代創作版画大集』（1927～1928）の摺りも担当。春陽会展には、27年、28年、29年入選。28年帝展入選、29、30、31、32年連続入選。31年日本版画協会結成会員参加、31、32、33、35年出品。34年「日本現代版画とその源流展」（パリ）、36年「現代版画展（サンフランシスコなど欧米9都市巡回）出品。1936年没、41歳。版画家

清水光夢（しみず・こうむ/1902～1994年）

島根県生まれ。蒼騎会会員。ル・サロン永久会員。島根県で没、92歳。洋画家

清水 崑（しみず・こん/1911～1974年）

長崎県生まれ。長崎商業在学中から漫画に情熱。1930年上京、街頭で似顔絵かきをやるうち岡本一平に認められ弟子入、漫画家への道を踏み出した。戦後、横山隆一、近藤日出造らと漫画集団をつくり、新聞、雑誌に政治漫画を連載、一躍人気作家。漫画では「かっぱ天国」「かっぱ川太郎」などの「かっぱもの」の代表作。似顔絵に技を發揮。東京で没、61歳。漫画家

清水茂郎（しみず・しげお/1900～1973年）

三重県生まれ。1943年新文展に入選。新世紀美術協会委員。大阪芸術大学教授。1973年没。洋画家

清水七太郎（しみず・しちたろう/1889～1967年）

盛岡生まれ。1912年東京美術学校西洋画科入学。県出身の東京美術学校生らが中心に組織した岩手の洋画団体「北虹会」の中心人物。15年盛岡在住の洋画家たちによる美術団体「七光社設立。「七光社」には五味清吉、橋本八百二らも参加。岩手の洋画界の発展に大きく貢献した。東京美術学校の先輩にあたる萬鐵五郎と親交。萬は自分の主宰した円鳥会や会員である春陽会に出品を勧め、清水の制作に助言。文化服装学院や目白中学の教師を務める傍ら画業を続け、東京や盛岡で個展を開いたが、64年長女の住むブラジル・サンパウロに移住、1967年サンパウロで没、82歳。洋画家

清水昭八（しみず・しょうはち/1933～1996年）

和歌山県生まれ。1956年武蔵野美術学校本科西洋画科卒。モダンアート協会会員。武蔵野美術大学教授。立川市で没。62歳。洋画家

清水新也（しみず・しんや/1968年～）

徳島県生まれ。1988年サロン・ド・パリ会員。91年名古屋芸術大学卒、渡仏。92年パリ国立ジャガール美術館協会会員。96年仏サロン・ド・プランタン正会員。2000年ベルギー国際現代芸術アカデミーグランプリ銅賞。03年カンヌ国際栄誉グランプリ金賞受賞/国際芸術グランプリフランス銅賞。04年フランス国際芸術サロン展特別賞。05年スペイン・バルセロナ国際サロン展特別賞/仏絵画彫刻国際展プロヴァンス賞。06年サロン・ド・プランタン特別賞。全国主要百貨店にて個展開催。洋画家

清水誠一（しみず・せいいち/1946年～2010年）

山梨県生まれ。高校卒業後、新潟大学医学部に進学、中退。1976年頃にコンクリート・ブロックなどの既製の工業製品に、クーピー・ペンシルでなぐり書きをしたようなドローイングを施した作品《Mark Painting》のシリーズで一躍脚光。78年のパリ・ビエンナーレに招待され、出品するなど前衛画家として高い評価。作風を一変し、クランク形をテーマにした抽象絵画《クランク・ペインティング》のシリーズ。クランク形という自ら課した制約の中で、破壊と生成を繰り返しながら、絵画の可能性を探求。2010年没、64歳。美術家、造形作家

清水対岳坊 (しみず・たいがくぼう/1883～1970年)

長野県生れ。1902年川端画学校などで藤島武二に師事。09年萬朝社に入社、政治漫画記者。のち講談社「キング」「少年倶楽部」「講談倶楽部」の挿絵画家として活躍。東京で没、86歳。洋画家、漫画家

清水多嘉示 (しみず・たかし/1897～1981年)

長野県生れ。1919年二科展に入選。23～28年滞欧、グランド・ショミエールで彫刻家ブールデルに師事。サロン・ドートンヌに絵画、彫刻を出品。23～28年入選、サロン・デ・チューレリー、サロン・デ・ザンデパンダンの各会員。43年新文展審査員。53年日展で芸術選奨文部大臣賞のち日展顧問。54年日展出品、日本芸術院賞。65年日本芸術院会員。69年勲三等瑞宝章。71年紺綬褒章。81年文化功労者。日彫会名誉副会長などを歴任、武蔵野美術大学名誉教授。東京で没、83歳。彫刻家、美教

清水登之 (しみず・とし/1887～1945年)

栃木県生れ。成城学校卒。1907～19年渡米。12年フォッコ・タダマ画塾で学び。13年NYで National Academy of Design、アート・ステューデントズ・リーグに学ぶ。24～27年滞欧。29年二科展で樗牛賞。30年二科賞。30年独立美術協会創立会員。労働者、農民、都市風景をプリミティブで堅牢な写実で描いた。栃木県で没、58歳。洋画家

清水敏男 (しみず・としお/1953年～)

東京生れ。1977年 東京都立大学人文学部文学科卒業。83年ルーヴル美術館大学修士課程修了。学習院女子大学教授、美術評論家連盟常任委員(2012～2015年)、財団法人徳間記念アニメーション文化財団評議員、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会委員、日仏美術学会会員、美術史学会会員、国際博物館評議会会員、エンジン01文化戦略会議会員。東京都庭園美術館キュレーター、水戸芸術館現代美術センター芸術監督を経て、2002年 TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE を設立。近年は展覧会やアートイベントの開催、パブリックアートのプロデュースを中心に活動している。美術評論家

清水刀根 (しみず・とね/1905～1984年)

前橋市生れ。1924年日本美術学校洋画科卒。26年二科展入選。31年二科賞。32年二科会会友。30～35年太平洋画会会員。35年前橋に絵画研究所を開く。43年二科会会員。71年二科展で会員努力賞。79年二科会理事。50～70年群馬大学教授。前橋市で没、79歳。洋画家、美教

清水比庵 (しみず・ひあん/1883～1975年)

1883年生れ。司法官、栃木県日光町長をつとめる。昭和17年川合玉堂、清水三溪らと野水会を結成し、37年奥村土牛、小倉遊亀(ゆき)らと有山会を創立。歌誌「窓日」を主宰した。昭和50年10月24日死去。92歳。岡山県出身。京都帝大卒。本名は秀。著作に「野水帖」「紅をもて」。日本画家

清水正教 (しみず・まさのり/1940年～)

長野県生れ。1967年東京藝術大学美術学部絵画科卒、69年同大学研究科修了。83～2010年新芸術展(東京都美術館)新人賞、金賞。90年カナダ美術展でドートンヌ賞、買い上げ。92年サロン・ドートンヌ(パリ、グランパレ)会員、無鑑査。93、94年ベルギー国際大賞展で金メダル。95年国際美術大賞展で評論家賞。洋画家

清水正博 (しみず・まさひろ/1914～2011年)

東京生れ。1932年に小野忠重の「新版画集団」に参加。2～6回展に出品。集団主催「第1回アンデパンダン展」(34.6)や「江戸東京風景版画展」(34.7)、「エノケンとその一座を廻る版画展」(34.9)テーマ展、集団小品展(34.4、35.5)に出品。集団発行の機関誌「新版画」の第7号(1933.1)から第18号(1935.12・最終号)まで自作の木版画を掲載。そのうち第10号と第16号の表紙を担当し、木版画で飾った。「新版画集団」解散(36.12)後、37年小野忠重や柴秀夫ら5人で「造型版画協会」を結成し、54年まで出品。35、36年日本版画協会展に出品。36年開催の国画会出品。43年「日本版画奉公会」の会員。戦後は旺玄会版画部の委員。2011年没、97歳。版画家

清水 勝 (しみず・まさる/1919年～)

大阪生れ。中野島洋画研究所で学ぶ。戦後、二科会の藤井二郎、伊藤継郎に師事。上京、第一美術展、安井賞展、自由美術展に出品。檜画廊、汲美、みゆき画廊で個展。動物画、抽象画を描く。洋画家

清水 勝 (しみず・まさる/1942年～)

島根県生れ。1959年関西美術院研修(京都)、65年日本美術学校卒。66年独立展出品、72年会友。83年日本風景美展金賞。93年龍苑会展龍苑賞。96年雪舟ますだ展優秀賞。97年個展(ギャラリー大井)。現在、無所属。個展多数(東京大丸・小田急等)。洋画家

清水三重三 (しみず・みえぞう/1893～1962年)

三重県生れ。1919年東京美術学校彫刻科選科卒。挿絵を描き、19年自ら装幀・挿絵(木版画)・編集「朝寝髪」を春陽堂から出版。27年「朝寝髪」(木版の彫・大倉九節、摺・田口陽康)春陽堂から出版。木彫で27～32年「構造社」に参加。美校同窓の木彫の会「木芽会」、「第三部会」に出品。大正末に木版墨版に手彩色の「芝居スケッチ肉筆着色版画の会」を自ら代々木初台の自宅に興し、26年「鏡獅子」(五代目中村福助の女小姓弥生)(二回配布)、「吉右衛門・梅の由兵衛」(三回配布)刊行。28年「主情派美術会」に参加し、「主情派現代風俗版画集」木版画「長襦袢芸者雨を聴くの図」制作。40年の「寿門松お菊」(大判錦絵・限定300部)。58年自著画「小唄絵本鬢のほつれ」刊行。東京で没、69歳。彫刻家、挿絵、版画

清水良雄 (しみず・よしお/1891～1954年)

東京生れ。1912年光風会展に入選。13年文展に初入選。16年東京美術学校西洋画科卒。17～18年文展特選。18年創刊の「赤い鳥」に挿絵を描く。19、22年帝展特選。27年光風会会員。50年広島大学講師。広島県で没、62歳。(出典 わ眼)洋画家、挿絵

清水練徳 (しみず・れとく/1904～1995年)

石川県生れ。1926年上京。本郷絵画研究所に学ぶ。岡田三郎助、満谷国四郎に師事、28年修了。29年「一九三〇年協会」展に出品。30年二科展に入選。32年独立展に入選。37年渡欧。46年独立賞。日本のフォーヴィスム。50年独立美術協会会員。東洋美術学校教授。東京で没、90歳。洋画家

紫牟田和俊 (しむた・かずとし/1957年～)

福岡県生れ。1982年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒、84年同大学大学院壁画第2研究室修了。88年DAAD給費により独留学、ハンブルグ大学に通う。91年同大学院博士後期課程満期修了。かねこ・あーとGI、秋山画廊、T&SHOMEギャラリー等で個展。グループ展多数参加。洋画家

志村一男 (しむら・かずお/1908～1981年)

長野県生れ。1927年帝国美術学校中退。27年「一九三〇協会」展に入選。31年より春陽会展、独立展に出品入選。春陽会研究所に学ぶ。34年以降は春陽会に出品。53年春陽会会員。58年渡欧、パリのグランド・ショミエールに学ぶ。72年写真画壇会員。東京で没、73歳。洋画家

志村計介 (しむら・けいすけ/1903～1992年)

横浜市生れ。1925年旧制第二高等学校理科卒。2

7～31年川端画学校、太平洋画会研究所に学び、のち高島達四郎に師事。38年独立賞。48年独立美術協会会員。60～61年渡仏。76年日伯美術連盟理事。77年同連盟を代表し渡伯、リオデジャネイロでの日伯合同展開催に従事。国際形象展に招待出品。横浜美術協会顧問。横浜市で没、89歳。洋画家

志村立美 (しむら・たつみ/1907～1980年)

群馬県生れ。神奈川県立工業図案科修業後、美人画家山川秀峰に師事。大正時代末期から講談社などの雑誌の挿絵で活躍、ながいまつ毛、うるんだ瞳の麗人像などに特色を示し戦前の一時期流行児として人気。箇木清方門の伊東深水、山川秀峰などの塾展である青衿会や、戦後の美人画団体日月社展等に美人画を出品していた。出版美術家連盟会長、元日本作家クラブ副理事長。東京で没、73歳。浮世絵師、挿絵作家

下岡連杖 (しもおか・れんじょう/1823～1914年)

伊豆下田市生れ。1835年上京するが帰郷。44年狩野薫川に師事。下田でアメリカ総領事ハリスの通訳のヘンリー・ヒュースケンに写真術の基礎を学ぶ。62年横浜に写真館を開業。石版術はアメリカ人リチャード・ブリジェンスから石版画を学んだ。連杖自ら石版画「徳川家康像」を制作。石版印刷業、牛乳搾取業、乗合馬車営業の開祖と言われた。横浜のユダヤ人商人レイフル・ショイヤーの元で働く、ショイヤーの妻は西洋画法を学び、連杖はアンナ夫人に日本画法を教えた。夫人から洋風画を学び描いた。1876年東京浅草に移転するが写真館は廃業。浅草で没、91歳。写真家、版画

下川都一朗 (しもかわ・といちろう/1914～1989年)

福岡県生れ。1933年日本大学文学部西洋哲学科中退。坂本繁二郎に師事。42年独立展、二科展で入選。50年独立賞。60年独立美術協会会員。64～65年渡仏、アンデパンダン展に出品。76年再渡欧。現代日本美術展、選抜秀作美術展に出品。久留米市で没、75歳。洋画家

下郷羊雄 (しもざと・よしお/1907～1981年)

愛知県生れ。1929年津田清楓洋画塾に学ぶ。抽象絵画から超現実主義へ転向。35年銀座紀伊国屋で初個展開催。35年新造形美術協会会員。37年「ナゴヤアヴァンギャルドクラブ」を岡田徹らと結成。シュルレアリスト。「不条理芸術」を発表。39年「ナゴヤ・フォト・アバンギャルド」結成。48～56年美術文化協会会員。名古屋で没、74歳。洋画家、写真

下沢木鉢郎 (しもさわ・きはちろう/1901～1986年)

青森県生れ。1916年上京、中央美術社に入社。石井柏亭に水彩画、平塚運一に木版画を学ぶ。21年日本水彩展入選。28年日本創作版画協会会員。28年国展に出品。31、33年国画奨励賞。40年国展で褒状。43年国画会会員。31～52年日本版画協会結成、創立会員。52年「日本版画院」を棟方志功、棟方末華らと創設。風景画を得意とした。1986年没、85歳。 **版画家、水彩画家**

下田 治 (しもだ・おさむ/1924～2000年)

満州生れ。1947年立教大学卒、パリのグランド・シヨミエール芸術学校に学んだ。渡米後、ホノルル、ロスアンジェルス、ニューヨークで個展を開く一方、70年アルブライト・ノックス・メンバーズ・ギャラリーでのグループ展、72年ロックフェラーセンターでの「彫刻家境界グループ展」参加。国内でも、札幌芸術の森野外美術館に「ダイナモ」(90年)、慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスに「The wing of Minerva」(96年)が設置された。96年東京の現代彫刻センター、高崎市美術館で個展。97年中原悌二郎賞。米、NYで没、75歳。 **彫刻家**

下高原健二 (しもたかはら・けんじ/1914～1992年)

鹿児島県生れ。大阪信濃橋洋画研究所で絵画を学ぶ。大英大阪支店で宣伝広報を担当。挿絵画家としてデビュー。代表作に「坂の上の雲」、渡辺淳一の「愛の如く」「まひる野」など連載小説の挿絵でも活躍。千葉県で没、77歳。 **洋画家、挿絵作家**

下高原龍巳 (しもたかはら・たつみ/1910～1994年)

鹿児島県生まれ。1935～43年二科展に出品。46年行動美術展で友山荘賞受賞。47年行動美術協会会員。創造美術協会創立委員。薫英女子短期大学教授。キリスト教女子短期大学教授。94年没、83歳。(出典 わ眼) **洋画家、美教**

下田正次 (しもだ・しょうじ/1935年～)

東京生れ。1958年一水会展入選、田崎広助門下生。61年川崎市文化芸術展文化協会賞、教育委員会賞。63年一水会賞。64年会員推挙、日展初入選(4回連続入選)。67年神奈川県 T 賞。75年春日山鳳勝寺障壁画制作。82年春日山鳳勝寺開山堂天井画制作。83年東京国際美術展秀作賞。90年嗣法山伝心寺本堂、客殿障壁画制作。 **洋画家、壁画**

下田範次 (しもだ・のりつぐ/1895～1982年)

東京生れ。光風会所属。創造美術会創立代表委員。1977年高齢理由により同会委員長辞退。1982年没、87歳。 **洋画家**

下田義寛 (しもだ・よしひろ/1940年～)

富山県生れ。1963年東京芸術大学卒。65年同大学院修了。日本路美術院員院友。67年安田靱彦の助手として法隆寺壁画再現模写に従事。67年院展で奨励賞・白寿賞。78年日本美術院同人。79年院展で文部大臣賞受賞。81年日本美術院評議員。83年院展で総理大臣賞受賞。95年倉敷芸術大学芸術学部教授。2000年日本美術院監事。現在、日本美術院同人・理事、倉敷芸術科学大学芸術学部教授。 **日本画家、美教**

霜鳥之彦 (しもとり・ゆきひこ/1884～1982年)

東京生れ。浅井忠に師事。1905年京都高等工芸学校図案科卒。06～20年洋画研究のため牧野克次と渡米、New York School of Fine and Applied Artsで油彩画と図案を学ぶ、09年アメリカ自然史博物館に就職。21～44年京都高等工芸学校教授。22～23年文部省留学、渡仏、パリのグラン・シヨミエールへ通い、同12年からシャルル・ゲランに師事する。52～58年京都学芸大学教授。70年関西美術院理事長。京都で没、98歳。 **洋画家、美教、水彩**

下村為山 (しもむら・いざん/1865～1949年)

松山市生れ。1882年上京、本多錦吉郎の洋画塾「彰技堂」に学ぶ。87年より小山正太郎の画塾「不同舎」に学ぶ。89年明治美術会展に出品。90年内国勸業博覧会で二等妙技賞。97年俳誌「ほととぎす」松山の題字、挿絵を描く。98年正岡子規に出会い東京「ホトトギス」口絵の依頼を受ける。俳画(近代南画)・俳味画の大家の名声。富山県で没、84、85歳。 **洋画家、水墨、俳画、挿絵**

下村観山 (しもむら・かんざん/1873～1930年)

和歌山県生れ。名は晴三郎。東美校卒。狩野芳崖・橋本雅邦に学ぶ。日本美術院創立に参加し、横山大観・菱田春草と共に活躍、またその再興にも尽力する。東美校教授・帝室技芸員。1930年没、58歳。 **日本画家、美教**

下村良之介 (しもむら・りょうのすけ/1923～1998年)

大阪生れ。1943年京都市立絵画専門学校卒。49年パリアル美術協会会員。指導的役割を果たす。日

本画、銅版画、彫刻、舞台美術。61年丸善石油芸術奨励賞(留学賞)で渡欧。日本国際美術展、現代日本美術展に出品。95年京都美術文化賞。98年没、75歳。(出典 わ眼) **日本画家、版画、彫刻**

下山 肇 (しもやま・はじめ/1945～2005年)

東京生れ1970年京都大学文学部美学美術史学科卒。兵庫県立近代美術館学芸員、76年京都大学大学院修士課程美学美術史学科を修了、79年同博士課程を修了。同年京都市美術館学芸員となり、84年静岡県教育委員会美術博物館設立準備室に勤務して、コレクション形成や94年設立のロダン館の設置などに尽力した。静岡県立美術館開館後は、86～88度静岡県立美術館学芸課長をつとめ、89年同課長と部長を兼務、96年同部長となった。この間、「エルミタージュ美術館名作展—ヨーロッパの風俗画」(91年)、「ロダンと日本」(2001年)などを企画。2001年4月に尾道大学芸術文化学部教授。05年静岡県立美術館館長に就任。現職のまま死去した吉岡健二郎前館長の後任として赴任したばかりであった。ノルウェーの画家エドワルド・ムンク、京都で活躍した日本の洋画家須田国太郎についての論考がある。著書に『ムンク』(日経ポケットギャラリー、1993年)、『巨匠たちの自画像』(マヌエル・ガッサー著、桑原住雄と共訳、新潮選書、1977年)がある。静岡市で没、59歳。 **元静岡県立美術館館長、美教**

荘司貴和子 (しょうじ・きわこ/1939～1979年)

神戸市生れ。1963年東京藝術大学日本画科卒、高校で教えながら制作活動。1964年新制作協会日本画部に出品、73、74年春季展賞。74～78年年創画展に出品、75～78年春季展賞。1979年没、39歳。2013年梅野記念絵画館で個展。2019年平塚市美術館で荘司福、貴和子展開催。 **日本画家**

周 襄吉 (しゅう・じょうきち/1907～1978年)

愛媛県生れ。1924年今治中学校卒、上京。川端画学校に学ぶ。27年二科展に入選。30年東京美術学校西洋画科卒。31～38年松竹映画会社で美術監督。自由美術展に出品。50年モダンアート協会創立に参加、会員。58～73年文化学院美術科講師。川崎市で没、71、72歳。 **洋画家**

重 達夫 (じゅう・たつお?/1910～1990年)

京都市生れ。1936年東京大学法学部卒。通信省入省。50年京都府商工部長、55～67年京都市美術館館長。58年京都市美術館長中、国際展「ゴッホ展」を開催、61年京都・パリ交換陶芸展渡仏、京都国立近代美術館評議員。80年福井県立美術館長。52年京都市美術展入選、55年行動美術協会展出品、74年同会友。61年日仏美術交流功績フランス政府よりフランス文化勲章。福井県で没、80歳。 **美術館**

周 文 (しゅうぶん/生没年不詳)

画僧。相国寺の僧で、如拙に画を学ぶ。室町幕府の御用絵師であり、雪舟等楊の師とされる。山水画、花鳥画、仏画を手がけ、詩画軸の形式や日本風の水墨画の洋式を確立。 **室町時代の画僧**

春好齋北洲 (しゅんこうさい・ほくしゅう/生没年不詳)

松好齋半兵衛の門人。大判約300点という上方で最大量の役者絵を残した絵師。流光齋、松好齋の様式を受け継ぎ、役者の映える姿を強調する江戸趣味を加味し、上方役者絵を完成に導いた。1809～32年作品が知られている。文政期(18～30年)前半が最盛期、大首絵(半身図)に名品が多い。文政1年、上方に旅した北洲に師事し、そのころから江戸風が顕著になる。北頂、北英をはじめ門人は多く、芦国系と上方浮世絵界を二分する勢力を形成した。 **江戸後期の大阪の代表的浮世絵師**

城 景都 (じょう・けいと/1946年～)

愛知県生れ。1970年シェル美術賞展佳作賞。近藤正治らと芸術グループ・南蛮美術を結成。74、76、77、79、81年個展(青木画廊、東京)。画集「女の学問」(青木画廊)刊行。カラーエッチング集「追憶の女」(青木画廊)刊行。82年人人会会員。日仏現代美術展入賞。84年詩画集「イビザの噂」(詩・新郷久、鈴木春子、柴舟画廊)刊行。「城景都 花の形而上学」(美術出版社)刊行。88年「城景都全版画集」(阿部出版)刊行。90年版画集「思・想・荘・宗」(JK版画工房)刊行。 **洋画家、水彩画、版画**

昇齋一景 (しょうさい・いつけい/生没年不詳)

江戸生れ。一時、京都でまなぶ。明治時代初期の風俗、風景をおおくえがき、明治4年「東都名所四十八景」、5年「東京名所三十六戯撰」を刊行した。別号に景昇齋。 **江戸後期-明治時代の浮世絵師**

庄司栄吉 (しょうじ・えいきち/1917～2015年)

大阪生れ。1938年大阪外国語学校フランス語部卒、38年東京美術学校油画科繰り上げ卒。寺内萬治郎に師事。新文展入選。38年光風会展入選、レートン賞。47年光風会展、日展に出品。50年光風会 O 氏賞、翌年同会会員。52年日展特選。朝倉賞。56年光風会展南賞。58年北斗会を結成。67年日展菊華賞、70年日展審査員、71年日展会員。81年第67回光風会展辻永賞。86年日展評議員。同年12月資生堂ギャラリーにて個展。87年第日展文部大臣賞。2000年

日展出品作「聴音」で恩賜賞・日本芸術院賞、日本芸術院会員。2015年没、97歳。洋画家

庄司徳之助 (しょうじ・とくのすけ/生誕年不詳～1983年)
宮城県生れ。一水会に所属？。大調和会審査委員。1983年没、83歳。洋画家

荘司半仙 (しょうじ・はんせん？/1870～1944年)
秋田県生れ。荘司義教の長男。代々神職だった。絵は牧野雪僊に学んだ。1891年から1910年まで小学校教師。1944年没、74歳。日本画家

荘司 福 (しょうじ・ふく/1910～2002年)
松本市生れ。女子美術専門学校師範科日本画部卒。郷倉千靱に師事。1941年東北美術展(現・河北美術展)出品。第10回東北美術展で河北美術賞。51年日本美術院院友、81年日本美術院評議員。仙台、東京、横浜と移り住み、戦後は油彩画の要素を取り入れた日本画制作を行った。2002年没、92歳。日本画家

小代為重 (しょうだい・ためしげ/1863～1951年)
佐賀市生れ。1875年上京、慶応義塾幼稚舎に入り、本科中退。工部省修技校に学ぶ。百武兼行に洋画を学ぶ。83年千葉師範学校教諭。85年千葉女子師範学校教諭。86年工部大学校雇。88年東京電信学校助教。89年明治美術会創立会員。96年白馬会結成に参加、会員。1900年滞欧、パリ遊学。01年青山学院中学部、青山女学院で教鞭。東京で没、88歳。洋画家、美教

城 義隣 (じょう・ちか？/1784～不明年)
天明4年生まれ。経歴は不詳。君路と刻んだ印が残っており字と思われる。絵事を好み、唐絵、油絵、泥絵などを手掛けた。他地方で泥絵が発見されたため、泥絵作家として知られているが、泥絵の作品は必ずしも多くはない。大徳寺に天井画が残っている。江戸絵師、長崎派、油彩、泥絵

昇亭北寿 (しょうてい・ほくじゅ/生没年不詳)
葛飾北斎の門人。北斎の初期の門人。作画期は寛政末期から文政頃。作の大半は風景画だが風俗画や狂歌本の挿絵、摺物、肉筆画。北寿の風景画は北斎の洋風表現を受け継ぐ、永寿堂、栄久堂の版元から多数版行。『浮世絵師伝』は、北寿の作で「文政七年(1824年)に書きしと思はるゝ肉筆画の掛物の「清正公之像」に「行年六十二歳」とある。『原色浮世

絵大百科事典』第2巻他も、文政7年以降に62歳以上で没したとする。江戸時代の浮世絵師

庄野伊甫 (しょうの・いほ/1876～1958年)
福岡市生れ。東京美術学校西洋画科入学、浅井忠に師事、1900年同校同科選科を福岡県出身者として初めて卒業。06年まで同校研究科に在籍。03年内国勸業博覧会で受賞。パリ万国博覧会、セントルイス万国博覧会に入選。明治美術会展、パリ世界博覧会、文展入選を重ねる。在学中から夏目漱石らの評価を受けたが、その後は大分県立日田中学に勤務するなど九州に身を埋めた。福岡県美術協会会員。福岡市で没、82歳。洋画家、美教

城ノ口みゑ (じょうのぐち・みえ/1917～2003年)
三重県生れ。伊勢型紙は、楮紙を柿渋で貼り合せたもので、これに専用の彫刻刀で文様を透かし彫りする。透かし部分の多い型紙は、補強のため、いったん文様を彫り上げたあとから二枚に剥がして、あいだに細い絹糸を挟み入れる「糸入れ」の工程を施す。1955年重要無形文化財「伊勢型紙糸入れ」保持者認定。63年鈴鹿市が「伊勢型紙伝承者養成事業」を開始、講師に就任。後継者の育成に尽力した。93年重要無形文化財「伊勢型紙」の保持団体として認定。三重県で没、86歳。工芸家、伊勢型紙糸入れ

生野祥雲齋 (しょうの・しょうんさい/1904～1974年)
別府市生れ。石城尋常高等小学校を卒業後、1923年佐藤竹邑齋に師事して竹工芸を学ぶ。25年独立し夢雀齋楽雲と称したが、後に生野祥雲齋を名乗る。27年大分市に居を構える。38～46年大分県工業試験場別府工芸指導所で商工技手。40年文展入選。以来、文展に出品し、43年『銘心華賦』が特選。第二次世界大戦後は、純粋な造形美を志向した創作を行い、57年に『炎』が日展特選・北斗賞を受賞。67年竹工芸初の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。1974年没、70歳。竹工芸家、人間国宝

城米彦造 (じょうまい・ひこぞう/1904～2006年)
京都市生れ。1931年神田区役所(千代田区)勤務、文筆家の道を歩み始めた。武者小路実篤の「新しき村」の活動に共感し、参加。詩や小説の執筆を開始し、その後、スケッチ、水彩画にも取り組んだ。戦後直後「新しき村」では東京支部長。ガリ版手作り月刊「城米彦造詩集」の発行を始め、全部で232冊。詩には自作絵が添えられた。2006年没、102歳。城米彦造記念会が活動。水彩画家、路上詩人

庄 漫 (しょう・まん/1972年～)

上海生れ。1995年上海第二医科大学口腔医学部卒。2000年来日。06年文化女子大学造形学部生活造形学科卒。鹿取武司の指導、メヂチントに出会う。国際版画展に出品。07年日本版画協会展。11年 NHK-BS1「アジアクロスロード」で紹介される。日本版画協会準会員。版画家

ジョセフ・ラブ (Joseph Love/1929～1992年)

米、マサチューセッツ州生れ。1956年ボストン大学神学部修士課程を修了し、64年上智大学神学部修士課程を修了。67年米、コロンビア大学美術史科修士課程を修了。89年まで上智大学教授、美術史を教えた。現代美術評論もよくし雑誌「美術手帖」等に執筆。木版画や墨絵を制作する作家でもあり、61、66、71年米国、73豪国で個展。72年東京の南画廊、75、76年東京のオオサカ・フォルム画廊、85年IBM川崎市民ギャラリー、90年INAXギャラリーで個展開催。東京で没、62歳。美術評論家、美教、墨絵、版画

白井昭子 (しらい・あきこ/1935～2001年)

大連生れ。1959年東京芸術大学美術学部油絵科卒。63年シュル美術賞展で受賞。64年東京芸術大学美術学部版画科卒。個展(秋山画廊・日本橋、65年も)、春陽会展・受賞。66年ロックフェラー財団の奨学金で渡米、新人推薦展(A.A.A.ギャラリー・NY)。73～74年アメリカの日本人作家展(国立近代美術館・京都、東京)。77～92年個展(シロタ画廊・銀座)、版画集「NewYork. NewYork」刊行。98年リュブリアナ国際版画展(スロヴニア)で受賞。2001年没、66歳。版画家

白石 潔 (しらいし・きよし/1952年～)

愛媛県生れ。1971年大阪芸術大学。里見明正に師事。77年埼玉羽生市にアトリエ、絵画教室を設け主宰。2006年感性脳科学教育研究会会員。2013年油彩の他屏風制作。日本とドイツを繋ぐ活動。毎年の様に個展開催。06、09、10年、京橋・金井画廊個展。(出典 わ眼)洋画家

白石隆一 (しらいし・りゅういち/1904～1985年)

岩手県生れ。1923年上京、川端画学校入学。28年帝展入選。31年清水良雄に師事。42年光風会会員。46年日展で岡田賞、53年日展委嘱。のち会友。54年「一関美術研究所」開設。「魚の画家」。65年欧州巡遊。岩手県で没、81歳。洋画家、美教

白井保春 (しらいし・やすはる/1905～1990年)

東京生れ。東京美術学校卒。1923年院展入選。33年日本美術院賞。木彫のほか塑像も手がけた。戦後は太平洋美術展で藤井記念賞などを受賞。近代美術協会副会長。1990年没、85歳。代表作に「トルソ」「母子像」。彫刻家

白井嘉尚 (しらいし・よしひさ/1953年～)

静岡県生れ。1979年東京藝術大学大学院修了。抽象表現主義とミニマル志向を軸に新しい表現を模索。80年代以降彩色された、1つ一つのピースを複雑に絡ませた作品制作。「A-Value」展(88～95年)創設企画参加。「和紙展」(ベルリン、アンドレアス・ヴァイス画廊)、「偏在する波動」展(94年マニラメトロポリタン美術館)。現代美術家

白江正夫 (しらえ・まさお/1927～2014年)

北海道生れ。1948年北海道第一師範学校卒。59年白日会展白会賞、翌年会友。66年道展会友賞、翌年会友。71年渡欧。67年日本水彩展三宅賞、68年日本水彩画賞、会友、80年会員、87年日本水彩画会北海道支部長。日本水彩画展審査員。91年日本水彩展評議員。93年日本水彩画展内閣総理大臣賞。2003年立小樽美術館 白江正夫展。2014年没、87歳。洋画家、水彩

白尾健一 (しらお・けんいち/1920～没年不詳)

東京生れ。1969年太平洋美術学校の椿悦至に師事。75年大潮展、大潮和展、光陽会展入選。光陽会会友。武蔵美校卒。81年渡欧。そごう、三越、小田急、京王、東急等で個展。洋画家

白髪一雄 (しらが・かずお/1924～2008年)

兵庫県生れ。1948年京都市立美術専門学校日本画科卒。油彩画に転向して吉原治良に師事。55年具体美術協会会員。絵の具をこね足で描く。57年ミシェル・タピエに認められ、アンフォルメル運動に参加。欧州で個展開催。65年日本国際美術展で優秀賞。2008年没、84歳。洋画家、具体

白銀 功 (しらがね・いさお/1905～1978年)

福岡県生れ。川端画学校に通う。黒田清輝に師事。1947年二紀会展に招待出品、同人、71年同会会員、のち同会委員。1978年没、73歳。洋画家

白髪富士子 (しらが・ふじこ/1928～2015年)

大阪生れ。1946年大阪府立大手前高等女学校卒。48年白髪一雄と結婚。55年「真夏の太陽にいとむモダンアート野外実験展」で細長い板を縦に二分割した作品を発表する。55年具体美術協会会員。和紙を素材とした平面作品を制作。61年具体美術展を最後に、制作活動を休止。2015年没、87歳。洋画家、具体

白川一郎 (しらかわ・いちろう/1908～1994年)

香川県生れ。1932年東京美術学校西洋画科卒。同大学で西洋画科講師を務める(～1944年)。38年

光風会会員推挙。42年新文展特選。「8月9日御前会議」、「最後の御前会議」を描く、現在、野田市鈴木貫太郎記念館。66年中近東旅行。68年渡欧。1994年没、86歳。洋画家

審査員。52年日本芸術院賞恩賜賞。東京で没、87歳。洋画家、水彩

白川一郎 II (しらかわ・いちろう/1908～1994年)

香川県生れ。丸亀中学校卒。上京。1925年第2回白日会展に出品。1930年第17回光風会展で光風賞。31年第18回光風会展でK夫人賞。32年第13回帝展に初入選。東京美術学校西洋画科卒。44年まで同校講師を務める。40年光風会会員。紀元二千六百年奉祝展に出品。42年第5回新文展で特選。43年第6回新文展に無鑑査出品。戦後は日展、光風会展に出品を続ける。日展では出品依頼。政界・財界著名人の肖像画を描いたことでも有名。94年11月25日没、享年86歳。(佐)洋画家

白鳥映雪 (しらとり・えいせつ/1912～2007年)

長野県生れ。1932年上京し、伊東深水の画塾に入門、美人画を学ぶ。夜間は川端画学校、本郷洋画研究所でデッサンを学んだ。深水や山川秀峰らが結成した日本画院展に39年入選。40～41年報知新聞社委嘱特派員を兼ね従軍画家として中国に渡る。50、57年日展で特選・白寿賞。86年内閣総理大臣賞。65年日展会員、82年評議員。85年佐久市立近代美術館で「日本画の歩み 50年—白鳥映雪展」が開催。94年恩賜賞・日本芸術院賞を受賞。97年日本芸術院会員。小諸市で没、95歳。日本画家

白木正一 (しらき・しょういち/1912～1995年)

名古屋生れ。1935年上京、独立美術研究所、37年福沢一郎研究所に学ぶ。39年美術文化協会結成に参加、美術文化展に61年まで出品、48年同协会会员。58～89年妻早瀬瀧江と渡米。85年愛知県立美術館で個展開催。静岡県で没、83歳。洋画家

白根光夫 (しらね・みつお/1926～2002年)

大分県生れ。1948年東京美術学校油画科卒。63年安井賞展6回出品。69年渡欧、73年再渡欧。76年吉田清志、宮田晨哉らと共に「爵の会」を結成し、61年まで同会展を中心に活躍した。現代日本美術展、上野の森85年の歩み展。現代具象絵画展、明日への具象展等に出品。個展多数。2002年没、76歳。洋画家

白洲正子 (しらす・まさこ/1910～1998年)

東京生れ。樺山伯爵家の二女。梅若宗家に能を習い、能楽堂の舞台に立つ。1924年学習院女子部初等科修了後、米国に留学。28年に帰国、29年実業家の白洲次郎と結婚。43年「お能」出版。この頃から終戦直後まで細川護立に中国古陶磁の鑑賞の仕方を教わり、戦後は美術評論家の青山二郎を中心とした文化人グループの中で、小林秀雄、河上徹太郎らから文学や骨董の指導を受け、芸術・芸能を大胆に論じた随筆、紀行文を数多く残した。55年銀座の染織工芸店「こうげい」の開店に協力、翌年より70年まで直接経営にあたり、多くの染織作家を発掘する。64年「能面」(求龍堂)、72年「かくれ里」(新潮社)で二度読売文学賞。「十一面観音巡礼」(新潮社 昭和50年)、「日本のたくみ」(新潮社 昭和56年)、「白洲正子 私の骨董」(求龍堂 平成7年)。東京で没、88歳。(引用 東文研) 評論家、著述家、骨董

白浜 徴 (しらはま・あきら/1865～1928年)

長崎県生れ。長崎外国語学校や東京大学予備門などで英語を学ぶ。長崎県庁外事課勤務を経て、1887年東京美術学校。94年絵画科(日本画)教員養成課程を修了。長崎活水女学校教授、高等師範学校助教授を経て、1901年東京美術学校教授。日本画、教育学、教授法、幾何画法、英語を教えた。02年黒田清輝らと日本の美術教育を見直すため「普通教育における図画取調委員」に任命される。04年マサチューセッツ州立図画師範学校編入学し、05年同校を修了。イギリス、フランス、ドイツの美術教育法の調査をし、明治末から大正初めにかけて発行された「尋常小学校新定画帖」(1910年)、「高等小学校新定画帖」(1912-13年)などの教科書や「図画教育の理論と実践」(1911年)が発行された。日本の美術教育を臨模主義(絵手本を元に学ぶ)から児童の創造性の啓発を主眼とした教育法へと大きく転換させた。07年東京美術学校の師範科設立に尽力する。1928年没、63歳。美術教育、美術指導

白瀧幾之助 (しらたき・いくのすけ/1873～1960年)

兵庫県生まれ。1889年上京、生巧館画塾、94年天真道場で学ぶ。98年東京美術学校西洋画科卒。04～11渡米、英、欧。12年光風会創立参加。13年日本水彩画会創立参加。15年文展無鑑査。20年帝展

白山卓吉 (しらやま・たくきち/1887～1963年)

長野県生れ。松本中学校卒。川端画学校に学ぶ。日本水彩画会会員、1932年大森絵画自由研究所設

立、55年信州美術会副会長。1963年没、76歳。水彩画家、美教

真海 朗 (しんかい・あきら/1951年～)

東京生れ。父は徳太郎。東京造形大学彫刻科卒、東京芸術大学大学院彫刻科へ、大学では佐藤忠良・岩野勇三に、大学院にて船越保武に師事し、当時の具象彫刻作家の教授の元で具象・彫塑表現を学んだ。新制作に出展・入選。その後、二紀会に出展し以降、毎年作品を出品。1983年に『足立区野外彫刻展』入賞・設置。93年に『二紀会安田火災美術財団奨励賞』。95年『ルーマニア・日本芸術文化交流シンポジウム』に参加。2001年『ブランクーシ生誕125周年 彫刻キャンプ』に参加、作品を現地に設置・寄贈。09年に韓国の在韓日本大使館公報文化院 シルクギャラリーにて現地の作家と共に『韓国・日本彫刻交流展』に出品。彫刻家

新海覚雄 (しんかい・かくお/1904～1968年)

東京生れ。彫刻家新海竹太郎の長男。川端画学校に学ぶ。1922年太平洋画会賞、同会会員。25年中央美術展入選、二科展に出品。28、29年「一九三〇年協会」展に入選。46年一水会会員。48年日本美術会会員。53年日本美術会の事務局長、委員長は井上長三郎。54年挿絵。68年没、64歳。洋画家、挿絵

新海竹蔵 (しんかい・たけぞう/1897～1968年)

山形県生れ。彫刻家。仏師の家に生れる。1912年上京し、伯父新海竹太郎に彫塑を学ぶ。15年文展に入選、24年再興院展入選し、のち同人。木彫、塑像ともによくした。52年東京教育大学講師として後進を指導。54年現代美術展出品作品で芸術選奨文部大臣賞。61年SAS(彫刻家集団)結成。63年国画会に合流、彫刻部を再興。東京で没、71歳。彫刻家

新海竹太郎 (しんかい・たけたろう/1868～1927年)

山形県生れ。少年時代に日本画を学ぶ。1886年上京、一時軍務に服したがウマの彫刻に興味をいだき、退役して木彫を後藤貞行、塑像を小倉惣次郎に、デッサンを浅井忠に学んだ。98年日本美術院の創立に際し、正員。99年パリ国際博覧会の鑑査官。1900年独に留学し、ベルリン美術学校に学んだ。02年帰国、02年太平洋画会会員となり彫刻部を主宰して後進を指導。文展審査員。明治末期から大正にかけての洋風彫塑の発展に尽くした。17年帝室技芸員、19年帝国美術院会員。代表作『ゆあみ』(1907、東京国立近代美術館)、『大山元帥像』(上野恩賜公園)。東京で没、59歳。覚雄は息子。彫刻家、美教

真海徳太郎 (しんかい・とくたろう/1913～2001年)

福岡市生れ。上京、山本瑞雲に師事し彫刻の道に入る。兄弟子には、澤田政廣、三木宗策。日展を主な発表の場として日展参与を勤めた。また東京都足立区に在住し区内に多くの野外彫刻が点在している。主な設置場所は、東京都足立区役所エントランスホール、同区梅島 L ソフィア、同区西新井ギャラクシティー、愛媛県宇和島市伊達博物館 伊達宗城像。足立区展の開催、そして足立彫刻会の設立に尽力した。千葉県柏市で没、87歳。彫刻家

真海宏之 (しんかい・ひろゆき/1983年～)

東京生れ。東京造形大学彫刻科卒、同大学大学院美術研究領域へ進学。具象・彫塑表現を基礎に学び修了する。彫刻作品と共に油彩画における表現活動を行なっている。2005年足立区展彫刻部に出展、以降毎年出品。09年に韓国在韓日本大使館公報文化院 シルクギャラリーに『韓国・日本彫刻交流展』に参加。同年に東京・銀座で個展開催。11年米、韓国、中国、スペイン、スイス、イタリアのグループ展、アートフェアに参加し発表。彫刻家

新宮清彦 (しんぐう・きよひこ/1907～1945年)

佐賀県生れ。同舟舎に学ぶ。1933年東京美術学校西洋画科卒。1945年没、38歳。洋画家

進藤 章 (しんどう・あきら/1900～1976年)

山梨県生れ。山梨師範学校卒。1923年屋義郎と山梨師範学校出身洋画家グループ「赤蓼会」結成。24年草土社に属し、木村荘八に指導を受ける。27年青山古典美術研究所入所、古典技法を4年研究。大調和展、古典美術協会展に出品、個展を開催。37年山梨美術協会結成に参加。39年菁々会を結成。終戦後帰郷し、山梨美術協会会員。48年峡北美協を創設して会長。東京で個展を開催。初期の草土社に影響を受けた画風、山梨の自然をモチーフとした独自の装飾的画風を確立した。1976年没、76歳。洋画家

新道 繁 (しんどう・しげる/1907～1981年)

福井県生れ。1924年東京府立工芸学校卒。34年光風会会員。55年女子美術大学講師。58年文部大臣賞。60年以降は「松」を繰り返し描く。60年日本芸術院賞。69年日展理事。71年光風会常務理事のち理事長。75年日展常務理事。1977年日本芸術院会員。東京で没、74歳。洋画家

進藤 蕃 (しんどう・しげる/1932～1998年)

東京生れ。1952年東京芸術大学美術学部油画科入学、56年首席で卒業、大橋賞。60年フランス政府給費留学生として渡仏、パリのエコール・ド・ボーザールにて、モーリス・ブリアンションに師事。安井賞展に出品、女子美術大学、東京芸術大学、愛知県立芸術大学、非常勤講師。67年濤々会を結成、74年黎の会を結成、東京セントラル美術館で展覧会。83年にパリのグランパレ美術館、第10回FIAC展(国際現代美術展)で個展を開催。94年、「両洋の眼」展に出品、笠井誠一、福本章とともに三申会展を開催。東京で没、65歳。洋画家

進藤妙子 (しんどう・たえこ/1924年～)

台北市生れ。1945年東京女高師(現お茶の水女子大)教学科卒。55～59年三輪田学園教職。1959年教職を辞め同学図書館に勤務する傍ら絵画を始める。1968年病気再発により三輪田学園を退職、画業に専念。70年ゆき画廊、72～73年ギャラリーデコール、80年日辰画廊開廊展、82年美術ジャーナル画廊、87年以降隔年瞬生画廊と95～2005年みゆき画廊と同時開催。春陽会々友。洋画家、美教

進藤武松 (しんどう・たけまつ/1909～2000年)

東京生れ。東京物理学校中退し、1929年から構造社研究所で斎藤素巖に師事。32年構造社展入選、34年構造社展で推奨に、35年構造社展で構造賞。36年文展監査展入選、38年新文展特選、52年日展で、53年日展で連続、特選・朝倉賞。67年新日展文部大臣賞、73年改組日展に出品作で日本芸術院賞、61年日展評議員、68年日本彫塑会(後に日本彫刻会)理事、75年日展理事、83年日本芸術院会員、84年日本彫刻会常務理事、87年日展顧問。85年勲三等瑞宝章・紺綬褒章、没後従四位が贈られた。主としてブロンズ像を手がけ、写実を主体として力強く密度ある肉付けで人体の個性や生命感を表す清楚な作風に定評があった。横浜市で没、91歳。彫刻家

神中糸子 (じんなか・いとこ/1860～1943年)

和歌山市生れ。1973年上京。76～78年工部美術学校に学ぶ。フォンタネージに師事。81年小山正太郎に師事。87年明治美術会に入会。87～94年明治女学校図画教師。1903年内国勸業博覧会で褒状。日本女子美術学校、東京女子高等師範学校で教鞭。女子美術教育に尽力。神戸に移り、個展開催。43年没、82歳。洋画家、美教

神保朋世 (しんぼ・ともよ/1902～1994年)

東京生れ。齋藤英明、伊東深水に師事し、美人画

の代表的画家となる。浮世絵的な挿絵時代もの挿絵。俳人「窓」(俳句結社)主宰。著書に「浮世絵の話」「句画三昧」「窓四亭俗話」など。97年東京文京区の弥生美術館で回顧展が開催される。1994年没、92歳。日本画家、俳人

新保兵次郎 (しんぼ・ひょうじろう/1908～1977年)

新潟県生れ。日本美術学校中退。小糸源太郎に師事。33年帝展に入選。46、47年日展で特選、62年日展会員、68年日展評議員。68年日展で内閣総理大臣賞。52年光風会特賞、のち光風会会員としても活躍。東京で没、69歳。洋画家

す

吹田草牧 (すいた・そうぼく/1890～1983年)

大阪生れ。1908年関西美術院で洋画を学ぶ、鹿子木孟郎に師事。11年葵橋洋画研究所で洋画を学ぶ。14年竹内栖鳳、17年土田麦僊に日本画を学ぶ。22年国画創作協会会友、23年会員となるが同協会日本画部解散こともない28年新樹社結成。25～26年滞欧。39年土田麦僊門下生と「山南会」を結成。55年竹内栖鳳門下生と「竹杖会」結成。戦後は主に洋画を描いた。83年没、93歳。洋画家、日本画家

末川凡夫人 (すえかわ・ぼんぷじん/1905～1961年)

広島県生れ。1925年凡々社社作洋画第1回展(田阪文具店)を開催。25年広島県美術展覧会に油彩画を出品。川端画学校に学ぶ。27年中央美術展、27年白日会展に出品。27年春陽会展で入選。27年広島美術院に出品。27年広島美術院凡々社洋画展に油彩画と木版画を出品。30～32年広島出身の詩人関谷忠雄が詩と版画の同人誌『牧神』を発行。33年広島洋画協会の創立に参加、審査員、委員。1961年没、56歳。洋画家、版画家

末永一夫 (すえなが・かずお/1911～1975年)

岐阜市生れ。1932年岐阜師範学校専攻科卒。41年二科展入選、42年北川民次に師事、51年特待賞、56年会友、62年会員、67年会員努力賞。59年丸栄画廊、74年日動画廊名古屋支店、66年丸物画廊、69年日動画廊名古屋支店個展開催。66年フランスのサロン・ド・コンパレゾン、42、45年サロン・ドートンヌに出品。69～70年メキシコに写生旅行。名古屋市立汐路中学校をはじめ教職、戦後の創造美術教育運動に参加。58～59年にはCBCテレビで児童画についての放映に出演。名古屋市で没、63歳。洋画家、美教

末永胤生 (すえなが・たねお/1913～2009年)

長崎市生れ。1934年文化学院美術部卒。33年

「1940年協力展」を結成、日本最初の立体派の展覧会を開催。32年独立美術展に出品、42年独立賞、48年会員。36年エコール・ド・東京展を結成、上野美術館で開催。43年凸版印刷の依頼により、「皇后陛下凸版印刷工場に行啓の図」を制作、献上。57年渡仏、67年仏アンデパンダン展会員。72年コートダジュール(カンヌ)国際グランプリ。74年ギャラリー・ミヤモトにおいて滞欧作品展。79年紺綬褒賞。81年サロン・ナショナルボザール展に無鑑査招待。パリで没、96歳。洋画家

末原晴人 (すえはら・はるひと/1907～1990年)

大阪生れ。1926年県立都城商業学校卒、同舟舎洋画研究所、川端画学校に学ぶ。33年宮崎県内教職。51年日展、光風会展入選し、53年K氏賞、60年会員。65～66年渡仏、アカデミー・グラン・ショミエールに学ぶ。66年宮崎県文化賞、83年置県100年記念教育文化賞。1990年没、83歳。洋画家、美教

末松正樹 (すえまつ・まさき/1908～1997年)

新潟県生れ。39年渡欧、ノイエ・タンツ(新舞踊)を学ぶ。44～46年スペインで抑留、抽象を志向。47～62年自由美術家協会会員。53年多摩美術大学教授。65～83年主体美術協会創立に参加し、主体展に出品。東京で没、88歳。洋画家、美教

末松正樹 II (すえまつ・まさき/1908～1997年)

新潟県生れ。1930年山口高等学校文科卒。31年佐藤哲三と美術研究所を開設。33年東京中央電話局勤務、その間、舞踊を学び、グループ「舞踊新人群」を結成。39年渡欧、43年マルセイユで初個展。第二次大戦中南仏で抑留生活。46年帰国。47年自由美術協会会員。以後62年まで出品。48年モダンアート展に出品。53年多摩美術大学教授(70年まで勤める)。54年～55年渡仏。56年第2回現代日本美術展に出品、以後6回展まで出品。57年第4回日本国際美術展に出品、以後8回展まで出品。64年主体美術協会の結成に参加。97年没、享年89歳。(佐)洋画家、美教

菅井 汲 (すがい・くみ/1919～1996年)

神戸市生れ。1933年大阪美術学校に学ぶ。48年吉原治良に油絵を学ぶ。52年渡仏、パリに定住、パリのクラヴェン画廊と契約して、個展を開催。60年東京国際版画ビエンナーレ展に出品、東京国立近代美術館賞。40年サンパウロ・ビエンナーレで国際最優秀作家賞。66年クラコウ国際版画展で大賞。65年芸

術選奨文部科学大臣賞。69年京都国立近代美術館で個展。神戸市で没、77歳。洋画家、版画

菅井梅関 (すがい・ばいかん/1784～1844年)

仙台の人。江戸で谷文晁に、長崎で清(中国)の江稼圃に文人画をまなぶ。大坂で画名をあげ、四十余歳で帰郷。1844年没、61歳。通称は岳輔。別号に東斎。作品に「墨梅図」「夏冬山水図屏風」など。江戸時代後期の画家

菅木志雄 (すが・きしお/1944年～)

岩手県生れ。1964～68年多摩美術大学絵画学科で学ぶ。李禹煥や関根伸夫などとともに「もの派」を代表するアーティスト。木や石、金属などの自然物・人工素材を、加工せずに空間に配置し、そこで生まれる光景を「状況(景)」と呼んで作品化してきた。74年からは、すでに設置されたものを新たに置きかえ、空間を活性化させる「アクティヴェイション」と呼ぶ行為を展開してきた。これまで数多くの個展・グループ展に参加してきたが、2012年ロサンゼルスBlum & Poeで行われた「太陽へのレクイエム:もの派の美術」への参加をきっかけに、アメリカにおける再評価の機運が高まった。12年ニューヨーク近代美術館で開催された「Tokyo 1955-1970: A New Avant-Garde」に参加。16年にはイタリア・ミラノのピレリ・ハンガービコッカで大規模個展「Situations」が開催され、17年の第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ「VIVA ARTE VIVA」にも出展作家として参加。08年栃木県那須塩原市に菅の作品を常時展示するスペース「菅木志雄 倉庫美術館」が開館した。16年毎日芸術賞。モノ派、彫刻、造形

菅 創吉 (すが・そうきち/1905～1982年)

姫路市生れ。絵は独学。カット、政治漫画、図案で生計をたてる。戦後、新聞挿絵を描く。1960年現代画廊個展。63～72年渡米。ロス、シスコ、NYで個展。永住権取得。ユーモラスな形と禁欲的な色彩の中に鋭い洞察深い認識を見せる。東京で没、77歳。(出典 わ眼)洋画家

菅 楯彦 (すが・たてひこ/1878～1963年)

鳥取市生れ。父に日本画学ぶ。1912年大正美術会設立に参加。最も大阪らしい画家。57年日本芸術院恩賜賞受賞(日本画家としては初めて)。62年初の大阪市名誉市民。大阪で没、85歳。(出典 わ眼)日本画家、版画

菅沼金六 (すがぬま・きんろく/1904～1988年)

東京生れ。東京高等工業学校附属徒弟学校電気科を経て、日本大学社会科に学び、ディスプレイ用照明を手掛け、ディスプレイ、デザイン、グラフィック・デザインのスタジオを経営。1933年シカゴ万博に際し、出品物展示場の設計、施工を委嘱、渡米。36年アメリカン・アカデミー・オブ・アート卒。40年一水会展出品。46年一水会会員、60年一水会常任委員。49年日本水彩画会展に出品、同会会員。53年より日展に出品、57年日展で岡田賞。東京で没、84歳。洋画家、水彩、デザイン

菅沼貞三 (すがぬま・ていぞう/1900～1993年)

静岡県生れ。1926年慶応義塾大学文学部美術史科卒。26～28年京都帝国大学附属図書館嘱託勤務。30年帝国美術院附属美術研究所の職員、助手を勤めた。その後、嘱託を経て43年美術研究所員に任官。48年機関誌『美術研究』に健筆を揮い、同7年1月の創刊号より数多くの研究成果を公表した。51年静岡大学教育学部、53年愛知大学文学部非常勤講師。62～66年慶應大学文学部教授。55～68年大和文華館研究員嘱託、同館の刊行する『大和文華』誌上に多くの論考を発表。70年愛知学院大学教授。73年常葉学園短期大学客員教授。79年常葉美術館名誉館長。60年慶応義塾大学より文学博士。静岡県文化財保護審議会委員(52～83年)、東京都文化財専門委員(68～71年)。美術研究所時代より文人画を中心に日本の近世絵画の研究を進めた。とくに郷里と縁の深い渡辺華山の研究の基礎を確立して大きな功績をあげた。没後150年を記念して『定本・渡辺華山』(全3巻、郷土出版社、平成3年)が常葉美術館の編集によって刊行されたが、華山研究の基礎資料を集大成した本書に監修者・執筆者として参画したのが菅沼の最後の大きな仕事になった。静岡県で没、92歳。常葉美術館名誉館長、美術史家

菅沼 稔 (すがぬま・みのる/1951年～)

静岡県生れ。1974年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒、76年同校大学院美術研究科版画専攻修了。98年モダンアート展で新人賞及び俊英作家賞、第34回神奈川県美術展で特選。2000年現代日本美術展で横浜美術館賞(東京都美術館、京都市美術館)。01～02年文化庁派遣芸術家在外研修員欧州滞在(主にスペイン)。08年イスタンブール国際版画ビエンナーレ展(トルコ)、バートバアヴァン国際版画ビエンナーレ展で名誉賞(インド、ローノンカール美術館)。日本美術家連盟会員、相模女子大学講師。版画家

菅野圭介 (すがの・けいすけ/1909～1963年)

東京生れ。京都帝国大学文学部中退。1935～37年欧州巡遊。ジュール・フランランに師事。38年独立展で協会賞を受賞。41年日動画廊で個展。43年独立美術協会会員。52年渡米、ブラジルを経て欧州へ、同年帰国。東京で没、53歳。(出典 わ眼)洋画家

菅野矢一 (すがの・やいち/1908～1991年)

山形市生れ。川端画学校に学ぶ。1939年安井曾太郎に師事。40年より一水会展に出品、46年一水会会員、60年一水会委員に推挙、77年一水会常任委員。53～54年渡欧、アカデミー・グランド・ショミエールに通う。55、60年日展で特選。62年日展で菊華賞。66年日展会員。79年日展で文部大臣賞。77年山形美術館で個展。81年日本芸術院賞、86年日本芸術院会員。東京で没、84歳。洋画家

菅野 陽 (すがの・よう/1919～1995年)

台北市生れ。1943年東京美術学校日本画科卒。戦後銅版画に転じる。47年前衛美術会創立に参加。55年日本版画協会展出品、翌年、同会員。57～64年東京国際版画ビエンナーレ出品。日本国際美術展、現代日本美術展出品。銅版画のさまざまな技法を駆使した繊細な作風で知られる。63年「江戸の銅版画」を刊行。著書「銅版画の技法」「日本銅版画の研究・近世」。95年没、76歳。96年平塚市美術館遺作展。版画家

菅野 廉 (すがの・れん/1889～1988年)

宮城県生れ。1910年宮城県師範学校卒。15年東京美術学校卒。25年二科展入選。31年パリに留学、サロン・ドートンヌに入選。35年河北美術展で河北賞(最高賞)。64年宮城県芸術協会の創設に参加。65年蔵王写生会を創設。84年宮城県美術館で菅野廉展を開催。1988年没、98歳。大衡村ふるさと美術館「菅野廉」記念絵画常設展示。洋画家

菅谷邦敏 (すがや・くにとし/1914～1992年)

栃木市生れ。1936年中央大学法学部中退。45年小糸源太郎に師事。46年日展入選。47、50年日展特選。61年日展で菊華賞。82年日展評議員。47年光風会展に入選、光風賞、光風会会員。61～62年渡欧。川崎市で没、78、79歳。洋画家

菅谷元三郎 (すがや・もとさぶろう/1896～1946年)

千葉市生れ。千葉中学校を卒業後、太平洋画会研究所で中村不折に学び、また満谷国四郎の影響も受

ける。1925年千葉市幕張町へアトリエを建立し、27年から太平洋画会展、28年から帝展へ「老人像」出品、35年無鑑査。1946年没、50歳。洋画家

菅原慶吾（すがわら・けいご/1921～1985年）

福岡県生れ。元東美展代表。1985年没、64歳。洋画家

菅原白龍（すがわら・はくりゅう/1833～1898年）

山形県生れ。1842年、独学で『北斎漫画』を学び、11歳で南宗画を学んだ。49年、16歳で江戸に向かう。佐藤竹臯に師事、熊坂適山に入門。京都で画業修行する。55年江戸に戻り、帰郷。57年江戸へ出て、さらに越後国を周遊し富取芳斎の知遇を得て、その人柄に心酔、3年余り寄宿。62年蕃書調所に出仕、西洋画を研究していた川上冬崖とも親しく交友。このころから白龍は洋画の研究を始めた。77年第1回内国勸業博覧会に出品、褒状。秋田、山形で次々に開かれる勸業博覧会に出品。明治天皇の東北巡幸の際、山形で「栗嶺奇観十二景」を献納。何度となく片道9日間の道のりの郷里と東京間を歩いていた白龍は84年に初めて東京に居を定めた。82年内国絵画共進会の南画部門に出品、84年第2回内国絵画共進会には銅賞。85年中村楼で開かれた第1回鑑画会大会に出品、これは南画家としては特異な位置。渡辺小華らと「東洋絵画会」を結成、機関誌『東洋絵画叢誌』を発行、美術雑誌の嚆矢といえるこの月刊誌はその後、東陽堂の吾妻健三郎が引き継ぐこととなるが、白龍の発議で誌名から東洋の字を省いて「絵画叢誌」とし、以降も編集にあたった。東洋絵画共進会では審査員も務め、金賞や銅賞を受ける。岡倉天心は東洋絵画共進会を痛烈に批判、アーネスト・フェノロサらと新しい美術運動を展開し始めるが、白龍はそうした新時代の潮流を真摯に受け止め、フェノロサが指摘した陰影と色彩の調和に腐心、西洋派の空間構成を取り入れようと研究を始めた。89年寺崎広業を東京に伴い、『絵画叢誌』に挿絵を描かせるなどして次代を担う青年画家を育成した。96年天心は日本画壇の革新派の総帥として日本絵画協会を組織するが、白龍はその第1回から参加、第2回展には天心から川端玉章、橋本雅邦、山名貫義とともに四人の審査官の一人に推挙された。南画界からの審査員登用は極めて異例のことで、天心の慧眼を物語るものであった。同年、書家でもあり草書を得意とした白龍は『草書千字文』を刊行、この時使用した石版30枚（個人蔵）が長井市指定文化財になっている。97年日本絵画協会第2回絵画共進会には「桜花富岳図」を、同年秋の日本絵画協会第3回絵画共進会には「花卉図」、

「秋景山水」、「水墨山水」の3点を審査員として出品した。白龍は平生、弟子に「展覧会の寄稿や席上画の応援といって利己の為に人を苦しめるのは罪悪だ」と言っ、生涯自分の画会は開けなかった。98年猪瀬東寧らとともに「日本画会」を創立、日本美術協会から名誉賞牌。東京で没、64歳。日本画家

菅原 優（すがわら・ゆう/1977年～）

埼玉県生れ。1998年日本デザイン専門学校卒。2000年個展「投げ出された肖像」(HARAJUKU GALLERY)。04年個展「私の化身」(銀座ギャラリー中沢)。06年個展「肉の行為」(青木画廊 LUFT)。11年個展「部屋にあるドラマ」(青木画廊)。日本デザイン専門学校美術科講師。(出典 わコレ)洋画家、デザイン、美教

杉浦一郎（すぎうら・いちろう/1916～1977年）

東京生れ。川端画学校に学ぶ。1952年旺玄会出品、55年会友、58年会友努力賞、59年会員、62年旺玄会委員、64年常任委員。日本山林美術協会会員。1977年没、61歳。洋画家

杉浦邦恵（すぎうら・くにえ/1942年～）

名古屋市生れ。1967年にシカゴ美術館附属美術大学学士課程を修了。同大学で、絵画や彫刻が主流という時代において写真と出会い、ケネス・ジョセフソンらニューバウハウスの流れをくむ教授たちの薫陶を受ける。卒業後に拠点をNYに移す。今日に至るまで50年以上、チャイナタウンのスタジオでつねに実験的で独創的な写真表現を探求し、アクリル絵具やキャンバスを取り入れた作品や、身近な植物や生物をフォトグラムの手法でありのままに写し出した作品など、実験的な手法を用いた独自の作品を制作してきた。2018年大規模な回顧展が東京都写真美術館で開催。その半世紀にわたる軌跡と先駆的な世界観が紹介された。写真家、洋画家

杉浦俊香（すぎうら・しゅんこう/1844～1931年）

静岡県生れ。日光及び高野山に籠り技を研磨し、支那に遊び台湾に渡り技を磨いた。60歳大阪府豊能郡の剣尾山山頂に籠居し3年間の修養を積み、独自の日本画を創出。澹墨画及び雪影は独自の画風である。近代日本画壇はもとより、前後五回、欧米に渡り日本画の紹介行脚を行い海外にも日本画を紹介した。1913年フランス政府より、オフィシエ・ド・アカデミー勲章。同時に仏ルーヴル美術館より作品『遠浦帰帆』の展示。1931年没、87歳。日本画家

杉浦非水（すぎうら・ひすい/1876～1965年）

松山市生れ。1901年東京美術学校日本画科卒。アール・ヌーヴォー様式に影響を受ける。10年三越

呉服店の図案主任。22～24年渡欧。25年創作図案研究団体七人社を結成。29年帝国美術学校図案科長に就任。35年多摩帝国美術学校を創立、校長。工芸図案界の先覚者。37年全日本商業美術連盟を結成、委員長に就任。54年日本芸術院恩賜賞受賞。58年紫綬褒章受章。日本のグラフィック・デザイナー。65年没、89歳。 **図案家、版画家、美教**

杉浦正美 (すぎうら・まさみ/1926年～)

愛知県生れ。1952年北川民次、安藤幹衛に師事。52年二科展に入選。公告デザインを手掛けながら、描き続けた。61年二科展で特選。63年二科展会友。80年二科展会員。87年二科展会員努力賞。88年名古屋市の栄中日文化センターで、「杉浦正美洋画教室」を開設。2008年初期作から最新作までの絵画60点を田原市へ寄贈。 **洋画家**

杉浦幸雄 (すぎうら・ゆきお/1911～2004年)

東京生れ。米国のまんが『親爺教育』に刺激されまんが家を目指し、本郷の郁文館中学校時代に本郷絵画研究会などで学び、1929年岡本一平門下に入る。31年『アサヒグラフ』に作品が掲載され、32年横山隆一、近藤日出造らと新漫画派集団(のちの漫画集団)を結成、38年『主婦の友』連載の『銃後のハナ子さん』がヒットする。第2次世界大戦後は『アトミックのおぼん』(1947)などの風俗まんがで人気を博し、56年第2回文藝春秋漫画賞を受賞。さらに、岡部冬彦と組んだ『図解・淑女の見本』(1969)などで経済成長期の日本女性を描いたが、週刊『漫画サンデー』に83～2003年連載した『面影の女』は、設定を45～54年の昭和20年代に限定、この時期へのこだわりを示していた。80年紫綬褒章、85年勲四等旭日小綬章。東京で没、92歳。 **漫画家、洋画家**

杉 英治 (すぎ・えいじ/1914～1987年)

岡山県生れ。1970年二科会会員、審査員。ル・サロン会員。国際ボザール会員。ローマ招待個展。バルバニー二個展。外遊取材旅行。大阪で没、73歳。 **洋画家**

杉下昭明 (すぎした・てるあき/1927～1994年)

宮崎県生れ。1945年旧制県立都城商業学校卒業、51年宮崎大学学芸学部2年課程図画工作科入学。83年ローマン派美術協会展初出品。86年退職後は県立福島高校で非常勤講師。絵画、陶芸教室などで指導する。90年ローマン派美術協会理事。93年度都城市文化賞。1994年没、67歳。 **洋画家、美教**

杉戸 洋 (すぎと・ひろし/1970年～)

愛知県生れ。1992年愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒。小さな家や、空、舟などのシンプルなモチーフを好んで描き、繊細かつリズムカルに配置された色やかたちが特徴。2016年の個展「杉戸洋——こっぼとあまつぶ」(豊田市美術館)では、建築家・青木淳とコラボレーションし、会場を構成したほか、17年の東京での美術館初個展「杉戸洋 とんぼ とのりしろ」(東京都美術館)では前川國男が設計した美術館の展示空間と呼応するような幅15メートルの大作《module》(2017)を発表した。これまでに参加した主なグループ展は「ウィンター・ガーデン:日本現代美術におけるマイクロポップ的想像力の展開」(原美術館ほか、09年)、「ロジカル・エモーション—日本現代美術展」(ハウス・コントルクティブ美術館ほか、2014-15)など。17年芸術選奨、文部科学大臣賞。 **日本画家、油彩画、現代美術**

杉林古香 (すぎばやし・こう/1881～1913年)

京都生れ。1895年京都市立美術工芸学校漆工科(後に描金科と改称)に入学。入学以前から漆器制作や図案研究などを行っており、在学中より京都美術協会展などに出品し受賞を重ねる。1900年同校卒業後、上京して川之辺一朝(帝室技芸員・東京美術学校教授)の弟子となるが、短期間で京都に戻り家業を手伝う。04年西川一草亭(生花去風流七代家元・津田清楓の実兄)・津田青楓(洋画・日本画家)と3人で図案研究の目的で「小美術会」を結成し、図案雑誌『小美術』(木版摺の図案を掲載)を芸艸堂より刊行(1904.4)、同号を浅井忠に献呈して知遇を得る。その後、浅井忠・谷口香嶠を同誌の顧問に迎え、作品評などを掲載して評判となるが、津田青楓が日露戦争の兵役で離れたこともあって第6号(1904.3)で廃刊となる。06年浅野古香らが中心になって浅井忠・神坂雪佳らを迎えて漆芸家と図案家の図案研究会「京漆園」を結成し、浅井忠・神坂雪佳・谷口香嶠らから図案の指導を受ける。伝統的な蒔絵師の家から離れ自由な制作を求めて07年杉林トモと結婚。杉林家の養子となり、以降は杉林姓を名のって浅井の図案を基に多くの漆器を制作し関西美術会展工芸の部などに出品するが、1913年没、32歳。 **漆工芸、蒔絵師、版画**

杉原正巳 (すぎはら・まさみ/1913～1946年)

静岡県生れ。1938年東京美術学校油画科卒。34年本科に進み、南薫造教室に学ぶ。36年校内の臨時版画教室で平塚運一に木版画を学び、37年国画会展入選。37年日本版画協会展に入選。39年独立

展に油彩画、国画会展に木版画が入選。42年日本版画協会展に出品。43年会員。44年には恩地孝四郎の主宰する版画研究会「一木会」に参加。43年美術文化協会展にも油彩画を出品、同人。1946年没、33歳。洋画家、版画家

杉全直 (すぎまた・ただし/1914～1994年)

東京都生まれ。1938年東京美術学校油画科卒。二科展に出品。39年独立展で協会賞。39～53年美術文化協会創立に参加。日本国際美術展、現代日本美術展に出品。精力的に個展開催。55年ころより抽象絵画。58年日本美術展で優秀賞。59年日本国際美術展で鎌倉近代美術館賞。61年同展でブリヂストン美術館賞。多摩美術大学教授、東京芸術大学教授を歴任。99年姫路市美術館で個展。東京で没、79歳。洋画家、美教

杉村 惇 (すぎむら・じゅん/1907～2001年)

東京生まれ。1932年東京美術学校西洋画科卒。3年より岡田三郎助教室で学ぶ。33年仙台市常盤木学園で一時教鞭。43年文展無鑑査。51年東北大学教育学部講師、翌年助教授。63年日展審査員、64年東北大学教育学部教授、日展会員、光風会評議員、宮城県芸術協会の設立に参加し、理事。67年宮城教育大学教授。74年宮城県教育文化功労者。78年日展評議員・日洋展常任委員。83年日展文部大臣賞。2014年宮城県塩竈市に「塩竈市杉村惇美術館」が開館。2001年没、94歳。洋画家、美教

杉本亀久雄 (すぎもと・きくお/1920～1992年)

奈良市生まれ。1944年関西学院大学卒。毎日新聞社に勤務、大阪本社芸芸部美術記者、66年まで在籍。自由美術家協会展に出品。49年自由美術家協会会員。50年モダンアート協会創立会員として参加。66年日動サロン、67年大阪梅田画廊で個展。大阪で没、71歳。洋画家

杉本健吉 (すぎもと・けんきち/1905～2004年)

名古屋市生まれ。1923年愛知県立工業学校図案科卒。25年頃京都で岸田劉生に師事。31年国画会展に出品。38年国画会同人。42年新文展特選。46年日展特選。49年頃吉川英治の連載小説『新・平家物語』の挿絵。87年知多郡に杉本美術館が開館。94年愛知県美術館で個展開催。奈良の風物を愛し多くの風景素描を残した。名古屋市で没、98歳。洋画家、挿絵

杉本三郎 (すぎもと・さぶろう/1898～1942年)

東京生れ。初め木彫を森鳳声に学び、のち東京美術学校に入学、1921年卒業後、帝展文展に入選 9回、41年文展無鑑査。直土会々員。1942年没、44歳。彫刻家

杉本 鷹 (すぎもと・たか/1906～1962年)

大阪生れ。1930年日本プロレタリア美術同盟に加入。32年二科会研究所に通う。41年二科展初入選。46年日本美術会に参加。47年職業美術協会結成に参加、常務理事、職業美術協会研究所で指導にあたる。62年没、56歳。洋画家

杉本哲郎 (すぎもと・てつろう/1899～1985年)

大津市生れ。1913年京都市立美術工芸学校3年から京都市立絵画専門学校入学20年卒。23年鹿子木孟郎に師事。37年外務省文化事業部嘱託としてインドのアジャンタ洞窟壁画の模写に従事し、38年セイロンのシーギリヤ岩崖壁画を模写、40年には満州史跡調査員としてモンゴルのワーリン・マンハ慶陵壁画模写に従事する。43年東本願寺南方仏教美術調査隊としてインド、クメール、タイ、スマトラ、ジャワなどの仏教美術を調査、51年インド・シャンチニケータン大学客員教授として教鞭をとる。58年NYで個展、60年サンフランシスコで個展。本願寺津村別院の壁画制作。76年ブラジルより国際文化勲章(メーダラ・デ・メリット・インチグラシオ・ナショナル)を受章。84年京都市文化功労賞。京都で没、86歳。洋画家、日本画

杉本博司 (すぎもと・ひろし/1948年～)

東京生れ。立教大学経済学部卒。1970年米、ロスのアートセンター・カレッジ・オブ・デザインで写真を学ぶ。74年NYに移り。75年から写真作家へ。76年ニューヨーク近代美術館で最初のシリーズである「ジオラマ」シリーズの1枚を持ち込み、これが評価されて買い上げ。NY州の奨学金やグッゲンハイム奨学金を得ながら写真作品を制作。77年南画廊個展。81年NYのソナベンド・ギャラリーで個展。2001年ハッセルブラッド国際写真賞。欧米など世界各地の美術館で個展を開催。09年高松宮殿下記念世界文化賞、10年紫綬褒章。13年フランス芸術文化勲章オフィシエ。17年文化功労者。写真家

杉本ヘンリー (すぎもと・へんりー/1901～1990年)

和歌山市生れ。1928年加州オークランド芸術大学卒。29年加州美術学校油画科修了。29年パリに留学、アカデミー、コラロンに学ぶ。サロン・ドートンヌ入選。カリフォルニア水彩画協会会員。39年サンフラ

ンシスコ世界博覧会美術展で金賞。44年ヘンドリック
ス大学美術館で個展。木版画で受賞。64年二科会会
員。72年ロサンゼルス市からドキュメンタリー絵画と
命名、特別賞。日動画廊で個展。NY で没、89歳。**洋
画家、水彩**

杉山恵子 (すぎやま・けいこ/1945年～)

2000年八重洲カレッジ辻耕クラスで油絵受講。社
内の美術部で東原均に師事。07年芸大アンデパン
ダン展出品。07～11年日美絵画展入選、佳作、学園
賞。08年上野の森美術館日本の自然を描く展入選、
以降も上位入選。**洋画家**

杉山司七 (すぎやま・ししち/1895～1985年)

富山市生れ。1915年富山県師範学校本科卒。19
年東京美術学校師範科卒。富山県立商業学校図画
教師、和歌山県立中学、山口県師範学校、同高等学
校、高等女学校、帝国美術学校等で教鞭。37年国際
美術教育会議出席、渡欧し、1年間欧米の美術教育
を視察。40年朝鮮、満州の美術教育を視察。45年美
術教育奨励事業、美術教科書編纂に携わる。50～5
5年東京都美術館館長、77年太平洋美術学校校長。
『クレヨン画の描き方』『総合美術史要』『現代特選図
案集』などを刊行。東京で没、90歳。**東京都美術館
長、美術教育、洋画家**

杉山新樹 (すぎやま・しんじゅ/1898～1974年)

岡崎市生れ。1923年東京美術学校卒。25年「我々
の会」を作り、洋画の展覧会を開き新人の育成に努め
る。44年まで春台会に所属した。同年、旺元会に出
品。岡崎市立高等女学校、愛知県岡崎師範学校で教
鞭。45年文化協会設立の世話人会。46年岡崎美術
協会副会長。49年愛知学芸大学教授。60年国際美
術教育会議に日本代表出席。67年勲三等瑞宝章。1
974年没、75歳。**洋画家、美術教育、版画**

杉山惣二 (すぎやま・そうじ/1946年～)

名古屋生れ。1969年東京芸術大学彫刻科卒、7
1年同大学大学院修了。74、83年新制作協会展で
新作家賞。84年昭和会展で最優秀賞。86、90年ロ
ダン大賞展(美ヶ原高原美術館)で特別優秀賞。94、
2002年泰明画廊で個展。**彫刻家、テラコッタ**

杉山雅之 (すぎやま・まさゆき/1960年～)

京生れ。1983年京都市立芸術大学美術学部卒、
85年京都市立芸術大学院修了。04年 KUMAMOTO
ビエンナーレII で熊日賞グランプリ。03年あさご芸
術の森大賞展で大賞。02年京展で京展賞。04年に

市長賞。2007年北陸中日美術展で富山テレビ賞、と
よた美術展、個展(ギャラリーなつか、galerie 16)。**彫
刻家**

杉山元輝 (すぎやま・もとてる/1900～1979年)

岐阜県生れ。太平洋美術学校に学ぶ。石井柏亭、
有島生馬に師事。47年一水科展、日展入選。日展会
友。58年一水会会員。66年渡欧。1979年没、79
歳。**洋画家**

杉山 寧 (すぎやま・やすし/1909～1993年)

東京生れ。1928年東京美術学校日本画科入学。3
1年帝展に入選。32年帝展特選。33年東京美術学
校日本画科卒。帝展特選。57年日本芸術院賞。69
年日展理事。70年日本芸術院会員。71日展常務理
事。74年文化勲章、文化功労賞。76年日展顧問。9
1年東京名誉都民。1993年没、82歳。**日本画家**

勝呂孝資 (すぐろ・たかし/1925～1995年)

静岡県生れ。大調和会委員。日光市で没、70歳。
洋画家

勝呂 忠 (すぐろ・ただし/1926～2010年)

東京生れ。1946年多摩帝国美術学校西洋画科入
学。49年明治大学文学部仏文科に編入学。50年多
摩造形芸術専門学校(現、多摩美術大学) 絵画科卒。
50年モダンアート協会創立参加。61年イタリア留学、
モザイク壁画を研究。多摩美大助教授。京都産業大
教授。舞台美術、装幀。87年池田 20 世紀美術館「勝
呂忠の世界展」開催。2002年「勝呂忠前衛美術50年
展」(鎌倉中央公民館市民ギャラリー)開催。2010年
没、83歳。著作に「西洋美術史提要」など。**洋画家、
美教**

鈴木 章 (すずき・あきら/1906～1933年)

千葉県生れ。1928年東京高等工芸彫刻部卒。28
年齋藤素巖に師事。28年構造社に出品、29年構造
社で研究賞、30年構造賞、会友、32年構造社会員。
1933年没、27歳。**彫刻家**

鈴木敦子 (すずき・あつこ/1968年～)

愛知県生れ。1987年名古屋芸術大学美術学部入
学。91年中部春陽会(新人賞)。山本鼎版画大賞展
入選。96年鹿沼市立川上澄生美術館木版画大賞展
で準大賞。2007年須坂版画美術館にて添付「新収
蔵展-鈴木敦子-樋勝朋巳」展。07年より不忍画廊で
個展。**版画家**

鈴木 淳 (すずき・あつし/1892～1958年)

佐賀県生まれ。本名淳(じゅん)。1914年第8回文展に初入選。その後、11～12回展に出品。17年東京美術学校西洋画科本科卒。21年九州沖縄八県連合美術展に出品。第3回帝展に出品、その後も15回展まで出品。37年第1回新文展で無鑑査出品。美校在学中に清水良雄の紹介で、鈴木三重吉と会い「赤い鳥」の挿絵、表紙、口絵などを担当した。58年没、享年66歳。(佐) **洋画家**

鈴木新夫 (すずき・あらお/1915～1980年)

福島県生まれ。36年東京美術学校図案師範科卒。在学中南薫造に師事。37年新制作展に出品。47年新制作協会賞。55年新制作協会会員。67年新具象研究会の結成に参加。71年まで研究会誌「画家」(季刊)を発行。東京で没、65歳。 **洋画家**

鈴木栄二郎 (すずき・えいじろう/1910～1954年)

東京生まれ。1928年京華中学校卒、川端画学校に学ぶ。31年光風会展に入選、31、32年光風賞、54年光風会展で光風相互賞、37年光風会会員。34年帝展に入選。36年文展鑑査展で選奨。37年日本水彩画会会員。40年紀元二六〇〇年奉祝展で昭和洋画奨励賞。43年新文展無鑑査。46年日展で特選、47無鑑査。47年新樹会創立、会員。49年日本山岳画協会会員。1954年没、43歳。 **洋画家、水彩画**

鈴木英人 (すずき・えいじん/1948年～)

福岡市生まれ。神奈川県立横須賀高等学校卒。1980年頃からイラストレーターとして活動。82年ロックバンドのヒューイ・ルイス&ザ・ニュースのアルバム『ベイエリアの風』の日本版のジャケットのイラストを製作。ダイヤモンド社が発行していたFM情報誌『FM STATION』では81～88年の創刊(プレ版を入れるとその前年)表紙を担当。東京書籍の英語教科書『NEW HORIZON』の表紙(1984年 - 1986年)、トヨタ自動車の乗用車「カリーナ」のカタログ表紙(1983年 - 1984年)、ライオン男性向けシャンプー「TOP BOY」(絶版)のラベルイラストも手がけた。 **イラスト**

鈴木 治 (すずき・おさむ/1926～2001年)

京都生まれ。京都市立第二工業卒。1947年日展初入選。48年八木一夫らと前衛陶芸の走泥社を結成。60年日本陶磁協会賞、45年バロリス国際陶芸展金賞をうけるなど、国内外で活躍した。79年京都市立芸大教授。99年陶芸界から初の朝日賞。2001年没、74歳。 **陶芸家**

鈴木華邨 (すずき・かそん/1860～1919年)

東京生まれ。1874年中島亨齋に学び、菊地容齋に就き「華邨」の号。四條派花鳥画も模範とし自らの長所。87年勸業寮編輯係に勤務。起立工商会社図案係でも働く。77年内国勸業博覧会で花紋賞メダル受賞。89年石川県立工業学校教授、赴任。98年日本美術院創立には正員。「花鳥画の華邨」として知られた。日本美術協会・国画玉成会・美術研精会・異画会に会員として参加。1907年文展三等賞、09年文展で褒章。10年の日英博覧会で金牌受賞。東京で没、59歳。 **日本画家、挿絵、版画**

鈴木御水 (すずき・ぎょすい/1898～1982年)

秋田市生まれ。陸軍所沢飛行学校卒。日本画の塚原靈山や伊東深水に師事。雑誌「キング」や「少年倶楽部(クラブ)」に口絵や挿絵をかいた。とくに飛行機の挿絵にすぐれていた。作品に「密林の王者」「海洋冒険物語」の挿絵、絵本「万次郎漂流記」など。1982年没、84歳。秋田県出身。 **昭和時代の挿絵画家**

鈴木金平 (すずき・きんぺい/1896～1978年)

四日市生まれ。葵橋洋画研究所に学び、岸田劉生、木村荘八らを知る。1912年ヒュウザン会(のちフェウザン会)の結成に参加。中村彝に師事。22年帝展入選。太平洋画会展で中村賞。牧野虎雄ら元槐樹会会員たちと33年旺玄社の創立に会員として参加。東京で没、81歳。 **洋画家、版画**

鈴木 敬 (すずき・けい/1920～2007年)

静岡県生まれ。1944年東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。49年国立博物館調査員、52年文化財保護委員会(現、文化庁)美術工芸品課勤務。59年東京芸術大学助教授、65年東京大学東洋文化研究所助教授。52年渡米、58年渡欧。67年東京大学教授。70～72年東洋文化研究所長、同研究所附属東洋学文献センター長。75～79年美術史学会代表委員。79年から郷里である静岡県立美術館の設立準備に携わり、翌年には静岡県教育委員会事務局参与、86～93年静岡県立美術館初代館長。84年紫綬褒章、91年勲二等瑞宝章。中国絵画史全体を俯瞰した大著『中国絵画史』(上、中之一、中之二、下、吉川弘文館、1981～95年)、各所に分蔵される中国絵画を悉皆的に調査して逐一基礎データと図版を掲げた『中国絵画総合図録』(全5巻、東京大学出版会、1982～83年)は、鈴木が美術史学界にうち立てた金字塔。東京で没、86歳。 **中国美術研究者、美術館長**

鈴木啓二 (すずき・けいじ/1898～1981年)

函館市生れ。藤島武二に師事。御宿を愛し一時新町に住む。新世紀美術協会会員。埼玉県で没、83歳。洋画家

鈴木堅司 (すずき・けんじ/1916～1994年)

埼玉県生れ。1939年東京美術学校図画師範科卒。新郷中学校、浦和高等学校で美術教師。59年蒼騎会代表。浦和で没、78歳。洋画家、美術教育

鈴木賢二 (すずき・けんじ/1906～1987年)

栃木市生れ。1924年栃木中学校卒。25年東京美術学校彫塑科入学。29年東京美術学校退学、日本プロレタリア美術家同盟書記長。31年プロレタリア美術研究所に入る。46年日本美術会北関東支部長。49年日本版画運動協会設立。62年日本ブルガリア友好協会理事。63年キューバ友好協会理事、インドネシア文化協会理事。栃木市で没、81歳。2019年栃木県立美術館で個展。彫刻家、版画家

鈴木幸生 (すずき・さちお/1912～1986年)

東京生れ。1932年愛知県岡崎師範学校本科卒。37年同美術専攻科卒。38年二科展入選。60年二科会会員。83年評議員。51～60年愛知県立岡崎高等学校美術講師。75年岡崎文化協会の創立に参加、理事。86年名古屋画廊で自選展。岡崎市で没、74歳。92年岡崎市美術館で個展。洋画家、版画、美教

鈴木三郎 (すずき・さぶろう/1904～1950年)

吉原治郎とともに関西学院に学び、絵画サークル「弦月会」のメンバー。1934年二科展入選。二科の九室会に展示された。43年九室会解散まで出品。1950年没、46歳。洋画家

鈴木三五郎 (すずき・さんごろう/1902～1985年)

愛知県生れ。1924年東京高等師範学校卒。29年名古屋市市民美術展で市長賞。東海美術協会展で受賞、35年常任委員。30年愛知社展で愛知社賞。33年帝展入選。46年光風会会員。49年愛知学芸大学教授。66年文部省教育課程審議会専門委員。「愛知県美術教育協会」創立に尽力。80年名古屋市美術館で個展。85年没、83歳。洋画家、美教

鈴木滋子 (すずき・しげこ/1977年～)

神奈川県生れ。1998年以降、グループ展、個展多数。99年女子美術短期大学入学。2001年同校卒業。02年創形美術学校卒。フィギュア

鈴木正二 (すずき・しょうじ/1910～1990年)

山形県生れ。東京高等師範学校卒。川端画学校で学ぶ。1941年国画会展で国画奨励賞、43年同会会友、53年同会会員。1990年没、80歳。洋画家

鈴木松年 (すずき・しょうねん/1848～1918年)

京都生れ。父は鈴木派の開祖、鈴木百年。絵を父に学び、詩文を山田梅東に学ぶ。1880年京都府画学校出仕、翌年北宗科教員。82年内国絵画共進会で褒状、84年内国絵画共進会で銅章、90年内国勸業博覧会、翌年第4回の博覧会でも連続して受賞。93年シカゴ万博、1900年のパリ万博に出品、後者では銅賞。そのほか京都美術博覧会、日本美術協会展、新古美術品展などで受賞。文展には出品しなかった。山水、人物を得意とし、鈴木派の中心画家として京都画壇に重きをなした。1918年没、70歳。日本画家

鈴木信吾 (すずき・しんご/1944～1993年)

満州生れ。1966年立教大学経済学部卒。70年日本美術家連盟の版画工房に入り銅版画の技法を学ぶ。72年版画協会展協会賞。73～79年渡欧、オステンド市(ベルギー)ヨーロッパ絵画賞展、銅メダル。帰国後は個展発表、海外国際展に数多く出品。93年没、49歳。版画家

鈴木信太郎 (すずき・しんたろう/1895～1989年)

東京生れ。年白馬会洋画研究所で学ぶ。1916年文展初入選。26年二科展で犇牛賞。36～54年二科会会員。55年一陽会を結成。60年日本芸術院賞を受賞。69年日本芸術院会員。88年文化功労者。東京で没、93歳。(出典 わ眼)洋画家、版画

鈴木正教 (すずき・せいきょう/1922～1991年)

山形県生れ。1954年京都市立美術大学西洋画科卒。67年独立美術協会会員。1991年没、69歳。洋画家

鈴木祖祐 (すずき・そゆう/1905～1975年)

福島県生れ。1931、2年春陽会展入選。33年東京美術学校西洋画科卒。道展に出品、のち会員。1975年没、70歳。洋画家

鈴木大祥 (すずき・だいしょう/1883～1944年)

秋田県生れ。大館中学を卒業後に上京して洋画を学び、帰郷後は森吉神社に奉仕した。その合間に地元の庄司穂軒に日本画を学ぶ。のちに再び上京して小室翠雲に師事した。1944年没、61歳。日本画家、洋画

鈴木 隆 (すずき・たかし/1957年～)

東京生れ。1976年東京都立芸術高等学校卒。81年東京芸術大学美術学部卒、大橋賞を受賞/東京芸術大学第4回ジャパン・エンバ美術コンクールで大賞。83ヘンリー・ムーア大賞展で佳作賞。84年東京芸術大学大学院修士課程美術研究科修了。85年東京芸術大学美術学部研究生修了。2000年 TUES 2000 展で TUES 賞を受賞/美ヶ原高原美術館[アーティスト・レジデンシー] ホンブルグ 及び ザールブリュッケンにて滞在制作/ドイツ。2001年ザンクト・ヴェンデル/ドイツ 及び ポントレジーナ/スイスにて滞在制作。2005年ハノーバ及び グレンツァハ・ピレン にて滞在制作/ドイツ。洋画家

鈴木 崧 (すずき・たかし/1898～1998年)

横浜市生れ。1916年慶応大学法学部卒、文学部哲学科入学。途中退学し、渡仏する。ソルボンヌ大学入学。法学士号(リサンヌ アンドロア)及び文学士号取得。ソルボンヌ大学文科にて哲学、美学、社会学等の研究で約10年間在学。43年二科展において理論部を新設し、理論部会員。北園克衛、植村鷹千代、山中散生とともに絵画理論の指導。55年フランス サロン・ド・メ出品。60年二科会において海外を担当し「国際文化交流展」(フランス、イタリア、スペイン、ブルガリア、デンマーク)を企画担当。フランス サロン・ド・コンパレゾンに出品。白木屋画廊個展。61年イタリア、トリノ国際審美研究所に出品。ドイツ、ベルリン現代日本絵画展出品。白木屋画廊鈴木崧作品展。68年ジュネーブ、コルチナ画廊にて「マチュー、鈴木」二人展。93年フランス政府から芸術文化勲章勲位オフィシエ授章。93年アンフォルメル中川村美術館開館。1998年没、99歳。洋画家

鈴木武志 (すずき・たけし/1895～1978年)

福島県生れ。太平洋画会研究所、アカデミー・ジュリアンに学ぶ。中村不折に師事。太平洋美術会参加。1978年没、83歳。洋画家

薄田芳彦 (すずきだ・よしひこ/1898～1982年)

岡山県生れ。1918年京都市立絵画専門学校中退。二科展入選。22年東京美術学校西洋画科中退。23年伊東廉、野間仁根らと童顔社を結成。28、33年帝展入選。28年旺玄社創立に参加。71年京都府立文化芸術館で個展。82年没、84歳。洋画家

鈴木竹柏 (すずき・ちくはく/1918～2020年)

神奈川県生れ。逗子開成中学校卒。1936年中村岳陵に師事。56、58年日展特選。81年日展文部大

臣賞。87年日本芸術院賞。91年日本芸術院会員。2007年文化功労者。2020年没、101歳。日本画家、日展の理事長

鈴木千久馬 (すずき・ちくま/1894～1980年)

福井市生れ。1911年早稲田大学中退、白馬会洋画研究所に学ぶ。21年東京美術学校西洋画科卒研究生。25、26、27年帝展で特選。28～29年渡仏。41年大久保作次郎らと創元会を創立。57年日芸術院賞。72年日本芸術院会員。73年日展顧問。東京で没、86歳。洋画家

鈴木亜夫 (すずき・つぎお/1894～1984年)

大阪生れ。葵橋洋画研究所に通う。1921年東京美術学校西洋画科卒、研究科に進級。17年二科展出品、28年二科会友。30年「一九三〇年協会」展に出品。30年独立美術協会創立会員。一貫して独立に出品。66年渡欧、67年日動画廊で個展。82年ギャラリー・ミキモトで米寿回顧展。東京で没、90歳。洋画家、版画

鱸 利彦 (すずき・としひこ/1894～1993年)

千葉県生れ。本郷洋画研究所に入り、藤島武二に師事。1918年東京美術学校西洋画科本科卒。第12回文展初入選。22年第4回帝展に出品。以後15回展まで出品。40年新日本美術連盟の理事長となる。49年共立女子大学教授、77年まで勤務。55年一陽会の創立に参加。66年から無所属。88年日本橋高島屋で個展。93年没、享年98歳。(佐)洋画家、美教

鈴木朝潮 (すずき・ともみ/生誕年不詳)

横浜市生れ。1985年東京芸術大学美術学部油画科卒、『大橋賞』。87年東京芸術大学油画大学院壁画研究室修了。86年日本イラストレーション展で大賞、89年 THE ART 展 ペイント部門で大賞、90年 THE ART 展 フォトグラフ部門で大賞、2017年高知国際版画トリエンナーレで優秀賞。版画家、イラスト

鈴木梅巖 (すずき・ばいがん?/1836～1915年)

愛知県生れ。上京し、梅巖は画家を志し塩川文麟に四條派を学んだ。帰郷後まもなく明治の時代となり、四條派から南画へと嗜好が移りゆくなか、梅巖も1874年に小華が豊橋に来たのを機に、小華について文人画を学んだ。書も能筆で、書画の鑑定にもすぐれ、華椿一派はもちろん、故人の書画鑑定に信頼。1915年没、83歳。南画、文人画

鈴木初江 (すずき・はつえ/1931～1975年)

東京生れ。文化学院卒。モダンアート協会会員。1975年没、44歳。洋画家

鈴木春信 (すずき・はるのぶ/1725～1770年)

江戸生れ。西村重長の門人と伝わる。明和初年、裕福な趣味人の中で、美しい摺物に仕立てた絵暦を交換することが大流行しました。その流行の中、花々しく活躍したのが春信です。木版技術の飛躍的な進歩を背景に、春信は、幻想的で可憐な美人画を描いて人気を博しました。多色摺りの誕生に決定的な役割を果たした。当時の趣味人たちの要請に応え、物語、和歌、俳諧など幅広く取材した作品からは、彼の文学に対する造詣の深さもうかがえます。「錦絵の祖」と呼び称される春信。錦絵草創期の淡く和やかな色彩が特徴です。そのストーリー性豊かでドラマティックな作品は、今も多くのファンを魅了しています。1770年没、45歳。江戸時代中期の浮世絵師

鈴木春信 II (すずき・はるのぶ/1725～1770年)

江戸生れ。神田に居住。大田南畝、大久保忠舒、平賀源内らと親交。1760年頃紅摺絵を描き、65年多色摺木版画の錦絵を始め、浮世絵版画技法上に画期的な貢献。浮世絵史においても、一大転換期。絵暦交換会の場で錦絵と呼ばれる多色摺木版画の完成。古典的テーマを当世風俗に投影する見立絵の制作を通して自己の画風を確立。西川祐信の影響を受けた。900点前後の錦絵を発表。新鮮な技法を駆使して、古典的な抒情や日常生活の心理的機微を、当世風俗や実在のモデルに託してみごとに表現した。彼の描く女性の姿態には妖艶というより清雅な趣がある。春信はこの時期の錦絵の代名詞であり、のちの画家に絶大な影響を与えた。主要作品『風流やつし七小町』『お百度参り』『座敷(坐舗)八景』『風俗四季歌仙』『藤原敏行朝臣(秋風)』『おせんの茶屋』。江戸で没、45歳。江戸時代中期の浮世絵師

鈴木博尊 (すずき・ひろたか/1904～1988年)

愛知県生れ。高間惣七、堀田清治に師事。二元会理事長。元槐樹社委員。大阪で没、84歳。洋画家

鈴木不知 (すずき・ふち/1870～1930年)

名古屋生れ。1889年上京。小山正太郎の不同舎に学ぶ。93年明治美術会会員。1900年帰郷、洋画塾「白雲会」を開設、08年「名古屋洋画研究所」に改称。800名の門弟を輩出。02年太平洋画会創立参加。11年東海美術会創立、常務理事。愛知県洋画壇

の草分け。名古屋市で没。60歳。洋画家、美教

鈴木 誠 (すずき・まこと/1897～1969年)

大阪生れ。1922年東京美術学校卒、同研究科に進学。21年帝展入選、光風会展で今村奨励賞。23～27年渡欧パリでビシエールに師事、アカデミー・コラッシンにて研修し、イタリアを歴遊。29年帝展で特選。29年帝国美術学校助教授。36年新新制派協会を結成。35～68年多摩帝国美術学校教授、53年同校主任教授。東京で没、72歳。洋画家、美教

鈴木政輝 (すずき・まさてる/1924年～)

島原市生れ。1945年国内および諸外国に作品発表、ヨーロッパほか多くの国を訪ね帆船、海洋の研究取材。83年大阪での帆船フェスティバル。85年練馬区立美術館開館記念展に招待出品。86年運輸大臣室が作品収蔵。88年海の記念日に運輸大臣賞。93年船の科学館が作品収蔵。洋画家

鈴木雅明 (すずき・まさあき/1981年～)

愛知県生れ。2008年愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了。06年はるひ美術館(愛知)、07年Bunkamura Gallery(08)(東京)、11年GALLERY GOHON(愛知)で個展。05年夢広場はるひ絵画ビエンナーレ 夢広場はるひ大賞。05年シェル美術賞 2005グランプリ。07年損保ジャパン美術財団選抜奨励展秀作賞。洋画家

鈴木マサハル (すずき・まさはる/1945年～)

横浜市生れ。1964年武蔵野美術大学入学。66年第一美術展奨励賞、神奈川県展最高賞、スペイン、ポルトガル、フランス取材旅行。77年フランスに留学パリ美術学校に学ぶ。79年サロン・ドートヌヌ展へ出品。79年デ・ボザール展ボザール賞。84年I・M・A国際現代美術家協会大賞。87年国際芸術文化賞。2004年フランス、ソシエテ・ナショナル・ボザール会員を経て現在無所属。洋画家

鈴木美江 (すずき・みえ/1932年～)

東京生れ。日本画家望月春江の長女。高等学校在学中、寺内萬治郎と朝倉摂にデッサンを学ぶ。東京藝術大学日本画科に入学、在学中に日本画院で入選、卒業直後に日展入選、1956年日本画院展で日本画院賞、日展で特選、白寿賞。早熟の女性画家として脚光を浴びた。一貫して女性をテーマに描き続けている。日本画家

鈴木 満 (すずき・みつる/1913～1975年)

静岡県生まれ。1928年太平洋画会研究所に学ぶ。33年太平洋美術学校卒。第14回帝展に初入選。太平洋画会展に初入選。41年第37回太平洋画会展で葵賞。太平洋画会会員。42年第2回陸軍美術展で情報局長賞。43年第6回新文展で特選。47年示現会結成時会員、56年示現会退会。後、無所属。75年上野松坂屋で中村直人と二人展。71年日本橋高島屋で個展。6月8日東京で没、享年62歳。(佐) **洋画家**

鈴木保徳 (すずき・やすのり/1891～1974年)

東京生まれ。1908年葵橋洋画研究所に通う。16年東京美術学校西洋画科卒。28年二科賞、会友。30年独立美術協会創立会員。以降出品。54～66年多摩美術大学教授。72年紫綬褒章。東京で没、82歳。**洋画家、美教、版画**

鈴木慶則 (すずき・よしのり/1936～2010年)

静岡市生まれ。1958年多摩美術大学絵画学科油画専攻卒。67年シェル美術展2等賞。69年「今日の美術—静岡」展(静岡県民会館)に出品し今日の美術展大賞を受賞。76年大阪フォルム画廊(東京)個展。85～89年渡仏。88年静岡県立美術館「A-Value 展」出品(以降90、92年)。仏カルカソン市「日仏抽象絵画展」出品。静岡市で没、74歳。**洋画家**

鈴木義治 (すずき・よしはる/1913～2002年)

横浜市生まれ。川端画学校卒。洋画家の宮本三郎に師事。映画、レコードの美術宣伝に携わった後、1954年から絵画に専念。58年「コタンの口笛」(石森延男作)の挿画を手がけた。ほかの主な作品に「まちのせんたく」「ネコのおしろ」「雨のにおい 星の声」「ヴァイオリンの村」「五色のしか」「風の音をきかせてよ」などがある。58、59、75、88年産経児童出版文化賞。69年小学館絵画賞。84年児童文化功労者賞。88年絵本にっぽん大賞。2002年没、89歳。**挿絵、絵本作家**

鈴木龍一 (すずき・りゅういち、仏: Ruytchi Souzouki、1904～1985年)

横浜市生まれ。和田三造に師事、1921年ブラジルのリオデジャネイロ美術学校に学ぶ。22年代渡仏、パリで活躍。藤田嗣治、薩摩治郎八と交友。サロン・ドートンヌ、サロン・デ・ザンデパンダンに出品。パリで没、81歳。**洋画家、版画家、装飾家、イラストレーター、美術評論家**

鈴木良治 (すずき・りょうじ/1886～1931年)

新潟県生まれ。新潟中学校卒。1911年東京美術学

校西洋画科卒。14年文展入選。23年外遊。光風会展、帝展に出品。白日会会員。1931年没、46歳。**洋画家**

鈴木良三 (すずき・りょうぞう/1898～1996年)

水戸市生まれ。1922年東京慈恵医大卒。中村彝に師事。川端画学校に通学。22年「金塔社」を結成。22年帝展入選。28～30年渡仏。39年一水会展で具方賞。46年一水会会員。81年茨城県県民文化センターで「画道60年鈴木良三展」。東京で没、98歳。**洋画家**

須田輝洲 (すだ・きしゅう/生没年不詳)

1893年明治美術会第5回展に出品。97年入場有料で「百美人油絵展」を丹羽林平と開催(東両国江東館)。98年明治美術会創立十周年記念展に出品。作品所蔵先:山岡コレクション、徳川記念財団。師、生没年不詳。(出典 わ眼) **洋画家**

須田尅太 (すだ・こくた/1906～1990年)

埼玉県生まれ。1927年県立熊谷中学卒。独学で油絵を学ぶ。39年文展で特選。36年光風会展でF氏奨励賞。38年光風会展で光風特賞。40～49年光風会会員。49年国画会会員。抽象画を描く。71年司馬遼太郎の「街道をゆく」の挿絵。西宮市民文化賞、兵庫県文化賞。大阪府に2223点寄贈。大阪文化賞。講談社出版文化賞。神戸市で没、84歳。**洋画家、挿絵**

須田国太郎 (すだ・くにたろう/1891～1961年)

京都市生まれ。絵画は独学。京都帝国大学哲学科で美学、美術史を学ぶ。関西美術院に通う。1919～23年渡欧。関西美術院に出品。33年独立美術協会会員に推挙。47年日本芸術院会員。50～60年京都市立美術大学教授、のち学長代理。61年没、70歳。(出典 わ眼) **洋画家、美教、版画**

須田 寿 (すだ・ひさし/1906～2005年)

東京生まれ。1931年東京美術学校西洋画科卒。官展に出品。49年立軌会創立に参加。54年渡欧。65年武蔵野美術大学教授。85年芸術選奨文部大臣賞を受賞。東京で没、98歳。(出典 わ眼) **洋画家、美教育**

スタンラン (すたんらん/1859～1923年)

テオフィル＝アレクサンドル・スタンラン・Théophile-Alexandre STEINLEN。スイス・ローザンヌ生まれ。81年パリ・モンマルトルに移住。83年雑誌「シャ・ノワール」挿絵寄稿。88年アリスティド・ブリュアン歌集挿絵。94年ボディニエール画廊初個展。96年「ロドルフ・サリのシャ・ノワール一座巡業」ポスター。1901年フランス市民権。1923年モンマルトルで没、64歳。**洋画家、挿絵**

須藤雅路 (すどう・まさじ/1900～1979年)

福岡県生れ。1919年県立中学修猷館卒、翌年東京美術学校図案科入学。25年同校卒業後、香川県立工芸学校、福岡県工業試験所、大阪府工業奨励館勤務。53年東京美術学校図案科主任教授。教育者としての評価も高い。68年同校退職後に東海大学教授。また、日本色彩研究所や日本流行色協会の評議員。1979年没、79歳。洋画家、美教

須藤宗方 (すどう・むねかた/生没年不詳)

水野年方の門人。1901山中古洞、都築真琴、福永公美、高田鶴僊、鏑木清方、田中桃園、三井古溪、竹田敬方、大野静方、池田輝方、鱒崎英朋、河合英忠、阿出川真水とともに烏合会の結成に加わっており、創設者14名の一人。02年烏合会展に出品。大正期に主として木版の口絵を描いていた。当時の口絵は錦絵と同様の製作方法で描かれている。口絵を数多く残した。同門に前述の鏑木清方、竹田敬方、大野静方のほか、荒井寛方、池田蕉園、水野秀方、小山光方らがいた。生没年不詳。日本画家

砂澤ビッキ (すなざわ・びっき/1931～1989年)

旭川市生れの彫刻家。農業講習所終了。1953年土産物の木彫に従事。55年モダンアート展で絵画が入選。翌56年には彫刻に転向し、60年現代彫刻展に出品。大胆にして繊細、原始的にしてモダンなビッキ独自の作風を確立。世界的に高い評価を受けた異才。89年没、57歳。彫刻家

砂田友治 (すなだ・ともはる/1916～1999年)

苫小牧市生れ。1944年東京高等師範卒。57年東京芸大に通い、林武に師事。独立会員。全道展会員。北海道教大教授として多くの後進を育てた。78年仲間と「玄の会」を結成。1999年没、83歳。2016年苫小牧市美術博物館で生誕100年を記念した企画展を開催。洋画家、美教

角南松生 (すなみ・しゅうせい/1891～1984年)

岡山市生れ。1933年春陽会洋画研究所に学び、木村荘八、中川一政の指導を受けた。春陽会展に第10回展から出品、40年春陽会賞、41年会友、47年会員。47年日展から離れた。52、60、63、77年欧米を巡遊。村武らと浅草で天洋画会を設け。活動写真時代の映画館宣伝の草分けとして活躍。東京で没、92歳。洋画家

洲之内徹 (すのうち・とおる/1913～1987年)

松山市生れ。1930年東京美術学校建築科入学、

左翼運動に加わり中退、帰郷し日本プロレタリア文化連盟愛媛支部結成。35年雑誌「記録」同人、文芸評論。戦後は、日中戦争の体験などを主題に小説を発表、芥川賞候補。58年田村泰次郎の現代画廊に入社し、のち経営を引き継ぐ。美術評論の分野でも意欲的に執筆。また、新人の発掘とともに、定評のある作家より世に知られない画家たちの優品を集めた“洲之内コレクション”でも有名。14年間165回にわたって「民芸新潮」誌上に連載した「きまぐれ美術館」でも、忘れられた作家たちへの熱い思いをつづった。著書に「絵のなかの散歩」(73年)、「きまぐれ美術館」(78年)、「洲之内徹小説全集」(全2巻、83年)ある。東京で没、74歳。(引用 東文研)美術商、評論著、コレクター

澄川喜一 (すみかわ・きいち/1931年～)

島根県生れ。東京芸術大学美術学部彫刻科卒。元東京芸術大学学長。新制作協会会員、2006年同協会委員長。日本芸術院会員、文化功労者。金沢美術工芸大学客員教授。東京芸術大学名誉教授。島根県芸術文化センター グラントワセンター長・石見美術館長、財団法人横浜市芸術文化振興財団理事長。20年文化勲章。彫刻家

墨江武禪 (すみのえ・ぶぜん/1734年～1806年)

大坂の船町に住む船頭、月岡雪鼎に絵を学んでこれを本業とし、1781～89年頃、肉筆美人画を描いた。また、宋元の古画を研究し、更に池大雅の画法も習得。また彫金の毛彫りを得意とし、石膏で仮山水をつくる。彫金家としても絵師としても認められていた。生涯独身で、1806年没、73歳。江戸時代中期から後期にかけての大坂の浮世絵師、彫金家

住谷磐根 (すみや・いわね/1902～1997年)

群馬県生れ。1921年日本水彩画会展に入選、上京川端画学校に学ぶ。23年二科展に入選。MAVOに参加。24年三科造形美術協会創立に参加。27年牧野虎雄に師事し、槐樹社展に出品。独立展に出品。63年より大調和展に出品。1997年没、95歳。洋画家、版画

鷺見康夫 (すみ・やすお/1925～2015年)

大阪生れ。関西大学専門部経済科、立命館大学専門部経済科卒。大阪市立高等学校・中学校で教師。建設省建設大学校(建設美学)、大同工業大学(造形・意匠)、宝塚造形芸術大学・名古屋芸術大学(現代美術)、関西大学(絵画)で講師。1954年芦屋市展に作品。55～68年具体美術協会に加入、第1回(55

年)から最後となる第21回(68年)まで、出品。72年まで「具体」所属。75年「アーティスト・ユニオン」(AU)に参加。2000年「やけくそ・ふまじめ・ちゃらんぼらん」出版(文芸社)。2015年没、90歳。抽象画家、具体、美教

須山計一 (すやま・けいいち/1905~1975年)

長野県生れ。1930年東京美術学校西洋画科卒。日本漫画連盟に参加。33年日本プロレタリア美術家連盟書記長。41年一水会展に入選。46年一水会会員。42年双台社同人。45年信州美術会創立会員。47年日本美術会会員。59年草茨会創立会員。東京で没、69歳。洋画家

諏訪兼紀 (すわ・かねのり/1897~1932年)

鹿児島県生れ。大正-昭和時代前期の版画家。1897年生れ。21年日本創作版画協会展に木版画を出品。27年帝展入選。29年恩地孝四郎、川上澄生らによる「新東京百景」の制作にくわわり、11点を担当。31年日本版画協会の創立に参加した。1932年没、36歳。版画家、洋画

諏訪直樹 (すわ・なおき/1954~1990年)

三重県生れ。1977年Bゼミ Schooling Systemを修了。77年個展、白樺画廊(東京)開催。個展を中心にコバヤシ画廊(銀座)で発表。グループ展は、「第13回今日の作家 絵画の豊かさ 展」(77年横浜市民ギャラリー)、「第1回 神奈川アート・アニュアル」(87年神奈川県民ホールギャラリー)、「もの派とポストもの派の展開—69年以後の日本の美術」(87年、西武美術館)、「ART IN JAPANESE—現代の「日本画」と「日本画的イメージ」(93年O美術館)、「現代絵画の一断面—『日本画』を越えて」(93年東京都美術館)。1990年事故で没、46歳。2001年(平成13)には「没後十一年諏訪直樹展」(三重県立美術館)が開催された。現代美術家、洋画、立待、日本画家

せ

清希 卓 (せいき・たく/1906~1974年)

山口県生れ。1936年文展監査展に入選。元、自由美術協会会員。チャーチル会会員。1974年没、68歳。洋画家

清野克己 (せいの・かつみ/1916~1995年)

山形県生れ。1934山形中学校卒。近代洋画研究所(アバンギャルド・バンチュール・アカデミー)入所。藤田嗣治、野間仁根に師事。38年自由美術展入選。52年モダンダンアート設立時から出品。56年モダン

アート協会会員、審査員。60年県展県展賞(最高賞)。62年東京国際ビエンナーレ展選抜出品。79~87年個展多数。88年「清野克己画業55年展」山形美術館と上山城の2館で同時開催。1995年没、79歳。洋画家

清野 恒 (せいの・つね/1910~1995年)

山形県生れ。本名恒太郎。早稲田大学文学部卒。在学中より津田清楓洋画塾に学ぶ。35年黒色洋画展を組織する。渡欧、古美術研究の傍ら、サロン・ドートンヌに出品。39年帰国。自由美術家協会の創立に会友として参加。53年第3回モダンアート協会展で会員となる。65年日動画廊で個展。66年日動サロンで個展。87年までトキワ松楽園女子短期大学で教授を務める。95年7月20日川崎市の自宅で没、享年84歳。(佐)洋画家、美教

清宮質文 (せいみや・なおぶみ/1917~1991年)

東京生れ。父は画家の清宮彬。同舟舎に学ぶ。東京美術学校油画科卒。慶應義塾工業学校の美術教師を務める。1957年春陽会会員。サエグサ画廊・南天子画廊・フォルム画廊等で個展。木版画、ガラス絵等を制作。東京で没、73歳。(出典 わ眼)版画家、ガラス絵

清宮 彬 (せいみや・ひとし/1886~1969年)

広島市生れ。葵橋洋画研究所で黒田清輝に油彩画を学ぶ。1912年ヒュウザン会(後のフェウザン会)を結成。14年巽画会で二等賞。15年草土社創立同人。31年日本版画協会創立会員。慶應義塾の幼稚舎や中等部などで美術教師。69年没、82歳。洋画家、版画家、美教

瀬尾 暹 (せお・あきら?/1906~1976年)

名古屋市生れ。明倫中学卒。1931年二科展入選、42年会友。47年二紀展に出品、48年二紀会同人。35年愛知社展で愛知賞。37年汎太平洋博美術展特待。40年紀元二千六百年奉祝展特選。58年度中部在野美術団体連盟委員長。東海学園で美術を担当、70年以後愛知県私学協会美術研究主任。1976年没、70歳。洋画家、美教

瀬尾 暹 (せお・すすむ/1906~1976年)

名古屋市生れ。明倫中学校卒。1931年二科会入選、42年同会会友。40年紀元2600年奉祝美術展で特選。47年汎太平洋履博美術展特選銀賞。47年二紀会展に招待出品、48年二紀会同人。66年渡欧・

洋画研究。松坂屋などで個展。1976年没、70歳。洋画家

瀬川康男 (せがわ・やすお/1932～2010年)

岡崎市生れ。1951年岡崎市立高等学校卒。57年松谷みよ子の「信濃の民話」の挿絵。60年『きつねのよめいり』(文・松谷みよ子、福音館書店)刊行。67年「ふしぎなたけのこ」(文・松野正子、福音館書店)でブラティスラヴァ世界絵本原画展ゴールデンアップル賞グランプリ。68年「やまんばのにしき」(文・松谷みよ子、ポプラ社)で小学館絵画賞。78年エクソンモービル児童文化賞。87年「ぼうし」(福音館書店)で絵本にっぽん賞大賞、88年同書で講談社出版文化賞絵本賞。88年国際アンデルセン賞画家賞次席。89年『清盛／絵巻平家物語』(文・木下順二、ほるぷ出版)ブラティスラヴァ世界絵本原画展ゴールデンアップル賞。刈谷市美術館で個展。2010年没、77歳。洋画家、絵本作家、日本画、挿絵

瀬川芳郎 (せがわ・よしろう/1908～1985年)

1908年生れ。赤松麟作、小出檜重に師事。新槐樹社準委員。1985年没、77歳。洋画家

開光市 (せき・こういち/1958年～)

石川県生れ。1984年金沢美術工芸大学大学院絵画専攻油絵修了。91、2年国展国画会賞、97年国画会会員。98年コンテポラリージャパニーズアート展(ポーランド・クラコフ/スロベニア・リュブリアーナ)昭和会展 優秀賞受賞(日動画廊・東京)。2001年安田火災美術財団選抜奨励賞展 グランプリ受賞。08年制作・研究の為渡仏。16年石川県立美術館で開光市展、個展(東京、名古屋、パリ、ベルリン)。金沢美術工芸大学油画専攻非常勤講師。洋画家

関龍夫 (せき・たつお/1899～1985年)

長野県生れ。川端画学校、岡精一研究所に学ぶ。1962年兜屋画廊で個展、井上長三郎や児島善三郎が推薦文。信州上川路(飯田市)の開善寺近くにアトリエ、山本弘が一目置いていた。日本美術会会員。1985年没、86歳。洋画家

関川富士郎 (せきがわ・ふじろう/1905～1986年)

新潟県生れ。一線美術会委員、文部大臣賞。1986年没。洋画家

関口五郎 (せきぐち・ごろう/1920～1988年)

長野県生れ。国画会研究所で新人賞。宇治山哲平に師事。1968年国画会会員。1988年没、68歳。洋

画家

関口俊吾 (せきぐち・しゅんご/1911～2002年)

神戸市生れ。1931年鹿子木孟郎に師事。日仏学院仏語仏文学高等科卒試験合格。35年渡仏。36年招聘留学生の資格を得る、パリ国立高等美術学校に入学、日本人初の卒業生。37年サロン・ドートンヌで入選。59年ヴィシー国際展にてパリ・アンデパンダン賞。64年ジュビジイ国際展にてディプローム・ドヌール(名誉表彰)賞。パリで没、91歳。在仏57年。洋画家

関口隆嗣 (せきぐち・たかつぐ/1890～1982年)

埼玉県生れ。小川千蔵・岡田三郎助に師事。文展・帝展出品。日展会友。星稗科大学本館スロープに描かれた飛鳥時代の「薬狩り」「鹿茸狩り」を題材にした壁画を共同制作。1982年没、92歳。洋画家

関口文雄 (せきぐち・ふみお/1909～1983年)

示現会 1983年没、74歳 埼玉県立美術館に作品収蔵。洋画家

関口 誠 (せきぐち・まこと/1898～1984年)

千葉県生まれ。千葉高等師範学校卒。里見勝蔵に師事。32～33年独立展に出品。35～44年独立展に連続出品。63年創美会展(浅田進、松田康一、関口誠、木内岬、碓田勝己)。67年碓田勝己と二人展・昭和画廊(以降 72、75、77、78、80、81年)。84年没、86歳。洋画家

関口正男 (せきぐち・まさお/1912～2005年)

東京生れ。1927年東京府立第三中学校卒。33年頃荒井寛方に師事。43年院展入選。45年堅山南風に師事。47年院友。60年代半ばより「飛鳥幻想」(64年第49回展)、「幻想火の国」(65年第50回展)等、目を古代へと向ける。66年第51回展出品作「塔」が奨励賞を受け、同年特待。74年日本美術院賞。83年同人。90年文部大臣賞、95年内閣総理大臣賞を受賞。96年日本美術院評議員。98年勲四等瑞宝章。2000年にミュージアム氏家で「荒井寛方仏画の系譜—関口正男展」。埼玉県で没、92歳。日本画家

関口義輝 (せきぐち・よしてる/1899～1940年)

長野県生れ。上田中学校卒。早稲田大学卒。太平洋画会研究所で学ぶ。日本農民美術研究所に通う。1925年春陽会展に出品。のち写真美術社を開業。1940年没、44歳。洋画家

関四郎五郎 (せき・しろうごろう/1908～1971年)

松本市生れ。1933年構造社展に入選。38年二科会研究所に入所、熊谷守一の指導を受ける。35年春陽会展に入選。50年洋画研究所開設。48年長野県展審査員。56年春陽会会員。新文展に入選。68年日本橋三越で画業35周年記念展。長野県で没、63歳。洋画家

瀬木慎一 (せぎ・しんいち/1931～2011年)

東京生れ。1949年中央大学法学部に入学。東宝の契約社員としてアニー・パイル劇場(現、東京宝塚劇場)に派遣。岡本太郎、花田清輝らの前衛芸術運動「夜の会」に参加。49年「世紀」管理人、桂川寛とともにガリ版刷りパンフレット「世紀群」制作責任者。50年『世紀群』第3号でピート・モンドリアンの著述を翻訳した「アメリカの抽象芸術—新しいリアリズム」発表。53年から「読売新聞」の展覧会評を執筆。同年『美術批評』に美術批評論文「絵画における人間の問題」発表。54年「現代芸術の会」に参加。養清堂画廊、東京画廊の展覧会企画に携わる。57年渡仏ミシェル・ラゴン、ハンス・アルプ、ジャン・デュビュッフエ交友、57年イタリアで開催された国際美術評論家連盟会議に日本代表。75年「現代美術のパイオニア」を「古沢岩美美術館月報」に連載開始、77年東京セントラル美術館で「現代美術のパイオニア展」開催。77年東京美術研究所を西新橋・東京美術倶楽部内に創設し(80年に総美社と社名変更)。90～2011年『新美術新聞』で「美術市場レーダー」連載。「今日の新人55年」展(神奈川県立近代美術館、55年、作家選出)、「世界・今日の美術」展(日本橋高島屋、56年、展覧会委員)、シャガール展(国立西洋美術館ほか、63年、実行委員)、ピカソ展(国立近代美術館、64年、展覧会委員)、現代日本美術展(64年から71年まで、選考委員)、日本国際美術展(59年から65年まで、選考委員)、選抜秀作美術展(66年まで、作品選定委員)、東京国際版画ビエンナーレ(57年から64年まで、展覧会委員)、東京野外彫刻展(86年から95年まで、選考委員)。和光大学、女子美術大学、多摩美術大学、東京藝術大学で教鞭。国際美術評論家連盟会長、ジャポニスム学会常任理事、国際浮世絵学会理事。著書に「現代美術の三十年」(78年)、「戦後空白期の美術」(96年)、「国際／日本 美術市場総観」(2010年)など、総合美術研究所での編書に「全国美術界便利帳」(83年10月)、「日本アンデパンダン展全記録45-63」(1993年6月)。現代美術やデザインを論じる一方、社会的・経済的な視点から美術品取引の実態や、美術商・オークションの動向など美術市場を実証的に研究した。09年日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴによりインタビューが行われ、同団体のウェブサイトにて公開された。2011年没、80歳。(引用東文研) 評論家、美教

関 晴風 (せき・せいふう/1888～1957年)

長野県生れ。1905年上京、丸山晚霞の弟子になる。15年日本水彩画会会員、50年同会名誉会員。丸山晚霞と、小諸・玄光院で慰霊のため「釈迦八相」を制作。東京で没、69歳。水彩画家

関 主税 (せき・ちから/1941～2000年)

千葉県生れ。1941年東京美術学校日本画科卒。48年結城素明、のち中村岳陵に師事。54、55年日展で特選。58年新日展委員、68年同評議員となり、新日展で内閣総理大臣賞。82年毎日新聞社よりリトグラフ集『信濃春秋』を刊行。85年日展出品作で86年日本芸術院賞。92年日本芸術院会員。94年勲三等瑞宝章。99年より日展理事長。2000年没、81歳。日本画家、日展理事長

關 千代 (せき・ちよ/1921～2006年)

東京生れ。1940年東京府立第一高等女学校卒。43年帝国美術院附属美術研究所に入所し、隈元謙次郎のもとで研究補助にあたる。57年美術研究所が東京国立博物館と合併するのに伴い、文部技官。女性日本画家について調査、58年『美術研究』に「上村松園とその作品を発表。63年『日本近代絵画全集17竹内栖鳳・上村松園』(講談社)、72年「近代の美術12上村松園」(至文堂)を執筆。64年「黒猫会・仮面会等 覚書—明治末年における京都画壇の動向—」(『美術研究』232号 1964年)を発表。70年「皇居杉戸絵について」(『美術研究』264号、1970年)として発表、後その集大成となる『皇居杉戸絵』(京都書院、1982年)を刊行する。近代日本画の祖とされる狩野芳崖についても調査を続け、「芳崖の写生帳 上—奈良官遊地取」について—(『美術研究』286号、1973年)、「研究資料 狩野芳崖の書状—十一月六日(安政四年)付—」(『美術研究』311号、1979年)、「研究資料 芳崖の写生帳 下」(『美術研究』316号、1981年)を発表したほか、『現代日本美人画全集6 中村貞以』(集英社、1978年)、『近代の美術60 近代の肖像画』(至文堂、1980年)、『日本画素描大観5 前田青邨』(講談社、1984年)の編集、執筆を行った。83年東京国立文化財研究所を停年退官し、同所名誉研究員。在職中は、近代日本画の調査研究だけでなく、同所が編集・発行する『日本美術年鑑』の編集に尽力。また、同所の所蔵する黒田清輝の作品・資料の調査研究にもたずさわった。退職後も近代日本画史の研究を続け、学生時代から交遊のあった月岡栄貴が死去するとその画業を跡づける『月岡栄貴画集』(月岡房子、1999年)の編集・論文執筆にあたり、2002年には日本画団体鳥合会についての解説「鳥合会」(『近代日本アートカタログコレクション28 鳥合会』ゆまに書房)を執筆した。女性日本画家、とりわけ上村松園の研究では第一人者として知られ、宮尾登美子著『序の舞』執筆にあたって、豊富な資料と知見によって協力。また、学生時代から絵画を趣味として描き、在職中から描きた

めたパステル画によって2004年東京銀座の画廊で個展を開催した。東京で没、85歳。**近代日本画の女性研究者として草分け的存在**

関根正二 (せきね・しょうじ/1899～1919年)

福島県生れ。1908年東京に転居。伊東深水と親交、オスカー・ワイルドの作品を読む。13年異画会に入選。13年本郷洋画研究所に学ぶ。15年信州を放浪し河野通勢を知る。14年太平洋画会研究所に入る。異画会洋画部に出品。二科展に入選。16年二科展で樗牛賞。東京で没、20歳。「信仰の悲しみ」は2003年重要文化財。**洋画家**

関根伸夫 (せきね・のぶお/1942年～)

大宮市生まれ。1962年多摩美術大学油絵科入学、64年斎藤義重に指導を受ける、68年同大学大学院油画研究科修了。68年現代日本野外彫刻展に「位相・大地」を出品、「もの派」の先駆。73年環境美術研究所設立。78年ヨーロッパ三国巡回個展。「位相絵画展」日本巡回。多摩美術大学客員教授。**彫刻、立体、モノ派、版画**

関根美夫 (せきね・よしお/1922～1989年)

和歌山市生れ。1945年広島で被爆。48年自由美術研究会で中村真に師事、吉原治良を知り、54年の具体美術協会の結成に参加。58年ミッシェル・タピエの発案による「新しい絵画世界展—アンフォルメルと具体」に出品、59年具体美術協会を退会。63年読売アンデパンダン展にソロバンを描いた絵画を出品。50年代、60年代前衛美術運動で活躍。75年東京画廊で個展開催。65年長岡現代美術館賞。70年のジャパン・アート・フェスティバル、現代日本美術展、日本国際美術展に出品。75年「近代日本の美術」展(東京国立近代美術館)、東京で没、66歳。**洋画家、具体、版画**

関野準一郎 (せきの・じゅんいちろう/1914～1988年)

青森市生れ。青森中学時代から木版に熱中、又銅版画に興味を持ち、今純三に銅版画の指導を受ける。1935年第二部会にエッチングが入選。35年日本版画協会展に木版画が入選。38年日本版画協会会員。39年上京、恩地孝四郎に師事。リュブリアナ国際版画展で受賞。79年東海道五十三次が芸術選奨文部大臣賞。88年没、74歳。**版画家、洋画**

関野聖雲 (せきの・せいうん/1889～1947年)

神奈川県生れ。1905年高村光雲に師事し、仏教、神話、歴史に取材した木彫を制作。11年東京美術学

校卒。1920、21年帝展で連続特選。21年東京美術学校助教授～45年彫部主任教授、帝展などの審査員。作品に「鶯囀摩」「吉祥天」「聖徳太子」がある。作品審査報告中卒倒、東京で没、59歳。**彫刻家**

関彦四郎 (せき・ひこしろう/1888～1961年)

弘前市生れ。1909年東奥義塾を卒業後、早稲田実業学校に入学。東京美術学校に転入、白馬会研究所に通う。10年東京美術学校の予科、その後西洋画科に入り藤島武二教室に学んだが、卒業間近の15年中退して帰郷。北斗社の中心となり指導的役割を果たした。1961年没、73歳。**洋画家**

関谷雲崖 (せきや・うんがい/1880～1968年)

栃木県生れ。南画界の大家である小室翠雲に師事。文展入選3回、帝展入選4回など活躍し、1929年日本南画院院友。日本画家の横山大観と交流。息子は画家の関谷陽(1902-1988)。1968年没、88歳。**日本画家**

関屋啓次 (せきや・けいじ/生誕年不詳～1947年)

栃木県生れ。1904年東京美術学校西洋画科選科卒。明治末年より沖縄第一中学校で教鞭。17年同校退職。上京。1947年没。**洋画家**

関谷四郎 (せきや・しろう/1907～1994年)

秋田市生れ。森金銀細工工店で秋田の伝統工芸、銀線細工を学ぶ。1927年河内宗明に出会い、弟子入り。31年日本鍛金協会展に出品、38年独立、東京の本郷団子坂に工房を設立。63年伝統工芸新作展で奨励賞、65年日本伝統工芸展で優秀賞、65年伝統工芸新作展で優秀賞、教育委員会賞。68年日本伝統工芸展で総裁賞。73年新作工芸展20周年記念展で特別賞、76年同展で稲垣賞受賞、75年国指定重要無形文化財保持者に認定。東京で没、87歳。**鍛金家**

関保之助 (せき・やすのすけ/1868～1945年)

江戸生れ。東京美術学校卒、有職故実の資料、古武器の収集・研究者として知られた。1895年帝室博物館にはいり、33年東京帝室博物館学芸委員。母校東京美術学校や京都帝大でもおしえた。東京で没、77歳。**有職故実研究者、博物館学芸員**

関谷 陽 (せきや・たかし/1902～1988年)

栃木県生れ。大正-昭和時代に活躍した日本画家の関谷雲崖の長男。東京美術学校西洋画科卒。1930年代従軍画家。妻は同じく画家で従兄弟である関

谷富貴(せきや・ふき、1903-1969。晩年まで東京都世田谷区松原に暮らす。二科会に属した。1988年没、86歳。洋画家

関谷富貴 (せきや・ふき/1903~1969年)

栃木県生まれ。画家の関谷陽(せきや・よう/1902-1988)と結婚、世田谷のアトリエでは、夫の陽が二科展に出品しながら絵画教室を開き、富貴は画家の夫を支えた。生前、富貴は作品を発表することは一切なく、は、1950年代に制作されたと考えられるその作品は、鮮烈な色彩とイメージが画家の内面からあふれ出してくるような力に満ちたものです。20世紀という時代を生きた女性の内面が見事な造形表現として結実しています。2020年栃木県立美術館で関谷富貴の世界展。1969年没、66歳。洋画家

瀬崎晴夫 (せざき・はるお/1907~1977年)

兵庫県生まれ。御影師範学校卒。1925年上山二郎と交遊。29年渡欧。29年巴里でアリアン・フランセーズ高等科卒。岡鹿之助と同じアトリエで制作。その後サロンに度々入選。42年スウェーデンに移住、日本大使館に囑託、54年現地女性と結婚、スウェーデン王室アカデミー会員。ストックホルムで没、70歳。洋画家

瀬下ゆり子 (せしも・ゆりこ/1951年~)

長野県生まれ。2004年カンヌ国際芸術祭で最優秀作家に選出。ル・サロン永久会員。2019年グループリープ展で優秀賞(世田谷美術館)。洋画家

雪舟等楊 (せっしゅう・とうよう/1420~1506年)

道号は雪舟、法諱は等楊。備中赤浜(総社市)生まれ。臨済宗東福寺派の井山宝福寺で修行したのちに上京し、東福寺に入ったと推測されている。のちに相国寺において画を天章周文に学んだ。享徳3年(1454・雪舟35歳)頃に京都から周防(山口県)に移り、大内氏の庇護下において画房・雲谷庵を営んだ。音通する「拙宗等楊」と同一人物とする説が有力で、38歳頃に拙宗から雪舟へと改号したと思われる。応仁元(1467)年には遣明船で入明し、宮廷画家の李在に画法を学んだほか、文人らとも交流した。足掛け3年の滞明ののち、文明元(1469)年帰国し、大分で画房・天開図画楼を中心に活動を行っていたが、文明16(1484)年以前には山口へ戻り、以後同地を活動拠点として作品制作に励んだ。雪舟は多くの弟子を指導したが、やがて後世においてもその画系に自身を連ねる画家が出現するほどに慕われ、学ばれていく。室町時代後期の禅僧、水墨画家

雪舟(等楊) II (せっしゅう(とうよう)/1420~1506年)

備中赤浜生まれ。諱(いみな)は等楊(とうよう)。京都の相国寺に入り、画技を周文に学んだ。山口に画房、雲谷庵を開設。渡明を挟んで宋元画を広く学び、のち大分に天開図画楼(てんかいとがろう)を開設。自然に対する深い観照のもとに個性豊かな水墨山水画様式を完成し、後世に多大な影響を与えた。作「天橋立図」「山水長巻」。山口市で没、86歳。室町時代後期の禅僧、水墨画家

雪村周継 (せつそん。しゅうけい/生没年不詳)

茨城県生まれ。常陸国部垂(茨城県常陸大宮市)に、有力大名の佐竹氏一族の跡継ぎ。出家の理由は定かでないが、佐竹氏の菩提寺である正宗寺(常陸太田市)で十代より修行を積む。画もこの頃から始め、常陸太田の耕山寺に住す、祥啓の弟子である性安から学んだかと推測されている。その後、会津の蘆名氏や小田原の北条氏らを訪ね、牧谿や玉澗などの中国絵画を多く学んだ。東国各地を遊歴し、晩年は奥州三春(福島県田村郡三春町)に隠棲したのち、1580年頃までに没したと考えられる。その人物画は大胆な構成とユニークな形態で描かれ、山水画は細部の描写と構図に目を瞠るものがある。狩野永納『本朝画史』においては雪舟に私淑したと記され、水墨画の名品を多く学びながら、新意を創出した画家であったといえよう。安土桃山時代の画僧

瀬戸剛 (せと・ごう/1945~2020年)

長野県生まれ。彫刻家・瀬戸団治の4男。太平洋美術会卒。1993年日展会員賞。2004年日展で同文部科学大臣賞。長野市野外彫刻賞。西望賞。07年「エチュード」で芸術院賞。日展理事。日本彫刻会会員。彫刻家

瀬戸團治 (せと・だんじ/1905~1991年)

長野県生まれ。当初画家を志して上京。のち彫刻に転じ「タカホの首」が構造社展に初入選。戦後日展で特選、以後3回連続特選。日展審査員、評議員等歴任。穏やかな少年像や裸婦像は、作者の純朴な精神を感じさせる。日展出品等の代表作数十点が当館に寄贈された。彫刻家

妹尾一朗 (せのお・いちろう/1947~2015年)

宮城県生まれ。1971年上智大学文学部社会学科卒。72年東京芸術学園卒。75年ブロードウェイ新人展新人賞第一席、同ギャラリーと契約。太陽美術展銅賞。76年フランス国際展国際賞。ル・サロン交流展選抜。太陽美術展銀賞、太陽美術協会会員。77年日洋展

入選。ル・サロン展銅賞。絵本 宮沢賢治作「十力の金剛石」福武書店より刊行。2015年没、68歳。洋画家

妹尾正彦 (せのお・まさひこ/1901~1990年)

倉敷市生れ。1920年京城中学校卒。21年神戸高等商業学校卒。独学で絵画を学ぶ。27年「一九三〇年協会」展に入選。31年独立展でO氏賞。32年独立賞、34~37年独立美術協会会員。51年独立十人の会を結成。51年再度、独立美術協会会員。フォーヴィスムの旗手の一人。東京で没、88歳。洋画家

瀬野覚蔵 (せの・かくぞう/1888~1940年)

京都市生れ。松原三五郎に洋画を学ぶ。1907年上京、葵橋洋画研究所で黒田清輝、岡田三郎助に師事。10年文展入選。13年国民美術会会員。14年英米美術所煙会社の招きで上海にて働く。度々渡支。19年三越で個展。21年大阪三越で個展。38年従軍画家。40年没、52歳。洋画家

瀬本容子 (せもと・ようこ/1930年~)

倉敷市生れ。上京して自由学園女子部に学ぶ、帰郷、柚木祥吉郎に師事。再上京、武蔵野美術大学で絵を学ぶ。1962年渡仏、パリ留学中、中世キリスト教絵画や初期ルネサンス絵画の装飾的な様式美に魅了される。アイコンや初期ルネサンス絵画に倣い、金箔を施した下地に天然顔料と卵黄を混ぜた絵具で描く金地テンペラ画を今日まで精力的に制作。洋画家、テンペラ

芹川弘吉 (せりかわ・ひろきち/1891~1942年)

京都生れ。1910 関西美術院に入学、鹿子木孟郎に師事。11 年関西美術会第 10 回競技会で褒状。16 年第 3 回二科展に初入選、以後 9 回まで出品。36 年第 2 回京都市展に出品。42 年没、享年 51 歳。(佐) 洋画家

芹沢銈介 (せりざわ・けいすけ/1895~1984年)

静岡市生れ。東京高等工業学校図案科卒。柳宗悦らによる民藝運動に共感し、沖縄の紅型に出会い染色家を志す。独自の型染を完成。染色・装幀・挿絵など多方面で活躍。雑誌「工藝」の装幀、独自の装飾感文字紋は出色。1956年型絵染で国指定重要無形文化財保持者。1963年大原美術館内に芹沢館が完成。1984年没、89歳。染色工芸、装幀、挿絵、版画

千家 潔 (せんげ・きよし/1919~1994年)

東京生れ。詩人の千家元麿の次男。立教大学卒。ギリシャや日本の神話を題材にした作品を遺す。古代フレスコ画を連想させるかのような、独特の表現技法には、後期印象派へと通ずる。繊細、かつ柔らかなタッチと淡くも克明なる色遣いからは、鑑賞する者に

安堵なる余韻をもたらす。生涯在野画家。1994年没、75歳。洋画家

仙厓義梵 (せんがい・ぎぼん/1750~1837年)

美濃(岐阜県)出身。俗姓は井藤。諡号(しごう)は普門円通禪師。別号に天民、百堂、虚白。臨済宗。月船禪慧の法をつぎ、寛政元年博多(はかた)の聖福寺の住持となる。独特の戯画風の禅画を数おおくのこした。1837年没、87歳。作品に「寒山・拾得(じつとく)・豊干(ぶかんとん)図」など。江戸時代中期-後期の僧、絵師

千崎千恵夫 (せんざき・ちえお/1953年~)

広島県生れ。1979年東京藝術大学美術学部油画科卒。81年同大学院修了。86~87年日仏芸術家交流プロジェクトにより在仏。87~88年 ACC(アジア・カルチュラル・カウンスル)の奨学生としてNYに滞在。90~91年ケルン(独)のクンスト・ステーション・サンクト・ピーターでのアーティスト・イン・レジデンスに選ばれ滞制作。この間、東京の玉屋画廊やギャラリー21などで毎年個展を開催。彼の作品は基本的には木の枝をつないだり組んだりした物体やガラス、鉄や廃材などを組み合わせた構造物、さらに木炭によるドローイングなどによって構成されている。その作品のイメージは、たとえば素材の集合体によってもたらされる自然全体へとつながる広がりや喚起するものようだ。立体、ミクストメディア

仙名秀雄 (せんな・ひでお/1927年~)

長野県生れ。北野似悦に日本画を学ぶ。1946年北陸3県観光美術展で棟方志功賞。50年20周年記念独立賞。51年武蔵野美術学校油絵科卒。52年二科会新人賞、二科賞。58年慶應大学美術講師。64年フランス、ソルボンヌ大学留学(美学・哲学科)指導教授にサルトル、森有正(森政外の子息)。74年日仏現代美術展でフランス美術賞。79年世界美術学会出席(イタリアヴェローナ、ボローニャ大学)。90年富山大岩山日石寺(平安時代)石仏不動明王12 畳版画制作。日本画家

仙波均平 (せんば・きんぺい/1885~1977年)

東京生れ。1910年慶応義塾普通部卒。太平洋画会研究所に学ぶ。10年文展に入選。15~24年渡米、渡仏。サロン・デ・チュイルリーに入選。38~70年慶応義塾普通部教諭。77年没、91歳。洋画家、美教、版画

全 和鳳 (ぜん・わこう/1909~1996年)

韓国生れ。1929年朝鮮美術展覧会入選。45年須田国太郎に師事。49~95年行動展出品。47年京展

賞、51年行動美術賞。53年行動美術協会会員。77年パリ・ル。サロン展出品。82年全和鳳画集50年展。京都に全和鳳美術館設立。観音菩薩をテーマにした作品が多い。大津市で没、87歳。96年光州市立美術館で全和鳳展。**洋画家**

そ

宋 紫石 (そう・しせき/1715～1786年)

江戸生れ。長崎で熊代熊斐に師事、沈南蘋の画法を修め、清人画家宋紫岩に画法を学び、江戸に帰り、宋紫石を名乗る。沈南蘋の画風を江戸で広め当時の画壇に大きな影響を与えた。年刊。平賀源内著。国立科学博物館の展示。写真左の開かれている本が巻之五。1976年平賀源内『物類品隲』(ぶつるいひんしつ)全6巻の内第5巻「産物図会」の挿図を手がけ、『ヨンスン動物図譜』を模写している。山水・花卉に優れる。江戸の人。1786年没、72歳。**江戸時代絵師、南画家**

早出守雄 (そうで・もりお/1918～1971年)

長野県生れ。諏訪中学校で高橋貞一郎の指導を受ける。1940年東京美術学校図画師範科卒。50年日展で特選、のち委嘱。51年一水会展で一水会賞。52年一水会会員。生涯岡谷市に住む。長野県展審査員、信州美術会諏訪支部長をつとめ長野県下の美術界に尽力。71年没、53歳。**洋画家**

相馬其一 (そうま・きいち/1885～1966年)

新発田市生れ。1905年上京。白馬会洋画研究所に学ぶ。新光洋画会創立会員。19～20年帝展連続特選。21～23年渡欧。16年光風会展で今村奨励賞。22年光風会会員。白日会創立会員。浦和に教室を開く。27～28年再渡欧。長野県に疎開。長野県で没。81歳。(出典 わ眼)**洋画家、美教**

曹 良奎 (ジョ・ヤングユ/そう・りょうけい/1928年～消息不明)

韓国晋州市生れ。1947年晋州師範学校卒。48年日本に密航。49年武蔵野美術学校入学、中退。52年日本アンデパンダン展、自由美術協会展に出品。54年タケミヤ画廊で個展。55年自由美術協会会員。59年松村画廊で個展、安井賞展に出品。61年北朝鮮に渡る。67年まで日本向け雑誌に挿絵。以後、消息不明。**洋画家、挿絵**

添田定夫 (そえだ・さだお/1916～没年不詳)

神奈川県生れ。1936年第5回横展に初入選。37年神奈川県師範学校卒。新田尋常高等小学校に訓導として勤務。38年中西利雄に師事。40年鈴木保徳に師事。41年独立展初入選。55年第14回創元展、

第11回日展に初入選。59年前年の日展入選作で安井賞候補。60年創元会会員。65年文部省派遣ヨーロッパ美術研修。66年第1回神奈川美術展出品、以後招待出品。78年創元会会員賞。91年創元会50周年記念賞。ハマ展で朝日新聞社賞、また審査委員長を務める。ハマ展功労賞。(佐)**洋画家**

曾我尾武治 (そがお・たけはる/1899～1984年)

東京生れ。入谷高等小学校卒業後、1915年長原孝太郎に師事し、本郷洋画研究所に学ぶ。26年光風会展に油彩画入選。27年光風会展に出品。34年エッチングプレス機を入手。34年光風会展に銅版画を出品。36年二部会展に銅版画を出品。36年文展鑑査展、37年新文展、39年文展に入選。37年造型版画協会展に入選。40年西田武雄が社長の「廣山謄写版インキ製造所」に今純三・関野準一郎とともに入社。40年の「日本エッチング作家協会」設立に参加し、評議員。40、42年日本エッチング作家協会展に出品。49年桶川中学校で教鞭。59年「日版会」の設立には、棟方志功・永瀬義郎らと参加。1984年没、84歳。**版画家、洋画家**

曾我蕭白 (そが・しょうはく/1730～1781年)

京都生。姓は三浦、名は暉雄、暉一・暉鷹とも称する。字は師龍、通称を左近二郎、別号に蛇足軒・鬼神斎・如鬼等。高田敬輔に学ぶが、自ら曾我蛇足十世を名のり室町時代の水墨画を慕う。池大雅とも交友があり、奇行の逸話を残している。1781年没、51歳。**江戸中・後期の画家**

十亀広太郎 (そがめ・ひろたろう/1889～1951年)

大阪生れ。1908年関西美術院で鹿子木孟郎に師事。同院展競技会三等賞。12年「プライム会」結成。14年二科賞。19年上京、太平洋画会研究所で学ぶ。水彩画中心に制作。22年平和記念東京博物館で褒状。42年二科会会友。日本水彩画会会員。51年没、62歳。**水彩画家、洋画家**

十亀広太郎 II (そがめ・ひろたろう/1889～1951年)

大阪生れ。1907年大阪府堺中学校卒業。08年関西美術院に入学、鹿子木孟郎に師事。09年関西美術会第8回競技会で褒状。10年同美術会第9回競技会で三等賞。14年第1回二科展で二科賞。19年上京、太平洋画会研究所に学ぶ。22年平和記念東京博覧会で褒状。日本水彩画会会員。戦後は日本水彩画会展のほか美術団体連合展などに出品。51年没、享年62歳。(佐)**水彩画家、洋画家**

十河 巖 (そごう・がん/1904～1982年)

兵庫県生れ。朝日新聞社に勤める。音楽鑑賞団体「勤労者音楽協議会」(労音)の立役者の一人である。十河巖と吉原治良の関係;1952年に関西の様々なジャンルの作家によって結成された研究会「現代美術懇談会(ゲンビ)」に加入。53～57年まで、例会や毎年一回ゲンビ展を開催その頃絵画出品。大阪朝日会館長。定年後サントリー宣伝部所属。「裸の大生様」で1957年芥川賞。1982年没、78歳。 **新聞記者、著述、宣伝**

曾根光子 (そね・みつこ/1955年～)

神奈川県生れ。1979年武蔵野美術大学芸術デザイン学科卒、79年ルナミ画廊等で個展、81年神奈川県美術展立体造家部門入選。81年版画に立体をとり入れた作品で西武美術館版画大賞展大賞。 **ビジュアル、インスタ、造形、版画に造形を取り入れ**

園田康成 (そのだ・やすなり/1934年～)

長崎県生れ。1957年長崎大学学芸学部図工科卒。58～62年光風会入選。70年モダンアート展入選、奨励賞、モダンアート展選抜新人展、73年会友、77年会員。70年西部朝日美術展入選。72年長崎県展文部大臣賞。72～74年西日本美術展入選。73年長崎県美術家連盟展出品。 **洋画家**

園山幹生 (そのやま・みきお/1948年～)

島根県生れ。1971年金沢美術工芸大学油画科卒。76～78年米・南米・ヨーロッパ遊学。81～96年個展(新宿小田急)以後12回。88年個展(サンパウロ美術館)、グランクルース勲章(文化功労章)。91年美に生きる(テレビ東京)園山幹生の世界。94年記念切手「出雲の阿国」制作。日本美術家連盟会員・無所属・サンパウロ州名誉州民。 **洋画家**

曾宮一念 (そみや・いちねん/1893～1994年)

東京生れ。1916年東京美術学校西洋画科卒。19、21年光風会で今村奨励賞。25年二科展で樗牛賞。31年二科会会員、35～37年独立美術協会所属の後、46年国画会会員。65年視力障害により会を退会。画業を廃した後も文筆家として活躍した。富士宮市で没、101歳。(出典 わ眼) **洋画家**

染川省三 (そめかわ・しょうぞう/1957年～)

長崎県生れ。長崎大学教育学部美術科卒、私立瓊浦高等学校美術科非常勤講師。横浜市立根岸中学校非常勤講師、横浜市立本郷養護学校非常勤講師。86年横浜市立鶴見工業高等学校美術科教諭。88年スペイン・バルセロナへスペイン在住。 **洋画家、美術**

染木 煦 (そめき・あつし/1900～1988年)

東京生れ。1919年開成中学校卒。葵橋洋画研究所に入所。25年三科 2 回展に出品。27年東京美術学校西洋画科卒。東美西洋画科同級生と「上社会」創立。34年第 2 回東光会展に出品、以後、4 回展まで出品。南洋群島へ渡航。帰国後、日動画廊で染木煦南洋作品展開催。エッチングの制作開始。41年「北満民具探訪手記」上梓。45年「マイクロネシアの風土と民具」上梓。63年仏像彫刻・木版画 染木煦個人展を丸善画廊で開催、以後、65年、68年、70年にも同画廊で開催。72年シルクロードを巡る。73年日動画廊で個展開催。74年中南米を旅行。1988年6月18日没、享年88歳。(佐) **洋画家、版画、彫刻**

曾谷朝絵 (そや・あさえ/生誕年不詳～)

神奈川県生れ。東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修了後、2006年東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻にて博士取得。98年「東京藝術大学卒業制作」サロン・ド・プランタン賞、取手市長賞、0氏記念賞。2000年「JACA 日本ビジュアル・アート展2000」準グランプリ。01年「VOCA 展で VOCA 賞(グランプリ)」。12年「CS Design Award」優秀賞。14年文化庁新進芸術家海外研修制度によりNYに留学。 **日本の洋画家・現代美術家**

曾山・大野幸彦 (そやま・おおの・さちひこ/1860～1892年)

鹿児島県生れ。1878年工部美術学校に入学。サン・ジョヴァンニの指導を受け、80年画学助手、83年修業証取得、工部省御用掛を拝命。84年私立の画学専門美術学校を堀江正章らと興す。その後自宅に私塾を開き、指導にあたった。曾山の指導は鉛筆やコンテで石版画や石膏像を模写させる厳格なものだった。89年明治美術会の結成に参加。90年内国勸業博覧会出品褒状。1892年没、33歳。 **洋画家、美術**

曾山節雄 (そやま・せつお/1926～1963年)

1926年生れ。ドローイング、鉛筆、コラージュ。1963年没、37歳。 **洋画家、鉛筆、コラ**

楚里 清 (そり・きよし/1952年～)

広島県生れ。1978年愛知県立芸術大学卒、80年同大学大学院を修了。82～87年愛知県立芸術大学非常勤助手。日本画の手法を用いながらも、西洋画的な描写による作風。動物を題材にした作品が多い。日本美術院院友。河合塾美術研究所勤務。2015年春の院展入賞。 **日本画家**

